

救世主っぽい個性を手
に入れたぞ

螺鈿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

久々に映画見てたら思い付いて投稿。多分続かない

目次

救世主っぽい能力を手に入れたぞ	
1	
意外と子供の方が気を使うもんなんだぞ	
6	
注文なんてのは大体でいいんだぞ	
14	
自分が目指しているポジションが先取り	
されてることもあるんだぞ	
19	
それをな、人は八つ当たりというんだぞ	
24	
趣味が似てる奴とはあまり深い話をしない方がいいぞ	
36	
独断ってのは大抵失敗するんだぞ	
44	
キャラっていうのは大抵自分じゃなく他人が決めるもんだぞ	
54	
演出なら多少の脚色も許されるんだぞ	
61	
見せ場ってのは自分だけとは限らないんだぞ	
67	
自分が思ってるより人は人を見ていないぞ	
75	
結構自分を見てくれてる人もいるんだぞ	
86	
ENTER THE ACADEMI	

A； 緑谷出久

悪気はなかったなんて言っ
て心底納得す

自分で選択出来ている物事
なんて殆どな

る奴はいないんだぞ

いんだぞ

完璧という言葉ほど信用出
来ないものは

期待つてのはなるべく応え
た方がいいん

ないんだぞ

だぞ

115

新人つてのは結果じゃない
んだぞ？

125

社会には敵ばかりじゃない
んだぞ

133

最初の印象が悪い人ほど仲
良くなれるん

だぞ

149

予定通りにいかないのは予
定通りだぞ

167

194

187

救世主っぽい能力を手に入れたぞ

吹き荒れる雨の中、一人の青年が歩いてきた。滝の様に流れ、周囲のビルに打ち付ける風に背中中のマントを揺らし、それでも尚揺らぐことの無い足取りは彼の性格を表しているかのようだった。

自然が産んだ風と、人が作った建造物とが悲鳴をあげる以外に音はない。本来点いているであろう灯りもないその姿は、東京という世界でも有数の都市にはあり得ざるものだった。

それでも人がいないわけではない。青年の行く道には人が並び、その視線は全て青年一人に集中している。雨に濡れることを気にせず、上等のスーツとサングラスは闇に溶け込むようで、しかし微動だにせず見守るそれらは全て同じ顔だ。見れば、ビルの中も彼等で埋め尽くされている。その異様な光景にも青年は何も驚くことはなく、ただ握りしめる拳の力を強めるだけだった。

まるでモーゼのように、黒い海を渡った青年は、一人の男の前に辿り着く。これまで見てきた顔と同じ、かつて友と呼んだこともある男の顔だ。

「Mr. 緑谷, Welcome back」

緑谷と呼ばれた青年は足を止める。

「我々も待ちわびていたよ。どうだ、壮観だろう?」

周囲を見渡すように言う黒い男に青年は一言だけ返す。それ以上の言葉は必要なかった。

「今夜で全てが終わる」

「知っている。既に結末を見たからな」

その不可思議な、確信めいた物言いにも動じない姿は、かつて誰もが抱いていた英雄の背と同じであった。

「だからこうして、そろって高みの見物だ。勝つのは私と皆知っているからね」

緑谷と呼ばれた青年は知っていた。もう自分以外の英雄はいないことを。100万を救う天使も翼を失い地に堕ちた。未来を見通し、希望に導いてくれた卿も最早いない。それどころか、世界にはもう自分以外の人類はおらず、英雄も、敵も、全てが等しく「彼」になってしまったことを彼は理解していた。

最早誰に望まれぬとも、彼は英雄として此処に立っている。恩師に貰った「英雄になれる」という言葉を抱き続け、今やかつての師を遥かに超えた力と受け継いだ心で彼はここにいる。たとえ、どれだけ絶望的で、勝ち目のない戦いだと分かっている、最後に残った英雄としての責任を果たさずにはいられなかった。

向かい合った二人が走り出す。互いに分かっていた、両者の力には殆ど変わりがない。そうであるならば、差を分ける決定的なものをどちらが有しているかも。

ほんの一瞬で二人の距離が近づき、握りしめた拳が互いに突き刺さり……

|| || || || || || || || || ||

実は俺には前世ともいえる様な不可思議な記憶がある。まあ名前も思い出せないよ。うなおぼろげな記憶ではあるが、とりあえず前世の俺は別世界の人間で、映画好きだということは分かった。そのなかでも特に好きだったのがM A O R I Xとかいう映画で、これだけはやたら記憶が鮮明である。シリーズを脳内再生できる位なので、俺も好きになつてしまった。

話は変わるがこの世界には個性という超常的な力が存在する。幼いころはこの脳内再生が俺の個性だと思っていたがどうも違ったらしい。

小学生の頃、目の前で交通事故があつた。衝撃で飛び散ってくる破片を目にして「ああ、このまま死ぬんだな」と思った瞬間、視界の全てがスローになつた。

最初は走馬灯みたいなもんかと思ったが、スローになった視界の中で、なぜだが鋭敏になった感覚が避けられると俺の体に伝えてきたのだ。それに従い上半身を動かし、全ての破片を避けたのだ。後でそれを見た人からは「あんなに早く動ける人間みたことない」と言われた。まあ幼い体でそんな動きをしたらどうなるか……結局おれは病院送りになったのだが。

とりあえず俺は集中すると感覚が劇的に向上し、まさしく俺の好きな映画のバレットタイム中の様になるのだ。この個性に気付いた時、俺は決意した。

——俺も救世主ネオの様にカッコよくなる、と。

男のロマンなのだ、アホだと言われても仕方ない。俺は両親に頼んでカンフーの道場に通わせてもらい、必死に体術の修行に励んだ。なけなしの小遣いで黒いレザーの服やサングラスも買った。そして見た目に反して芳しくない頭だったが頑張つて勉強に励み、雄英高校を受験したのだ。

筆記は（多分）合格、実技は文句なし、後は併願の兼ね合いもあり、形だけの個人面談だけだ。

「準備は出来た？ 角人」

「待つてよマママン」

母に言われて黒い無地のスーツを着込む。中学は私服だったので母が用意してくれた。

やはり黒はいい。気分はあの世界の侵入者である。ヒーローになったらコスチュームは絶対ネオと同じにするんだという気持ちがいよいよ強くなった。ぎゅつとネクタイを締め、ピンを止める。なんとなくだが、サングラスをかけたくなって机から取り出す。

余談だが、俺は中学の頃から老け顔と呼ばれている。なんとなく物事を見極めてるっぽい雰囲気醸しだしてうざがられてるのもそれを加速しているのか、よくこんなことを言われた。

『雄英？ お前顔だけなら絶対敵なのにな』

上記は友人の談であるが、中二な病にかかり続けている俺は大人っぽいという言葉に脳内変換していた。しかし今、サングラスをかけた自分を鏡で見て絶句する。イギリスチックな顔立ちに黒いスーツとサングラス、これは自分が今まで思い描いて演じてきたキャラではない。これは……

「めっちゃエージェント・ス〇スやん」

三済 角人（ミスミ スミト）、雄英学園新一年生である。

意外と子供の方が気を使うもんなんだぞ

「いやー今年の入試も荒れたねえ」

「まあいいんじゃない？ 合格枠は予定だし、辞退者だっているんだから多少増減しても」

「どうせ減るしねえ」

「何だよ」

「いや何でも」

「入学者を選定する会議も一通り終わり、ワイワイと雄英高校の教員たちは雑談にふけていた。

「ところでお前ら気になったヤツいる？ 俺は勿論あのBOYさ」

「あーOPふっ飛ばしたやつね。確かに初心っぽくていいわね」

「ああいう派手なのを抜いても今年は地力がありそうなのも多くて、鍛えがいがありそうだな」

「あんたはどう？ 気に入ったやついた？」

雑談から離れたところに一人、マフラーのようなもので身を包んだ蓑虫を強引に引き

寄せると、彼は口を開いた。

「まあ英雄だけあってどいつも個性は強力だな。それだけだが」

「U h n n n n n n n n ! 辛口だな君は！」

「だが既にある程度出来上がっているのもいただろう？」

体格のよい教員がモニターをいじるとそこには幾人かの生徒が映し出される。そのどれもが合理的に動き、仮想敵を数多く屠つていく。その中の一人に蓑虫は目を止めた。

「まあこいつ位だろう。やや機械的すぎる気もするが」

「あら、アンタが褒めるなんて珍しい」

「俺は結果を出す人間は評価する。合理的にな」

モニターの中の黒いスーツを着た受験生は凄まじいペースで敵を倒していく。身体能力を増幅する類の個性なのか、繰り出される拳はコンクリートや鉄の機械の体を砕き、その動きは傍目から見ても酷く合理的で、いつそ彼の方が機械なのではないかと思わせるほどだ。

「ああ、確かにコイツはいい！俺も自分のとこの生徒になったら徹底的に叩きこんでやりたいところだ」

「あら、共感してるのブラドキング？」

「体術をやり込んでるやつにはちよつとはな。鼻肩はしないつもりだが」

「いやそつちじゃなくて……」

「俺はまだフサフサの30だ！」

「……落ち着けよブラド」

「黙れ！ 何の対策もしてないくせにもじやもじやのお前に言われたくない!!」

「誰も頭の話なんて……」

「そうだよ、君もまだまだだろう。というかわたしのほうが……」

「気を抜いたらすぐに来る、そういう年齢なんですよ！ オールマイトはもういい年なんだからいいじゃないですか！ ていうかその歳にしてはしっかりしてる方じゃないですか！」

紛糾する会議にため息をもらし、蓑虫はまた一人輪から外れた。

「彼とブラドくんを一緒のクラスにするのはやめた方がいいねえ」

小さなネズミが蓑虫に囁きかける。となれば、彼の担任が誰になるのかは決まったよなものだ。それを悟り、一つ溜め息を吐く。

目の前のモニターには以前彼の風景。巨大敵が出てきて逃げ惑う者が多い中、彼は他の有望株と同じく最前線に残り、効率的に競争相手が減った敵を狩っていた。

最前線に残るにはリスクが伴う。巨大敵が崩し落とした建物の破片がフィールドに

降り注ぐ中、彼は残像が伴う程の動きで破片を躲し、ポイントを積み上げていった。

やがて試験が終わりを告げ、引き千切り手に持っていた仮想敵の頭を落とした。そして偶然かそうでないのか、見上げた先にあるモニター越しに目が合う。

その目は、何の感情も映していない癖に、酷く人間的な欲に塗れた目をしていた。

|||||

今日から雄英高校生である。そんな気持ちでルンロンと校内を歩いているが未だに目的の教室に着かない。広すぎんだろこの高校。

初日ということもあり、かなり余裕をもって家を出てきたのに遅刻とか馬鹿にならない。ルンロン気分が焦りに変わる。標識もあるし、迷ってはな筈なんだけどもなあ。

「ちよつといいかしら？」

振り向くとキュートなカエルっぽい女の子。これがボーイミーツガールか。言われてみればどことなくトリ○テイっぽい気もしなくもない。

「なにかね？」

内心キョドリながらも極めて紳士的に対応する。高校生になつたらネオの如くアダルトテイで大人な青春を過ごすのだ。その為には童貞めいた香りをまき散らす訳にはい

かない。

「私、新入生なの。指定された教室に向かっているのだけど一向に着かないから不安で確かめたくって……。先輩なら知っているかと」

「奇遇だな、私も新入生だ」

俺の言葉に驚くトリニティ（仮）。少し大人な雰囲気を出しすぎてしまったか？

「そうだったの。全くそうは見えなかったから」

「……いや、構わんよ」

「あ、ごめんなさい。私思ったことは口に出ちゃって」

「気にしない、それより早く教室に行こう。私も思っていたが、ここは広すぎるからな」

「……そうね」

中学生の頃から老け顔と呼ばれているのでこの手の事は慣れている。隣を歩くトリニティ（仮）はちらちらと俺の顔より少し上を見ながら「言っではいけないこともあるのよ梅雨、耐えなさい」等と言っている。人に気が遣える凄くいい子だ、多少相手の見た目を間違っつて判断したからといって俺は全く気にしないのだが。

「そういえば名乗っていなかったな。私は三済 角人。1—Aだ」

「私は蛙吹 梅雨。同じクラスだったのね、私のことは梅雨ちゃんと呼んで」

「そうか、M s. 梅雨。私のことはスミスと呼んでくれ」

ちなみにスミスは中学からのあだ名だ。

「梅雨ちゃん」

「……………」

「梅雨ちゃんてよんでね？」

黙々と歩みを進める。童貞たるこの俺に女の子をちゃん呼びとは無理を仰る。救世主たるネオだつてパーセフォニーにグイグイ来られたらちよつと引いてたし、しゃあない。

それにしても、梅雨ちゃんはなにか罪悪感を感じるかの様に目を伏せている。俺はイギリス人の血が入っているのに加え、鍛えてるのもあつてエライガタイが良い。そのせいか初対面の人間にはやたら威圧感を与えてしまうから気を付けろと友人のジョーンズやブラウンにはよく言われていた。しかし気を付けろと言つたつて何が出来る訳でもなく、とりあえず無意味に笑つてみると、ちらほらといた他の学生たちが海を割つたかの様に道を空けた。

「着いたな」

「でつかい扉ね」

ついに目的の1—A教室に辿り着く。最初はドキドキを楽しんでいたが、会話を持た

せるスキルなどないので途中からははよ着いてくれと思っていたよ。

ドア越しにも喧騒が聞こえてくる中、ガラガラと扉を開けると――

「机に足をかけるな！」

「テメーどこ中だゴラァ！」

ここは本当にエリート校たる英雄なのだろうか。僅か1日で学級崩壊しているじゃないか、もうやだスミス怖い。

「……ハッ！ 教師の方がいらっしやっただぞ、皆席につけ！」

「よく見ろメガネ、こいつも制服着てんだろうが」

なぜかクラス全体に静寂が訪れる。オレか、俺のせいなのか？

「こ、これは済まない。動揺した。余りにそうは見えなかったから……」

「しようがねえよ、俺だって一瞬そう思ったわ。つーかお前急に出てくんや、ああ?!」

眼鏡くんが落ち着きを取り戻すと同時にヤンキーに絡まれる。中学ではこういう感じの人がいなかったから対応に困る。中学じゃ俺が通るとなぜか皆目を逸らしたし。

「ああ三済 角人だ。よろしく」

「私は蛙吹 梅雨よ」

とりあえず挨拶をすると固まった皆も動き出して取り囲んでくる。主に話しかけられてるのはオレではないが。

「蛙吹さん、大丈夫？」

「怖くなかった？」

いつの間にかオレと梅雨ちゃんは離されている。悲しい、やはり彼女はトリニティではなかったのか。

「芦戸 三奈だよ、ヨロシクね」

近くにいた子の一人が挨拶をしてくる。そうか、彼女がトリニティだったのか。

この短い間でインパクトの強いイベントが重なりすぎてどうも頭がパンクしてしまった。しばらく自分の机でグエンドウポーズで固まっていると、いつの間にか教壇に寝袋に包まった見知らぬ不審者がいた。

「はい、静かになるまで……意外とかかんなかったな、合理的じゃあないか」

なぜだか好感触な意見を述べてくる糞虫はどうやら担任らしい。体育服を渡されると入学式もなしに個性把握テストをやるようだ。

黙々と着替えているとメガネとヤンキー君がまた会話している。意外と仲良いな君たち。

「……アイツの方が先生ぽかったな」

「それは言っではいけない」

ちなみにその後のテストという名の体力測定は普通に好成績だった。

注文なんてのは大体でいいんだぞ

対人戦闘訓練の時間が来たぞ！ というよりコスチュームが届いたぞ！ これはテンション上がりまくりですよおおおおお!!

そんなこんなで訓練に合わせて要望を出していたヒーロースーツが届いた。周りの皆もウキウキで喋り合っている。オレ？ 喋り合う人なんていませんけど？ 入学してそれなりにたつてグループも出来てきている。しかしその中に俺の居場所はない。なぜ、なぜこうなった!? 中学では少ないが、ブラウン君とジョーンズ君という友人がいて、いつも3人で行動していた。決して、決してコミュニケーション能力に不安があるわけじゃあ……

スーツが入っている鞆を抱える。思わず涙が溢れてしまいそうになるが耐える。ミス強い子だもん。

気を取り直して鞆を置く。この中に俺の夢への第一歩、ネオコス(映画1作目仕様)が入っている筈だ。きちんと要望に、忠実にネオを再現した絵を載せていたので問題は無い筈。実用性を考えて、サングラスには通信機能も持たせるようにしておいたのでヴィジュアルだけの浪漫物ではない。

ドキドキと高鳴る胸を抑え込んで、詰め込まれた夢の鞆を空けると……そこには黒、黒、黒！ うーん、いいですねえ！ しかしよく見ると夢の宝箱には不似合いな、見覚えのある物が入っている。

「……………」

ひらりと落ちてきた紙を見ると取説であった。要約すると下記の通り。

・ウールとレザー調の黒の素材が今無いから入学試験の映像を元に、スーツにしておいたよ。

・防弾、防刃で高温にも耐えられて動きを阻害しない多機能スーツだよ

・高性能サングラスも付けとくよ

・通信機能はサングラスと分けたからこのプラグ使つてね

・銃は検閲あるから仮免取得まで持てないよ。どうしても持ちたかつたらゴム銃あるからサポート科来てね

・なんか気合入った絵描いてくれたけどネクタイ付けとくから許して（はあと）

「DAMN IT!」

ボタンと鞆を閉じると周りが静かになり、視線が集まる。それを無視して自分のロックスカーにズンズンと進み、鞆を放り込んだ。そして代わりに取り出したるは自分で買ったネオなりきりセット（AMOZONのパチモンではない）。只でさえエージェント要素

が強いのにこれ以上あっち側に寄せてたまるか。

決意を新たに、オレはサングラス（ネオ仕様）をかけた。

「始めようか有精卵共!!! 戦闘訓練のお時間だ!!!」

今日はオールマイトが担当だ。しかしやっぱり画風が違うな、かつけえわこの人マジで。

「良いじゃないか、カッコいいぜ皆！ 自信を持って、まだまだ大丈夫さ!!!」

なぜかオレの方を向いて言ってくる。今日の俺は自前のネオ仕様の服に加えてワックスで固めた頭だ。そうか、そんなに決まってるか。憧れでもあるオールマイトに言われると思わずにやけてしまう。……あつ、目逸らされた。

「すっげえな、まるで映画みたいだぜ」

話しかけてくれたのはウエイ上鳴。その名の通りうえーいな奴だ。コスチュームもなんかホストっぽい。

「ありがとう」

「でもなんか敵みたいだけだな」

「そういやコイツのコスは黒の素材使われてんな。そうか、コイツにオレのコス分を使われたのか……」

まるでザイオンに住む人間の悪臭を憎むように敵意を向けると上鳴は何処かに行つた。クソツ、この戦闘訓練で相手になつたら覚えてろよ。

「さあ、組み合わせの時間だ！」

「どうやら今日は2対2の訓練らしく、組み合わせが発表される。誰でもいいけど、友達に……とまでは言わないから仲良くやれるといいなあ。」

組み合わせを見ると俺の相棒は障子くんという人らしい。目を向けると触手で挨拶してきた。やっべ、怖いんだけどこの人。

「ビビりながら挨拶を交わすと作戦を話し合いたいらしい。コミュニケーション力たけえなこの触手。」

「……という感じで行こうと思う」

「いいんじゃないか。建物の図面的に、注意すべきポイントはこの辺りだろう」

「なら侵入経路はこれでいいか？ 三済はどう思う？」

「基本的には。しかしお互い力に優れた個性だ。場合によっては無理やり道を作れることも頭に入れておこう」

「ああ、そうだな」

一方的に話すのではなく、相手の考えも引き出しながら話を進めてきた。論理的だし、話しやすいし、すげえわこの触手。何かオレ以上に絡みづらそうなのに、なんでコイツは昼飯一緒に食べる相手いるのとか思ってたごめんさい。

「そういえば、俺の個性はさっき言った通り肉体の器官を複製できる触手だが、お前のはどうなんだ？ 肉体強化系なのは分かるが……」

「俺か。俺は集中することで感覚を強化するものだ。肉体は普通に筋トレしてたら強くなつた」

「そうなのか、俺も筋トレはよくする。よかつたら今度一緒にやらないか？」

「……ああ、そうだな」

「やつべ、ここにきて初めて同級生っぽい会話が出来た。スミス泣きそう。やつべ触手はすげえわ。」

「それにしても、三済は案外話せるヤツだったんだな。正直、少し気後れしていた」

「……スミスでいい」

「？」

「スミスと呼んでくれ」

「拜啓、マママン。お友達が出来ました、今度サングラスあげようと思います。」

自分が目指しているポジションが先取りされてることもあるんだぞ

ついに我らエージェント、じゃない救世主側の番がきたぞ！ オレと障子君が攻撃側で、防衛側が尻尾生えてる尾白と見えない葉隠である。相手側の分析？ 今ので出尽くしたわ。

「いくか」

「ああ」

会話すくねえな。まあ集中モードに入ってるっぽいしな。そういや俺の能力は集中すると感覚が強化されるとか言ったけど、実際はよく分からのよね。肉体も常人以上だし、意識しなくても結果的に最適な動きを体が勝手に行うこともある。どう考えても筋トレの効果以上に体がアップグレード強化されることもあるし。結論すると、なんかそれっぽい動きが出来るというところで。

レンガ調で出来た古い建物の中を、障子君が耳などの感覚器官を触手から生やして索敵を行いながらズンズンと進んでいく。初見はグロイと思ったけど、慣れるとなんだか愛嬌も感じられる。印象って大切だね。建物は敵が潜んでいそうないかにもな古っ

ぼく作られて、そこら中に穴が開いている。死角も多いし、潜む場所は多そうだ。

「ここで途切れてるな」

障子君が触手で止まれと促す。あたりを見回すと成程といった場所だ。

「挟撃するならこの地点ということか」

「そう思わせての足止めかもな」

「どちらも想定範囲内だが」

大部屋同士を繋ぐ長い通路。奥の階段を使うにはここを使うしかない。図面で二人で警戒していた通りの場所だ。セオリーではあるが、それ故に対応次第で幾らでも局面が変わる場でもある。

「どうする?」

「予定していた通りに」

障子君に聞かれて無意味にキリツと答えると、障子君はこっそりと触手である場所を指し示す。俺はそこに手を伸ばし……

「キャツ! なんぞえ!」

壁をぶち抜いて奥にいた葉隠を掴む。壁と壁の間に構えてこちらの動きを逐一相棒に報告していたのだろう。こと諜報に関してはこれ以上ない個性だが、こちらの障子君も索敵に関しては中々のものだ。

俺はコンクリの壁をまるで段ボールかの様に腕を突っ込んで壊しつつ、葉隠をがっしりと捕まえて引きずり出した。元々は大体の位置を攻撃して炙り出す予定だったんだけどまさかのドンピシャだった。嬉しいけど、なんかエーエージェントっぽくてやだな、この行動。

「やあ、会いたかったよ」

葉隠がもがくが強靱なこの肉体相手だと無意味だ。しかし凄い個性である、こうして目の前においても本当に透明で何も見えない、掴んでいる感触や声以外、葉隠を全く認識出来ない。

「さっさと捕まえよう」

障子君が捕獲テープを出すのがっしりとホールドした両腕から更にもがく感触が伝わってくる。

しかし柔らかいな、これが女の子か。初めて感じる感触に胸を高鳴らせていると、オレはとんでもないことに気付いた。

（あれ？ 葉隠って服は透明化出来ないんだよな。なら目の前のコレは……）

あ、あかん。これはあかん。まるで幼子が冒険的な啓蒙を得たかのような真実に目覚めると、オレの体は石化を喰らった不死人のように動かなくなってしまった。以前読んだ同人誌的な展開が頭をよぎり、邪念を払う為に頭の中で「ネオはそんなことしない」と

必死で唱える。

オレの様子に違和感を覚えたのか、障子君が呼びかけようとするが、その瞬間分かりにくい表情を変えて触手が叫び出す。

「スミス！」

次の瞬間体に物凄い衝撃が来て吹き飛ばされる。通路から大部屋に戻され、宙に浮かんでいる時間が終わると床を捲りながら大の字で滑っていく。大した威力だ。顔を向けるとそこには尻尾を振り切った尾白。

「一旦退こう。葉隠さん」

「OK、尾白くん」

ここで葉隠を見失ってはまた振出である。追わせんとする尾白と対峙する障子くんを俺は呼び止めた。

「私が相手しよう、君は追いたまえ」

両腕を地面に叩きつけ、その反動で映像が巻き戻されるかのように立ち上がったオレ。高級品であるサングラスを傷つけないために懐にしまいながら言う。

只ならぬ俺の雰囲気、障子君は領いて葉隠を追って行った。尾白は先程の一撃を喰らって平然としているオレに驚きつつ、障子くんを行かせんとする。

「いいのかね？ 集中したまえ、君の目的に」

なんか適当なこといつて尾白の気を引かないや。

「役割を果たしたまえ。それが出来ないモノは、消去される」

障子くんを無視して俺に集中する尾白。俺に領きつつ障子君は葉隠を追って階段に向かう。なんかそれっぽい雰囲気だけど、ぶっちゃけ葉隠見つけるとかオレには出来ないから放り投げただけなんだけどな。

尾白と対峙する。見た目から分かっていたけどこいつも武術やってるんだな。相手も歩き方からそれを察知していたのか、尾白はにやりと笑って構えをとった。……なんかネオっぽいやん。

空手っぽい武術が入り混じった構えをする尾白は、奇しくもモーフィアスと訓練してたネオっぽい構えをしていた。胴着姿も相俟ってますますネオっぽい。インパクトの強い黒に捉われ、こういう路線をすっかり失念していたオレは悔しきで拳をギリギリと握りしめた。せめてもの反抗に、ここはモーフィアスのあの構えで対抗する。オレはモーフィアスも好きなのだ。

救世主たるべく必死に努力してきたのにこんな形でネオポイントを搔つ攫われるとは、コイツは今の内に叩きつぶさなければならぬ。オレは確固たる決意をしたのであった。

それをな、人は八つ当たりというんだぞ

その堂に入った構えにお互いに一通り「出来る！」とか感じて楽しんだ後、尾白は跳ねる様に懐に飛び込んできた。

次々と繰り出される拳。それを捌く、捌く、捌く。武術というのは肉体を使う以上、どんなものにも共通する型やリズムというものがある。双方が武術に通じているのなら、今の様にアクション映画の様な攻防を行える訳だ。

殴打のリズムが一定のところに来たところで一旦距離を取る。今のはウォーミングアップと同時に相手の力量をお互い探っていたのだ。その結果は尾白の笑み。慢心ではなく、全力を出しても大丈夫という確信を持たせたことによる、漢の笑みだ。

尾白は構えを変え、ステップを刻み始める。型を攻撃にシフトしたのだろう。空いた右手でちょんちょんと鼻をイジる。所謂ブルーなスリーのアレだ。男ならやりたくないよな、分かる。それに対し俺は例の手をクイクイつとして挑発する。これも浪漫よね。

尾白から再び攻め始める。今度は威力の高い蹴りも織り交ぜて、こちらの体勢を崩し

にかかってくる。その速度は速く、ちゃんと力を乗せており、防御してもこちらを固まらせる威力を持っている。それに型通りではなく意表を突くような動きも加えている。当たり前、ちゃんと実戦であることを考慮している。

俺は連撃の途中の蹴りを苦し紛れに掴み取り、スクリューの如く相手を回しながら放り投げる。

「Good!」

投げた尾白が地面に伏し、攻防が途切れた所で話しかける。

「慣れも早い、パワーもスピードも十分、機転も利く。しかし、問題はテクニクではない」

これが言いたかった、でも本当に言いたかっただけなんだ。それっぽいこと言っただけ、これ多分尾白の方が武術的には上かも分からんぞ。先程のセリフも相俟って何か格上の雰囲気醸し出しちゃうけど、予想外である。まさか肉体的にはかなり上位だと確信できる俺に喰らいつく程の武闘家だとは！ ぞないすんべコレ！

尾白は何度か頷くと、再び攻めてきた。あかん、守ってばかりじゃやられる、オレもモーフイアスっぽく構えてないで攻めなくては！

カンフー的な動きで相手の攻撃を捌き、撃つ。相手が蹴りを撃ってきたら蹴りを、拳なら拳を、基礎的な肉体能力に優れているのはオレらしく、なんとか対応できる。

戦局を変えにきた尾白のハイキックを受け止め、太極拳の運歩と呼ばれる歩法で相手を崩し、掌打で吹き飛ばす。

転がった尾白はスタイリッシュに足を回して立ち上がり、後ろ回し蹴りを仕掛けてくる。隙を見た所に俺が3つの変則中段蹴り、これは防がれる。何度か軽い攻撃を喰らうがタフネスを生かして前に出て、攻撃が始める前の腕を絡めとって投げる。前のめりに崩れた尾白を見てオレはティンと来た。

今だ！ モーフィアスジャンプ、アンド膝蹴り！

「これは当たれないな！」

この技、具体的に言うとも相手が崩れた所で高く宙に浮かび上がり膝を相手に叩き落とすのだが、俺は失念していた。この技はカツコよくて印象に残りやすいが一度も敵に当たったことがないのだ。案の定結果は膝が地面に叩きつけられるだけに終わり、再び尾白にスタイリッシュに逃げられる。

「……強い。こんなに強かったのか三済」

モーフィアスに拘るあまり、折角の決め所を失った。これだからあのハゲはダメなんだよ。尾白ももう大振りはしてこないかも、これはあかんかも分からんね。

仕方ないので警戒して攻めて来なくなった尾白にモーフィアスステップで近寄りつつ、今度はこちらから攻める。

今までのクンフーに加えて今度はフルコン系の打撃や肘も加えていく。うん、ぶつちやけオレ打撃でゴリ押しした方が強いんだよね。防御も普通の相手なら受け流す必要がある程強い攻撃はないしね、このボディだと。でもそれだとまるでエージェント的な動きになるからやらない。クンフー中心の動きで攻め続ける。

「クッ！ 多彩だな!!」

既存の武術では見られない動きや攻撃、つまりマトリックスのジュージツめいたクンフーに押し切られ、何度も転がされる尾白。その度に闘志で立ち上がってくるが、流石に流れを変えたいのか、近くにある柱を駆け昇つて宙から変則的な動きと攻撃を仕掛けようとする。あーこの展開はアレですわ。

落ちてきたところに蹴り一発。尾白は吹き飛んだ。

柱がへし折られる程の衝撃に尾白はダウンする。本来なら直ぐに拘束テープを巻くところだが、折角なのでちよつとロールプレイしてみよ。

「なぜやられたと思う?」

「う、動きが速すぎる」

起きてたんかい! 完璧に入った攻撃に意識のある尾白にめっちゃ驚いてしまうが、それは顔に出さず(多分)話を続ける。

「私の方が速く、強いとして、その事がこの結果に関係あると思うのかね?」

オレの言葉に聞き入る尾白。な、なんか言わなきや。そんな雰囲気だぞこれ。

「それが関係あるのか？ この世界で、君の動きと意志に」

先程の動揺もあつてか、オレの頭のテンパリ具合が止まらない。

「……君の敵はそこにいるか？」

もう何言ってるかわかんねえや、自分で言つといてなんだけど。

電波野郎、やべえヤツ、何言つてんだこの老け顔と思われぬ内に背を向け、距離をとる。

「もう一度」

はよ、はよかかってきて。ヨロヨロと立ち上がってきた尾白。しかし構えはしっかりしている。

なんか申し訳ないし気恥ずかしい。はよ終わらしたろ。

失敗したロールプレイを誤魔化すように猛攻を仕掛ける。いい加減障子くんのところに向かわなければ、もう結構な時間が経ってる気がする。

しかしギリギリのところまで攻撃を全部防がれる。あれ、こいつ反応上がってね？

防ぎそこねた攻撃に尾白が怯む。受けたのは軽い攻撃だった為直ぐに体勢を立て直す。

「どうした、もつと速い筈だぞ」

やっべ、ロールプレイはやめたのにやっちった。いいや、この際最後までやったる。
「頭で考えるな、知るんだ」

考えるな、感じるの精神ですね。これは分かります。

構える尾白に再び攻める、攻める。あ、やっぱりこいつ反応上がってるわ、全然攻撃通らん。どないしよコレ。

「打つんじゃない、撃つんだー」

謎の上から目線、必死なのはこちらである。

ドンドン速くなる尾白の動きに全力全開で対応する。その速さは拳に残像が出ている辺り、オレもいつの間にか個性を発動していたことを知る。

くっそ、本気出したる。ここからは本気ジュージツや！ まあ今までも本気だったんですけど。

そんなことを考えながら必死に攻防していると尾白がガス欠に陥ったのか、息を荒くして勝手に崩れ落ちた。あ、危ねえ。最後ら辺とかヤバかったわマジで。

「心の扉を開けるのは、君自身だ」

涼しい顔で必死に勝ち台詞を言う。多分物凄いドヤ顔になっているが実際は色んな汗がダラダラである。

さて、ここから障子君の応援に行こうか、それとも核の確保に向かうか迷っていると

終わりのアナウンスが流れた。……あれ、これもしかして制限時間か？ まさか俺らの負け？

始まる前に障子くんに「勝利の栄光を君に」してしまった以上、どのツラ下げて会えばいいのかと思つたが、勝つたのはこちらだった。障子くんが葉隠を捕まえたらしい。やっぱすげえわ、触手は。

|| || || || ||

「すごかったぜ！ あんな動き現実で初めて見たよ！」

「尾白も三済も、マジモンの達人だったんだね!!」

戻ったら皆に取り囲まれた。どうやらオレと尾白の戦いが受けたらしい。ロールプレイしたかいがあつた。スミス泣きそう、達成感で。

「た、達人なんてもんじゃないよ。それに三済は俺に合わせてくれただけだよ」

「んん、どゆこと？」

「俺の武術スタイルに合わせてくれたんだ。だからこそあんな演武みたいな動きになつた訳だし、実質おれに稽古つけてくれたようなもんだよ」

「へー、そうだったんだ」

「意外といい奴なのか、三済って」

皆の視線がこちらに集中する。それは慣れたもんだが、今度はなんか好意的というか興味を感じるような視線だ。これが人徳という奴か、尾白っていい奴そんな雰囲気凄いな。なんか悪い事した気がする。

「尾白も途中からは個性を使わず、純粋な技術で戦っていた。本気なら結果は逆だったかもしれない」

「そんなことないさ。最初に格の違いを感じたから、武術だけで戦うように誘導したんだ。要は三済に甘えたんだよ。ありがとう、三済」

「……」

「それじゃあ三済さんはわざわざ分かってああいう戦いに付き合っただけですか？ なぜそんな不合理なことを……」

「それが漢つてもんだよな！ くーッ、熱いなあ!!」

「純粋に俺に感謝を述べてくる尾白に罪悪感が半端ないことになっている。というか尾白は謙遜するが実際そんなことはないと思う。割と最初ら辺から焦ってたんですけどマジで。」

「さあさあ！ 講評の時間だ、みんな！」

オールマイトの声で皆雑談を止めて集まる。

「今回のMVPは誰か分かるかな？」

その質問にオレと尾白に多くの視線が集まる。まあアレだけ派手にやったしな、サングラスをかけてドヤ顔しとこ。

「障子さんですわ、次点で葉隠さん」

「大正解！」

サングラスしててよかった。ドヤ顔を幾分か隠せる。

「えー、なんでー？」

「なんでもなにも、あれだけ遊んでたら後の二人は論外でしょう。確かに凄かったし為にもなりましたが、演習としては最低です」

「ていうか、途中から核の事忘れてたろ。二人とも」

「ああ、うん。まあね」

「……………」

その後には八百万さんに細かい点を含めて解説された。オールマイトが「また全部言われた…………」って言ってたのでその通りなんだろう。高校で初めての友達が出来て浮かれすぎてたようだ、反省せねばなるまい。

「しかしだ。皆見ての通り、戦闘において格闘技術っていうのは何処までいっても有効だ。相手に接触しなければならぬ個性も、喰らってはいけない個性も、戦いにはあるからね」

最後にオールマイトが講評に付け加えた。皆それに頷いているので、僕は趣味でやってましたなんて言えない。

「逆に、近接戦に優れていれば個性なしでもあれだけ戦えるってことだ。君たちも、敵も。雄英では格闘技術の授業もあるし、基礎も教えるけど、各人それを磨くのを怠らないように。こればかりは、皆の努力がモノを言う世界だからね」

緑谷とかいった生徒がそれに大きな衝撃を受けたかの様な顔をしてブツブツ喋って
る。怖いんですが。オールマイトも「教師らしい事言えた」ってボソッと呟いてガツツ
ポしてる。よく分からんが尾白の件もあるし、オレも今以上にクンフーを高めなきや
なあ……

授業が終わってオールマイトが一瞬で消え、オレも帰ろうとすると呼び止められる。
この声は尾白か？

「三済、今日はありがとうな」

「君に感謝されるようなことは……」

「馬鹿言うなよ。三済の言ってくれたこと、為になった。忘れないよ」

なんかすごい爽やかに言ってくる。あの言葉に何を感じたんだろう、オレが教えて欲
しいわ。

「あと、良かったらこれからも手合わせしないか？ 武術をメインでやってる奴って少ないからさ」

「……それは私も助かる」

「そうか、じゃあよろしくな！」

差し込まれた手を握り、固い握手をする。新たな友達が出来たことは嬉しいが、ちよつと考えさせられた。この手の熱さに、彼は本気でヒーローを目指しているんだなつて。彼や、真剣に授業に臨むクラスの皆に比べて、オレはどうなんだろう。そりゃ俺だつて真面目に授業は受けてるけど、根本的な所でオレはネオになりたいつてだけで本気でヒーローを考えたことはあつただろうか。

「……スミスだ」

「？」

「スミスと呼んでくれ」

ずつとネオになりたいだけだったけど、高め合える友人と一緒になら、本気でヒーローを考えて、目指したいと思えた。どんなヒーローかは分からないけれど、とりあえずは負けたくないと思う。うん、頑張ろう。皆に負けないように。

そして決めたことが一つ。それは卒業までに目的を持つこと。ヒーローであること
に対する、ネオになりたい以上の目的。だって、目的なしに存在することは耐えられな
い。そうだろうか？

趣味が似てる奴とはあまり深い話をしない方がいいぞ

先日の戦闘訓練でなんか一気にクラスに馴染めた気がする。なんたつてお昼に一人で食べることが殆どなくなつたからな！ 筋トレ話で盛り上がっていたら、砂藤くんとか切島くんとか沢山話が出来る友人が増えた。もうね、泣いちやうね、スミスは。

それに加わるようにちよくちよく色んな人とも話すようになった。偶に一緒に筋トレにいったりもしてる。でも一番仲が良いのはやっぱり障子くんだね、サングラスもあげたし。しかしこれはアレだね、スミスも放課後ジムとフィットネスショップ以外に誘われる時が近いかもしれん。こう見えてもリップシンクが特技でね、ウケ狙いの一発ネタならお手のものよ。ブラウン君とジョーンズ君が無表情で拍手してくれたから自信はある。

そういや尾白くんだけど、あれ以来ちよくちよく手合わせだつたり一緒にクンフーしている。彼のキャラテはスゴイワザマエでね、実際オレも勉強させられています。あと彼もお昼と一緒に弁当食べて下さる人だけれど、なぜかいつも葉隠さんもついてくる。本当、もうなんていうか……

あとこないだ申請していたゴム銃の所持が審査されるらしい。サポート科担任のパ

ワーローダー先生に指示された場所へと向かう。どうやら銃火器に関してはちよつと扱いが変わるみたいだ。卒業生で国の火器管理をしているソムリエという人がいるらしく、その人が定期的に来るのに合わせなきやいけないらしい。ゴム弾とはいえ、火器を扱うにはそれなりの手続きが必要なのだ。

学生達の発明品がごつた返してゐる仕事場を抜けると目的地が見えてきた。ひっそりと、しかし嚴重な扉を開けるとそこには洒落たカウンターと落ち着いた感じのお兄さんがいた。

「ようこそ。何か御用でしょうか」

「依頼していた者だ。三済という」

「ああ、三済様ですか。ご希望の品は？」

「Guns、Lots of guns」
銃を大量に

俺の言葉に微笑みながら頷くと、カウンター奥にある棚をスライドさせる。そこからはこの狭いカウンターからは想像できない銃の山。こいつあ男なら「おら、わくわくすつぞ」しちゃうね。

「それでは、どう致しますか？」

「テイステイングを」

「喜んで」

俺の言葉に嬉しそうに頷いて壁にかけてある銃を2丁取り出す。

「イタリアンはお好きで？」

「勿論」

「では前菜から」

差しだされたのは拳銃のベレッタ92FS。ネオが二丁拳銃していた銃である。男の子だからね、銃について色々調べちゃうことつてあるよね。ベレッタは米軍でも採用されてる素晴らしい銃である。ネオもカッコよく撃つてたよね、当たんなかったけど。

「ベレッタ。どのような局面でも信頼できる、実績ある銃です」

「Good。……終わりか？」

「いえいえ、MP5K。ロングマガジン。ストックを外し、レーザーポインターと光学照準器付き。口を加工しているのでリリースも早い。注文を頂ければ取り出しを迅速に扱えるよう手を加えます、いかなる動きにも対応出来るように」

動作確認しながら渡してくる。これも二つ渡してくるあたり、このソムリエ、恐ろしく分かっている。ちなみにMP5とは拳銃弾を使用する短機関銃で、非常に命中精度が高いことで有名だ。各国の特殊部隊でも使われていて日本でも警察の一部で使われてたりする。Kというのはその更に小型版ということで、どのくらいかと言うと両手持ちも軽く出来るぐらいの小ささだ。ネオが警備員不意打ちしたりモーフィアスが全く

当たらない乱射をしていたあの銃である。

自宅でトイガンで練習していたのが功を奏したのか、オレも淀みない手つきで受け取ることが出来た。サンングラスを光らせつつ更に促してみよう。

「魚料理も欲しい。激しいヤツを」

「それならばよいのが。チェコの銃はご存じで？」

「いや」

「とても高い精度を誇っています。少しクラシックになりますが、扱い次第では刺激的にもなります」

更に二つ小型の銃を取り出してくる。今度は先程のMP5Kよりも小型の銃。ストックを外してそれに反動を軽減するマズルブレーキをつけて渡してくる。

「少々手を加えておりますが……スコープオン。9mm、リデューサーはご要望に合わせて。グリップを広めに握りやすく、重心をいじることでも更に照準がし易くなっております」

この銃は知ってる。あんまりにも小型で隠しやすく、使いやすいから暗殺とかに使われてたんだよね。ちよつとダーティなイメージもあるけどオレは好きだよ。ネオも使ってたし。手を加えたって言うてるけど、流星にサイズの違う葉莖は排莖しないよね？

「素晴らしい。しかしこれでもヒーローを指指していてね。デザートはユーモアが欲しい」

「ユーモアですか……」

少し迷ったように目を流し、その先にある銃を二つ取り出す。もうね、惚れちゃうねこの人。

「IMI マイクロウージー。余計な物は外しましょう、お気に召すまでどうぞご堪能下さいませ」

今までで最も小さい銃だ。なんならフルサイズの拳銃より小さいかもしれん。この銃、こんな小ささでも物凄い早さで連射出来ることで有名だ。勿論そんな銃に精度を求めることなど筋違いで、とりあえずばら撒くといった時に使う。実際映画でもネオはこの銃二つ撃ちまくって一人しか倒せなかったしね。

「ご満足いただけましたか？」

「完璧な仕事だ」

「恐悦至極でございます」

しかしなんでこの人こんなにピンポイントにネオっぽい銃渡してくるんだろ。心でも読む個性なのか？

「全て同じ口径にしておりますので、取り回しもしやすいかと」

あ、そういう配慮だったのね。そりや偶然だよ、偶然。……なんかこの人相手にすると全部見透かされてそうで怖いんだよなあ。これが人生経験の差か。俺の方が老け顔だけ。

そして今更ながら、なんでOBに対してオレこんな態度とつてるんだろう。でもなんか雰囲気的にこの人がそうさせるんだよね、オレの意思じゃなくこの人に誘導させられる気がする。やっぱこえーわこの人。パワーローダー先生も自慢の教え子で、国の火器管理させるだけあって戦闘力も相応だから決して機嫌を損ねないように言つてたし。……なんか震えてきたんだけど。

「どうぞ、試射場の方へ」

奥の部屋に連れていかれるとそこは試射場を兼ねた広い空間。先生にも教えられていたが、ここで試験も兼ねた試射をするらしい。そりや誰でも銃を持てる訳ないよね。個性と相性の良い者だけが厳しい審査を経てようやく許可されるのだ、生半可な結果じゃ落選だろうな。

「あなたには期待をしております。どうぞ」

微笑みを携えながら先程選んだ銃を差しだしてくる。ここに来る途中話したが、ソムリエさんは最近の銃を使うヒーローに対して少し悲しく思っているらしい。今の火器を使うヒーローは見た目も子供向けのおもちゃみたいな派手なものにしていて、扱いも

まるでコミックの様だと。

銃なんてものは基本的に威圧と非日常の恐怖を与えるだけだし、個性の兼ね合いがあるのも分かるのでむしろこれでいいのだと理解は出来る。しかし漢の浪漫としては、銃を銃のまま使って欲しいと思っっているらしい。それが人を傷つけるだけではなく、ヒーローとして人を助ける為に使われて欲しいと。

ソムリエさんの気持ちは分かる。オレもネオに憧れる男だ。この個性が溢れた社会、以前の様なガンアクション作品なんてものは完全に廃れてしまっている。出番は個性の踏み台の演出ぐらい。マトリックスが脳内再生できるオレも、ガンアクション作品がレトロ映画扱いされていることに悲しみを覚えたものだ。

ソムリエさんの期待を裏切らない為に深く、深く集中する。やがて肉体が意識から離れ、意志の下に従えるようになったとき、オレは手に取った銃の引き金を引く。バレットタイムになった世界で、銃弾がスローモーションでその軌跡を描きながら人型的に吸い込まれていく。心臓、喉、目、額。それぞれに全くブレが見られない、機械でもこれ以上は出来ないという程のワンホールショット。これがオレの個性と銃の相性だ。ソムリエさんの期待に応えられただろうか。

「これは……」

オレが撃つた的を見て驚くソムリエさん。

「三済様、素晴らしい。期待以上です」

ソムリエさんの言葉に満面の笑みで返す。実は密かに白い歯をチャームポイントとして自認してるんだ。一回子供の前で笑ったら泣かれたけど。

「しかし、三済様……申し上げにくいのですが」

「なんだ？」

「急所を狙うのはどうかと」

「あっ……」

とりあえず試験は通りました。

独断するのは大抵失敗するんだぞ

そんなこんなでやってきたるはU S J。テーマパークではない、災害救助訓練だ。

相澤先生曰く今日はコスは好きにしているとのこと。で今日も今日とてオレはネオだ。断じてスーツ姿ではない。多分皆これがオレの支給コスだと思っている。いい風潮である。

そしてこないだソムリエさんから頂いた銃の数々を服とマントに仕込んでいる。救助訓練に必要か？ と悩んだが、結局持つていくことにした。だってさ、ホラ、いつ何処で災害があるかなんてわかんないじゃん。敵との交戦の結果、救助が必要になるかもしれないし、武器を持っているという前提で動いた方がいいと思うの。ということ。U S Jに向かうバスの中で障子くんに話した結果……

『マジかこいつ』って顔してた。マントの中見せたら絶句してた。いや、触手がだけど。

「とりあえずこれ位持つとけ」

って言われて救急キット貰った。あ、はい。完全に忘れてました。オレ何しに来たんやろ、素直に災害救助の準備してくりゃよかった……

そんなこんなで騒がしいバスの中、オレは一人コソコソと隅っこに縮こまるのであった。

「動くな！ アレは敵だ!!」

相澤先生が叫ぶと同時に、敵の襲撃が始まった。ガクブルの俺は先生の言うとおりに微塵も動かなかつたのだが、気付いたらなんか所々火事が起きてる廃ビル街にいた。なんぞこれ。

周囲を見渡しても人がいない。ようやく遠くに人を見つけたと思つたら、思い切り首を引かれて建物の陰に引つ張られた。ぐえ。

(スミス、こつちだ隠れる！)

小声で話しかけてきたのはこの先青春度が上がり続けることが予想される尾白くんだ。今日もバスで隣に葉隠さん置いてたよね。

(敵の襲撃だ、周到に準備していたんだ。幸い俺たちはまだ見つかつてない。なんとかしてやり過ごそう)

尾白くんは焦りつつもオレに励ますように言う。自分を奮い立たせる意味もあるの

だろう、震える声を必死に抑えてオレに伝えてくる。見れば分かる。彼もオレと同じように震えている。悪意を持って襲って来る敵と敵対するなど、人生で初めてに他ならない。それでも前を向こうとする彼にオレは情けなくなってしまう。

人は余裕を全て奪われた時に本性が出る。オレは、この状況で未だに怯えから立ち上がれない。彼がいなければ動くことも出来なかっただろう。そうか、オレはやっぱり救世主なんて器じゃなかったのか……

尾白が辺りを見渡しながら移動を促してくる。勇気を出して立ち上がり、尾白についていこうとすると、ガシヤンと音をたてて懐からUziが落ちた。ガンベルトの締めが甘かったのかな？ 無言、沈黙、そして絶望。

「そこか！ 手えあげろガキ共」

あつという間に周囲を偵察していた敵に囲まれてしまった。大人しく手をあげるしかないオレと尾白。ご、ごめん。もう本当これしか言えないわ。せめて死ぬ前にちゃんと謝りたい。

取り囲んだ敵の幾人かは銃を持っている。他の連中は遠距離攻撃が出来る個性なのか、それぞれの武器になる腕や器官を向けながら脅してくる。

こえーよお。映画なんかでは銃を向けられても主人公たちは平然としてるけど、実際向けられたらこんな怖いのか。

「お前、足元にあるモノこっちに寄越せ。他にもなんか持つてるんじゃないやねえだろうなあ」
なんで撃ってこないんだろうと思っただらさつき落とした銃を警戒してたのね。
分かる。フィクションじゃない銃って怖いよな。そりゃ怖いよね、ヴィランだって。

しかし震えるオレは碌に動くことが出来ず、それにイラついたヴィランが威嚇射撃をしてきた。それにビクつきながらオレがマントを広げて中身を見せる。銃、銃、銃！

なぜか災害救助訓練に大量の銃を持ち込むヤベエ奴。オレの中で恐怖を羞恥心が上回った時、その場の全員が固まった。

「Holy shit!?!」

銃を向けていたヴィランが叫んだ瞬間、弾かれたようにオレの体が動き出す。呆然とするヴィランに掌底一発。受け身も取れず吹き飛んでいく。

や、やってしまった！あのセリフを言うから条件反射でやってしまった。もう後戻り出来へん、どないしたらええんや！いややるしかないんですけれども!!

オレは今まで何度も見てきた映像通りに、MP5Kを流れるように両手に取り出し連射する。ちよつとアクセントを加えてクルリと一回転すると、周囲の連中をまとめて薙ぎ倒せた。ゴム弾だから死んでないよ。

「スミス！ 一人残ってる！」

撃ち漏らした一人が逃げ出そうとしている。よろけながらも大声を出して。コレは逃したらあかんね。

「お、応援を！ 応援を……ぎゃああああ!!」

MP5Kを投げ捨て、足元に落ちてたUziを拾って全弾まき散らす。勿論個性を使っているので全弾当たった。ありや死ぬほどこいてえだろうな。

Uziの弾倉を替えて懐にしまい、今度はベレッツタを両手に取り出す。尾白が深呼吸をしながら隣に立つてくる。うん、あれだけ騒いだらそりや見つかるよね。ドタドタと先程の比ではない大勢の人間が集まる音を耳にしながら、オレと尾白は心の準備を整える。

しかしアレだね。開き直ってしまえばなんとやら……いややつぱこえーわ。カッコつけとこ、じゃないとやってられんし。

やってきたのは先程の偵察組より「ぶっ殺してやらあ」な覚悟完了してそうな連中。そら不意打ちされて怒らんはずないよね。全員銃やら何らかの遠距離攻撃の個性を構えて俺たちに向けてきている。地形との相性の問題かもしれんけど、なんでこんな特化

した連中をここに寄越してんだよ、バカなの？ 死ぬわ、オレ達が。

「Freeze!!!」

ヴィランの叫びに尾白と同時に顔を見合わせた後、左右に別れて動き始める。オレと尾白に狙いが分散されたが、それでも凄い量の弾幕が壁や地面を削っていく。尾白は素早い動きで掠らせもせず、とりあえず近くの掩蔽物まで辿り着いた。オレはベレッタを乱射しながら弾幕を防げるところまで行く。あわよくばヴィランが引いてくれれば思ったが、向こうはこちらが撃つ以上に撃ってくる。

あ、これムリ、ムリムリムリ。こちとら拳銃だぞ、連射型とか散弾型の個性と撃ちあえる訳ねーだろうが！ 今ならあのロビーシーンでのネオの気持ちも分かる。こいつはアカンわ。そんな気持ちだったのね。地面を華麗に転がって避難する。

避難した先の瓦礫がドンドン敵の射撃で削れていく。瓦礫に比例して物凄い勢いでオレのメンタルも削られていくが、今更引くに引けん。ベレッタを手放してスコープピオンを取り出し、両手に構える。これなら撃ち合いにも負けんでしょ。

「ちっ、お前から周りこんでブチ殺せ」

僅かの間隠れていると、一瞬弾幕が止む。敵も動き出したみたいだ。さて、やりませぬか。

視界の端で尾白がスタイリッシュに壁を蹴って宙をクルクル舞っているのを捉えな

がら、物陰から飛び出してスコープオンを乱射する。

敵も丁度飛び出てきたところで、お互い身を隠すものがない状態。それに一瞬怯んだのが運の尽き、スコープオンをスライドさせるように連射し続け、目前の敵をまとめて始末する。スコープオンからは大量の空薬莖が排莖されるが、ライフルのそれではない。現実だからね、マジカルガンじゃないから。

「撃てえ、撃ち殺せえ！」

飛び出して大量の敵を始末したのはいいが、オレもピンチになった。ネオみたい走りながら側転、敵の銃奪つたとか一瞬思っただけど無理。一瞬でも足止めたらハチの巣にされるわ！

スコープオンをポイっとして持てる全ての力で逃げようとするが、ここでまさかの両足固定。え、ナニコレ？

「今だ！ やっちまえ!!」

見ると某忍者漫画の土遁の如く手を地面に突き刺してるヴィランが一人。そして固まった土に足を取られるオレ。い、いやあああああ！ こんなマトリックスじゃないいい!!

何らかの個性で両足を固められたオレに向かって放たれる弾丸。避けられるはずもない状況。しかしね、オレの個性をもってすればこの程度見てから回避余裕よ。

「な、なんだありやあ！」

「すげえ！ けどキメエ!!」

屋上でのエージエントの如く上半身を動かして弾を回避するオレ。多分傍目からは物凄い速度で上半身だけ動かし始めるように見えるんだろうな。とりあえず余裕で回避したことで心にも余裕が芽生える。あ、こんなことならネオっぽくイナバウアーすりゃよかつたわ。

「仕方ねえ、至近距離から連射しろ！」

そんなくだらないことを考えていたらヴィランが寄ってきた。こ、これはアレか!?

「Dodge this」か、「Dodge this」されるのか!? 不用意にエージェントをやってしまったが為にいいいい! だ、誰かたすけてええええ!!

心の中でヒーローに助けを叫んでいると、急に足を固定していた土が崩れ、動けるようになる。土遁をしていたヴィランに視線を向けると失神していた。尾白が助けてくれたらしい。

お、尾白白おおおおおお!! ありがとう、ホントにありがとう! そりゃモテルわお前、凄いよ、オレにとってのトリニティはお前だよおお。

コンクリやら土の破片と粉塵舞い散る中、尾白への最大限の感謝の気持ちを中心に述べる。オレは一旦柱の陰に隠れた。尾白は向こうで戦っているがもうすぐ終わるうだ。こちらに残るはあと二人。しかしサイクルの早い連射型の個性の為、近寄りがない。それならばどうするか。オレは最後に残ったUziを取り出す。最後はカツコよく、ネオつぼく決めるぜ。

両手にUziを持って飛び出す。これが真正銘最後の銃である。Uziの早すぎる連射サイクルに二人の敵を物陰に張り付けにして、その間に近寄る。そう、この銃はこうやって使うのだ。

途中我慢できずに飛び出した敵を蜂の巣にしつつ、残った一人へとじりじりと近寄っていく。しかし目前になったところで弾切れを起こしてしまう。それに気づいた敵は今だと言わんばかりに飛び出してくる。

でも残念。ここまで近寄ったらナイフの方が……じゃないオレの拳や蹴りの方が速いよ。オレのネオらしき、見せてやるぜ！　と思った瞬間、ふわりと感じる尻尾の感触。「ふう、これで終わりか。案外やれるもんだな。スマスは大丈夫か？」

尻尾を使い、相手に駆け上がって蹴り一発。どう考えてもネオです。イトコロ貰われました。はい、有難うございました。

戦いでボロボロになり、ガラリと崩れる壁の音を聞きながら、心の中で感謝だの嫉妬

!!!!!!だの謝罪だのよく分からん感情を籠めて叫ぶ。
……お、尾白白白白白白白白白白白白

キャラっていうのは大抵自分じゃなく他人が決めるもんだぞ

あの後は色々あったなあ。ヴィランを倒した後中央広場に戻ったら相澤先生血まみれでビックリよ。それでオレ達が一番最後だったらしく、皆に心配された。主に尾白が。オレは服が多少ボロボロになっただけでかすり傷一つなかったから別にいいんだけどね。ついでに言うくと尾白は特に葉隠さんに心配されてたわ、いつもイジってる姿からは考えられないくらい。

……オレ？ オレは独り障子くんからもらった救急セットをイジってたよ。

「いや、なんて言うか三済はホラ、歴戦の仕事人っぽいし大丈夫かなって」

「実際殲滅してきたんでしょ？ 無傷で」

「それに比べて尾白はなんか燃やされたり冷やされたりしてそんな雰囲気あるし」

「……皆お前の強さを信頼しているんだ。元気出せスミス」

上記は我が同胞の談だ。うん、もういいや泣かない。スミス強い子だもん、ぐすん。

騒動が終わって初めての授業で重症の相澤先生が出てきたのもビビった。包帯グルグル巻きだし、糞虫みたいだ。……いつもと変わんねえか。

無表情でそんなことを思っていると先生から重大発表。なんと雄英祭が近いらしい。雄英祭とはぶつちやけ単なる体育祭なのだが、ここ雄英高校に限って言えば現代のオリンピック、ヒーローの登竜門とも言われるほどの注目度。皆の士気も高まり、雄英祭に向けてオレも頑張ろうと思つた直後、先生に呼び出される。

「お前、ソムリエのとこ行ってこい。あと銃取り上げな」

エ、!? なんで?!

「……なぜ?」

「当たり前だろ。仮免も取つてないのに実際にヴィラン相手に使用したんだから」

で、でもしやあないやん。正当防衛やん!

しかしそんなことを口に出せるはずもなくあっさり折れる。

「分かりました」

「悪いな。今回に関してはオレ達の責任もあるし、擁護してやりたいんだがな。お役所仕事つて奴だ。しばらくすればまた持てるから諦めろ」

オレはガックシと肩を落としつつ、ソムリエさんのとこに向かった。こないだの戦闘でネオ仕様のコスに傷がついたし、ロクなことねえな。あれ高かったのに……

再びサポート科の群れを超えて、ソムリエさんのところに行く。まるで常連のようか雰
囲気だな、まだ二回目だけど。

「これはこれは三済様。この度は大変なことになったようで……」

「迷惑をかける」

「いえいえ、三済様のご無事がなによりです」

以前貰った銃をウエポンケースに入れて返す。なんかこつちが申し訳なくなる。ソ
ムリエさんはオレの希望通りに選んでくれただけなのになあ。

「ふむ、たしかにお受け取りしました」

一丁一丁、丁寧に確かめて受け取ったソムリエさん。今回のヴィラン襲撃の愚痴も含
めてついつい色んなことを喋ってしまう。そして謝罪と反省も沢山。

実際の戦闘はオレの脳内映像とは全然違ったこと。いや全然ってことはなかったけ
ど、オレの心構えが全くなくなってなかった。今回はなんとかなったけど実際ただテンパっ
て体が見知った動きしただけなもの。次似たようなことあつたらオレはちゃんと動け
るんだろうか。

あとソムリエさんみたいな人が丹精込めて手入れしてくれてる銃をまるで使い

捨てにできるように戦っていたのは本当に正しかったのだろうか？ そんな弱音を吐いてしまう。

「それが本来の銃の役割というものです。物に固執して命を落としては本末転倒。三済様の身を守るために使われたのなら本望です。それに今回のことはきつと大きな財産になりますよ。三済さまがこのまま努力を続けるのなら」

ソムリエさんの言葉に心を打たれる。ちよつとイケメンすぎんよー、オレもプロになつたらこうありたいものですな。……ていうか出来すぎじゃない？ 先輩ってそんなに歳離れてないよね、オレもあと数年でこんな感じにならなきゃいけないの？ ちよつとなれる気がしないわー。顔年齢だけは並ぶどころか追い越してるけど。

「それはそうと、サポート科にお聞きしましたら三済様は本来のコスチュームは別にあつて、さうで……」

「……ああ」

ソムリエさんが少し口調を変える。

「お気に召さなかつたのかもかもしれませんが、支給されるコスチュームは全て長い時間をかけて話し合い、手をかけて作られたものです。あなたの行動に合理的に、効果的に働くように。少なくとも、今のあなたには最適の機能を持っている筈です」

あ、そういえばソムリエさんはサポート科のOBでしたね。先輩と呼んでも？ そし

てお怒りでらっしやる?」

「役割は、果たされなければ意味を成しません。私の言いたいことは分かりますね」
「……分かつてはいる」

あ、はい。すんません、ホントすんません。短い付き合いだけど先輩の仕事ぶりを通して人柄が伝わってくる。今回の件もあってオレの身を案じているんですよね。

でも嫌なんです。他人には理解できないかもしれないかもしれませんが、オレがやることなすこと、なぜか全部行きたくない方向に行くんです。別にそれで不利益こうむってるわけじゃあないんですけど、憧れとは違うんです。

「お気持ちには分かります。ですが今は自分を高めることに必死になって下さい。そうすれば、いずれ憧れの方がついてくるようになりますよ」

実力つけてからモノ言えやっことですね。はい、その通りです。これだけ穏やかに諭されると、自分がどれだけ不相応なこと言ってるか思い知らされる。なまじ先日醜態を晒しただけ尚更だ。

これが相澤先生なら「不合理」の一言で切り捨てられたらどうなあ。パワーローダー先生なら……ブチ切れるかもしれん、あの人なんか武闘派の匂いがするし。

オレが大きく頷くと、先輩は柔らかな雰囲気に戻って一つの箱を取り出してきた。

「先日の試射のデータと三済様の身体データを考慮して最適のものを選んでまいりまし

た」

箱を空けるとそこには大型拳銃が一つ。それを見て疑問が沸いてしまう。全部没収じゃなかったの？

「私とて後輩の為にこれ位を通すことは出来ますよ」

ウインクを一つ。その姿に泣きそうになる。オレの為にどれだけ世話をかけさせてしまったのだろう。これ一つにどれだけ多大な手間と時間がかかっているのだろう。それを考えてしまう。同時に、オレがないがしろにしたスーツも同じことなのだから、それのような気がして、自然と頭が下がる。

「IMI デザートイーグル MK. XIX。50口径。三済様ならば扱えるかと」
知ってます。エージェント愛用の銃ですよ。何度も見えます、頭の中で。

先輩、オレ先輩には感謝しかありません。今度からちやんとコスチューム着ます。エージェントっぽくなくても我慢します。いつかネオになる為に。でも、でもね……

なんでこうなるかなああ!!!

その日、コスチュームであるスーツとサングラスとプラグを着けて鏡の前でデザート

イーグルを構えてみた。完全にエージェントスミスだった。オレは泣いた。

演出なら多少の脚色も許されるんだぞ

今日のスマスは体育服。控室で一人佇んでいます。いや、別にハブられてるとかじゃないよ。

クンフーを高めたりサンングラスを磨いたりして、なんやかんややってきた雄英体育祭。今日は皆体育服だ。覚悟を決めてスマスフォーム着ることを決意したけれど、進んで着たいものでもないので少しは気が楽だ。

そして今は最終トーナメントの待ち時間。予選？ 1次はT-10000ばかりのダツシユで、2次は砂藤さんと障子さんのチームマツスルで周りを威嚇してたら通ったよ。

しかしこうして一人で鏡を見てると考えてしまうな。今まで目を逸らしていたが、やっぱりオレスミスに似てるわ。言動もそれっぽいかもわからん。

しかしな、それは仕方ないのだ。新生児模倣っていうのがある。赤ちゃんは視界に映る親のマネをして社会性を育てていく。しかしオレはその前に個性でマトリックスを何度も見てしまっているせいでそれが刷り込みになっていくのだ。故に言動がなんかマトリックスの人物たちみたいになってしまうのも仕方がない。うん、そういうことに

しておこう。

しかし、しかしだ！ 100歩譲ってもスミスだ。エージェントスミスじゃないスミスだ！ そして顔はスミスでも心はネオだ！ 体は許しても心だけは、心だけは守りきるのだ!! そう、救世主スミス、これでいこう！ 実はスミスってあだ名も愛着あるしな。とりあえず学生の内はスミス、卒業したらネオとしてヒーローだ！

先日以降モヤモヤとしていた心を清算して頷く。あ、やっぱりスミスっぽいわ。

うんうんと鏡の前で唸っているとアナウンスが流れた。やっとトーナメントが始まるらしい。あ、そういやオレー回戦だったわ。相手は緑谷くんだったけ。

しかしなげえな。どんだけ準備したんだよ。心の中で愚痴りつつ向かうと、係員に止められた。え、なんで？ 演出の都合上後から出ていくの？ あ、はいわかりました。

選手通路の出口でボーッと眺めていると、流れていた陽気な音楽が止まる。そして地鳴りと共に地面が変形し、相手側リングの道が変形していく。

なんだなんだとざわめく観客に、プレゼントマイクのアナウンスが流れた。

『始まるぜ、日本最大のシンデレラボーイ&ガールを決める祭典。雄英トーナメント、上がって来たのは16名！ 最後に頼れるのは己のアイアンフィスト!! 下らねえルー

ルはいらねえ、お前らの力見せてみる!!』

かつてここまでノリノリのマイク先生を見ただろうか。なんか色のついたスモークも炊き始められている。

『さあまずは第一回戦！ 爆発、凍結、なんのその！ 1000マン？ そんなもんくれてやらあ!! この俺の背中に乗れるなら!!』

緑谷君側のステージがなんかすごいことになっている。花火も次々と打ち上げられ始めた。

『降り立つ背中はダークホース！ 最早誰にも言わせねえ、頂点目指す、俺が奪る！オレが来る!』

徐々に影が大きくなり、小さなその姿が露わになる。

『立ちふさがる物ぶち壊し、行こうぜ 夢の向こう側へ!』

雰囲気からは想像もつかないが、トップクラスの成績を残し続けてきた緑谷くん。それに相応しい演出といえそうなんだろうが……

『さあきたぜ！ お待ちかね、本日最大のシンデレラボーイ……1-A！ ミドリヤアアアアアアイズウウウクウウクウウツツ!!』

なんだこれ……。個性もフル活用して、度が過ぎている演出に引いてしまう。

雄英祭はハイライトしか見てなかったからなあ。演出が派手とは聞いてたけどここ

までとは……

見る方はともかく、やられる方はたまったもんじやないな。見ろよ、緑谷くんカチコチになってるじゃん。ノリノリのマイク先生に持ち上げられて、ドンドンテンションが沈んでつてるよ。

でも、ちよつと嬉しいかも……ここで派手にスマスじゃなくネオつぼく活躍出来たら、オレの救世主スマス道が進むかもしれん。もうスマス期待しちゃうね。

『さあ、注目度ナンバーワンのお相手は、圧倒的存在感を誇る肉体派！ 壊せるなら壊してみろ、そう言わんばかりの体は黒鉄か、巖か！』

ここでオレのリングまでの道に柱が地面から生えてくる。係員がGOサインを出すので歩いていくと、オレの速度に合わせて柱が爆散し、火花と破片が舞い散る。

『こいつあまさしく強敵の風格！ その力は岩を砕き、その動きは弾を避け、与えられた課題は完遂する!! 誰が呼んだかエージェント！ 渋すぎるお前は本当に学生かあ!?!』

ザツケンナコラー！ あんまりだろ、こちとら救世主スマスで行くつて決めてんだよ、エージェント要素は呼びびじゃねえよ!!

てか誰だよその名で呼んでるやつ。絶対に許さんぞ！ 覚えてろよ、絶対に屋上に呼んで学生らしく爽やかに拳で決着つけてやる!!

思わず足を止めると、リング手前で地面が急に持ち上がり、宙に飛ばされる。結構な時間宙に浮いた後、リングに着地。別にいいけど、驚くわ。打ち合わせ位してもよかつたんじゃないの？

『多分将来苦勞するだろうなあ……I—A ミイイイスミスウウウミイイトオオオオオオ!!!』

なんか区切るところおかしくね？ リングに立つと、緑谷くんがあからさまにホットした顔をする。気持ちは分かるよ。

『それじゃあ始めるぜえええええ！ ルールは先程言った通りだ。場外か参ったって言葉だけ。ただしやりすぎは禁物、ヒーローってこと忘れんなよ』

マイクの言葉に構える緑谷くん。分かる、早く始まって欲しいよね。

『それじゃあレディイイイイ！ STARRT!!』

ド派手な演出で観客の盛り上がりが頂点に達した時、一回戦が始まった。

後で知ったことだけあの演出、プレゼントマイクが好きにMCやりたいが為にヒーロー業で稼いだ私費を投じているらしい。尺の都合上テレビではカットされてる

んでネットでしか流れないんだと。

それでもプレゼントマイク的には構わないらしい。

ヒーローってすごいなと思いました。ギャラ的な意味で。

見せ場つてのは自分だけとは限らないんだぞ

雄英祭最終トーナメント第一回戦。オレことスミス対緑谷くん。緑谷くんはMCマイクの始めの合図を聞くと突っ込んできた。

目に見えるほどの剛風を拳で撒き散らしながら一直線に来る姿は、彼の安定した個性の発動を思わせる。以前一緒に鍛錬した時とは見違える程だ。この短期間で、教えた通りにひたすら反復練習したのだろう。クンフーから彼の実直性がわかるよ。

「でやああああ！」

顔面に向かって来る剛速球の拳を掴みとる。その瞬間何かが破裂したような音とともにリングに罅が入る。観客がざわめくが見た目ほど大したことはしていない。

どれだけ凄くても、こうも軌道やタイミングが分かりきっているのなら受けるのも容易い。拳が掌に触れた瞬間力を地面に逃したただけだ。緑谷くんのコレはもう何度も見ているしね。

「Hmph, アップグレード進歩したな」

などと頷きながら師匠ポジを楽しむ。緑谷は速攻が止められ、少しだけ顔を悔しそうに歪ませて引いた。

いやあ実はね、以前授業のあと頼まれたんだよ。格闘技教えて欲しいって。といってもその時は体重を乗せて力のロスを無くすちゃんとしたストレートの打ち方を教えただけなんだけどね。

緑谷君は「え、それだけ？」って顔してただけど、オレ教えるの素人だしそんなぐらいいしか出来ないんだよね。オレのやつてるマトリックススクンフーはオレの身体能力ありきだし、長年に渡って現実に使えるよう改造した無駄な努力の産物だから現実的じゃない。一応ちゃんと中国武術を元に日本の武道も通ってアレンジしてるから実用性はあるけど、間違つても真面目に武術やりたがつてる人に教えるもんじゃない。自分で言つててなんか悲しくなるなコレ。

そんなこんなでとりあえずストレートだけ教えた。スパーしようにも最低限形出来てなきや危ないということを伝えると緑谷くんも納得した。ていうかストレートやワントゥーでも、極めればマジで世界奪れるよって言ったら割と驚いてた。もつと早くやればよかつたつて？ 大丈夫大丈夫、テレフォンパンチだけでも直せば君の個性なら右ストレートでぶっ飛ばすことが出来るから。

大陸の拳法、スタンディング、組み技、武器術、どの方向に行きたいのかも分からないし、そもそもオレじゃどれが向いてるかも分からないしね。まあ基礎的なものは一緒に事も多いし、本当に触りだけ教えることにした。そんな軽い気持ちで姿勢や打ち方だけ

教えてつたんだよね。後はきちんとした人に教えられてくれるって。

でも驚いたのは、数日後に彼はきちんと教えた通りの綺麗なフォームで出来る様になつていたこと。聞いたら家に帰ってから空いた時間はひたすら練習してたんだと。本人は大したことじゃない、人より劣る自分はやって当たり前だからって言つてたけど、ぶつ倒れるまで練習を続けるなんて普通の気持ちじゃ出来ない。

その姿はまるでネオを目指して必死に稽古していた、小さな頃のオレの姿そのもので恥ずかしくなつた。それだけ本気なんだつてこの時になるまで分からなかつた自身に。この高校にいる皆がそうなのだ、だからオレも彼らに接するときはそれに応えなきゃと思つた。そうでなければ対等になれないから。

そうしてオレは彼がストリートに個性を乗せられる様になるまで練習に付き合つた。彼が個性を持て余しているのは聞いていたので、ゆつくりと個性を発動しながらもほんの数ミリづつ型通りに打つという練習方法を続けた。その結果なんとか右ストリートだけは体を壊せずに打てるようになった。その時の喜び様はまるでお小遣いを貯めてネオのコスを買つたときのオレの様で、思わずつられて笑顔になつた。

その後にお礼としてカラオケも奢ってもらつた。実は彼もカラオケに行つたことがなかつたらしい。オレも誘われるのを待つていたのだが、何事も待つだけではいけない。二人で勇気を出したのだ。たどたどしくも、しかしはっちゃけて二人で恋のサバイ

バルを歌ったのは楽しかった。

『緑谷アアツ！物凄いパンチを打つが止められる！ 微動だにしないアイツはナニモンだあツ!?』

スミスだよ。ネオでもいいけどスミスだよ。

「流石……三済くん」

「それほどでもない」

別に謙虚じゃない。形になったとはいえ、ストレート。まだまだ慣れも浅いし、見る人が見ればテレフォンパンチなものには変わりはない。

「三済くん相手に小細工は意味ないって分かっている。だから……」

緑谷くんが前傾姿勢になる。ドツシリと腰を落とした特攻の体勢。

「これでどうだあツ!!!」

緑谷くんの動きそのものに暴風が生まれる。踏み込み一つで地面が崩れ、粉塵が舞う。そして大砲の様な音と共に弾が飛んできた。飛んできたのは勿論緑谷くん。勢いそのままに、個性を使つた右ストレートがやってくる。

実は、雄英際が迫っていた頃、緑谷くんに隠し玉がもうひとつ欲しいと相談された。オレは彼の個性の都合上、付け焼刃ならやめておいた方がいいと言ったのだが彼は譲ら

なかった。頑固な彼に折れて形に出来そうにないなら使わないという条件で、二人で必殺技を考えた。その正体は……爆速ダッシュ。別にゴキブリは模倣してはいない。

パンチが凄くても当たらなければ意味はない。こと対人戦なら尚更だ。なのでなんとか個性を使った移動方法を考えた結果、一步だけ個性を使うことを考えた。踏み込んで止まる。言えば単純だがかなり苦労しているようだった。怪我をしては元も子もないのでまた基礎から考案した歩法を教えて、後は個人訓練に任せたのだ。予選では全く使っていないかったので、結局モノにならなかつたのだと騙された。

『いっばあああああつー！ 強烈なのが炸裂!! 緑谷BOYの一撃が決まったあああああ！
ていうか見えねえぞコレ!!』

たつた一撃でリングの上に砂塵が舞い、オレの体が後ろへと地面に跡を残しながら飛ばされていく。改めてとんでもない個性だ。

審判も判断を下せず、煙が晴れるのを待っているのだろう。オレはまだ負けていないことを証明するために動かない。

『ここにきて初めて見せてくる緑谷の個性!! スピーディで！ パワフルで！ クレイジーだあああッ!!』

マイク先生、このノリで最後まで持つのか？ ……持つんだろなあ、やっぱヒーローってすげえや。

煙が晴れた所で審判のミッドナイトの視線を浴びて緊張する。あの人工口すぎ何人の高校生の心を乱しているのか。もうスミズキドキシちゃう。誤魔化す為に首をゴキリと鳴らした。

『残っている！ 煙が晴れて現れたその男、三済角人!! ギリギリのところで残っていたああああッ!』

「決められなかったッ……!!」

リングとして指定されている線のギリギリのところを踏みとどまったオレ。両腕で十字にガードしていたのを解いて2、3腕を振って調子を確かめると、後退させられて地面に残った靴の跡を沿う様に元の位置へ歩いていく。

「うああああッ!!」

再び突っ込んで来た緑谷くん。しかし悲しいかな、もうそれは見た。動き出しの遅さだの、移動とパンチのラグやロスなど、色々足りないし、バレバレなんだよね。まして武術をやってる人間からしたら丸わかり。

何より君にはそれしか出来ないってことをオレは知ってる。まあ相性が悪かったってことで諦めてくれ。オレもここでネオっぽさを示すために上に行きたいのでね。悪いがこれで終わりだ。

威力を殺さず投げる。どこぞの聖闘士みたいに後ろに吹き飛んでいくのを感じ

ながら、ネオの如く華麗に決まった投げポーズをゆっくり戻す。

勝った。残心のドヤ顔してたら後ろですごい爆裂音。な、なんじやい!?

「痛ツ……ま、まだまだ!」

いつの間にかリングに復帰した緑谷くん。え、なんでえ?」

『緑谷、デコピンで空中から戻ってきた!! まさしくクレイジースパイシーBOYだあ

ああツ』

成程スゴイデコピンね。先生はもう何言ってるか分からんけど。しかしどうしたもんかね……

「やめたまえ、そういうのをしない為に鍛えたんじゃないか」

緑谷くんの左指が、原型をなさないほどにボロボロになっている。痛々しいその姿は以前体力測定やヴィラン襲撃の時に見たそれだ。武術家のオレにはよく分かる。アレは後に引きずる傷だ。繰り返す度に未来を奪っていく類の傷である。

その欠点を克服するために二人で頑張ったんじゃないか……

「ウウツ……まだこれだけだ、まだやれる。」

「なぜだ緑谷くん。なぜ、なぜだ? なぜそこまでして戦う、立ち上がる?」

「……」

「それは君の未来を潰すやり方だ、分かっているのか?」

「……知ってるさ」

「ならば分かる筈だ、君は勝てない。未来を捧げてまで戦う意味はない」

緑谷君はボロボロの指を隠すように構えた。まるでオレに対しても心配などさせないという様な顔で。

「やるって決めたんだ。言うんだ、僕が来たって……」

そこまで言うなら仕方ない。優しく倒してあげようじゃあないか、緑谷出久。

自分が思ってるより人は人を見ていないぞ

三済角人。緑谷の知る限り、現時点で格闘戦において彼以上の実力を持つ生徒は殆どいない。対抗できそうなのはほぼ互角の戦いを見せた尾白と彼以上の腕力を発揮出来る砂藤、才能の塊である爆豪位であろうか。

そんな相手に、自分は挑まなければならないのだ。中位の位置を保てる常闇や轟ならともかく、自分に出来ることは殴ることと走ることだけ。そしてそのどちらも防がれて
いる。

ゆつくりと威圧感を持って歩を進めてくる彼に頭の中で選択肢が生まれ、消えていく。

(だ、ダメだ。打つ手がない)

「直ぐに終わる」

浮かんだ手段は全て無意味になると予想できてしまう。三済が目の前に来て拳を振り上げたところであった一つ残った希望にすがる。

「SMASHッ！」

相打ち狙いのカウンター。自身の個性の力を信じ、緑谷は打ち合うことを選択した。

これならば、耐久勝負に持ち込める。後は自分の気合次第なのだ。心に勇気を灯して。
「えっ?」

しかしその勇氣はあっさりと躲された。振りかぶっていた腕でこちらの攻撃をいなし、流れるような動きで死角へと入り込んでくる。ヤバイと思った時には、鋭い衝撃が頭に走る。体勢が崩れた所に腹部にも、そして顔面。気が付けば地面に横たわっていたことにも痛みで気付けない。

『ダウウーン!! 緑谷悶絶している! いやいよ格闘家としての本性を現してきた三
済! シンデレラの奇跡は、もう終わってしまったのかあ!?!』

「どうした緑谷、頑張れー!」

「初戦から盛り上がるなあ! まだまだやれるぞー!!」

プレゼントマイクの実況が響く。観客は優勢が変わったことで変わる展開に沸き立つが、冷静な判断を下す者達もいた。

「馬鹿が、最初から何も状況は変わっちゃいねえよ」

「だな。唯一の希望がああ速攻からの不意打ちだ。あれを完全に防がれた時点で……」

「緑谷とは完成度が違いすぎる。マトモに素手でやってちゃ俺だつて勝てねえよ」

「つくづく欲しかったな。オレのクラスに」

「……」

「これで終わりか？」

「それならそれでいい。特にアイツみたいに無理するやつはな」

「成程。だがな、イレイザー」

「なんだブラド？」

「同じ男に情けをかけられることほど、男に辛いことはないぞ」

「……実はトリートメントは拘ってる」

「何の話だ？」

観客が沸き立つ声も、耳に入らない。意識を手放してしまいそうになる中で、緑谷は立ち上がった。痛みはある。だからこそ立ち上がった。鋭く、重い攻撃。体の奥に響くようなその感覚は初めてで、それだけで意識を手放してしまいそうだった。しかしその中で、たった一つ違う痛みがあった。

グシャグシャになった左指。神経が集まるその箇所は激痛は意識が飛びそうになるのを防ぎ、引き戻す切っ掛けになった。緑谷はこの時だけは泣きそうになるこの痛みに感謝した。

先の攻撃で終わらせるつもりだったのだろう。心外だという様に幾度か首を横に振

り、再び立ち上がった緑谷に詰め寄る三済。

緑谷の荒々しいダッシュとは違う。ブレない重心でまるで瞬間移動の様に詰め寄る三済。繰り出される攻撃はトリツキーで、どれ一つ緑谷には防ぎようがなかった。

苦し紛れに放った攻撃もあつさり流されて崩される。大きな隙を見せた所でハイキック。無様に地面に崩れる自分とは対照に、長身で長い足をゆつくりと降ろす姿は優美ですらあった。

地面に伏せた緑谷を一瞥すると、三済は背を向けた。救護班に目を向け、視線で担架を促す。救護員は急いで向かうも、途中で驚いたように足を止めた。

それを三済が疑問に思い、視線の先を辿ると再び立ち上がる緑谷の姿。

『緑谷ツ立ち上がるッ！ どれだけ劣勢でも諦めない！ フェニックスの様に何度でも
！！ 見てるか？ 見てるか、TVの前のお前ら！ これが雄英だ！ 雄英の男だあッ
!!!』

「いいぞお緑谷!!」

「一発当てりや勝ちなんだ、行けー!!」

「……え、でもちよつとヤバくない？」

「あの子は根性あるけどもう止めた方がいい。何やってんだよ審判」

「ていうかあの老け顔やりすぎじゃない？　なんかカッコつけてるしアピールのつもりかよ」

「なーんかヴィランっぽいよな、アイツ」

マイクのMCで更に熱を上げるも、所々困惑した声も上がり、雰囲気が変わってくる。審判であるミッドナイトは運営に目を向けるが、合図はない。ならば判断は彼女に委ねられている。

止めるべきか止めざるべきか。彼女としては微妙なラインである。青臭い性が飛び散る熱闘は彼女の大好物であるが、ここから先は限界を超えかねない。まして未熟な彼等ならば尚更だ。

やはり止めるべきか。個性を発動させるべく、タイトに手をやるも視線に気づく。視線の先にはひよつことは思えない程の圧力を持った存在。彼女の守備範囲外。

三済はミッドナイトと目が合うと直ぐに視線を逸らし、緑谷の方へ向かった。その意図にミッドナイトは気付く。

ミッドナイトから見ても彼は熟練した使い手である。彼であるならば、この場で上手い具合に試合を収めることが出来るだろう。この年頃の子のプライドを考えても、相手に負かされて終わった方が傷つかないで済むものだ。

三済は棒立ちになっている緑谷に近寄る。観客の何人かが悲鳴を上げる中、容赦なく

後ろ回し蹴りが放たれた。

盛り上がる熱気が一転、地面を這うように吹き飛んで行く緑谷に観客が声を上げる。しかし中には冷静に見ている者もいた。三済の今の攻撃は焦点を絞らない、派手さだけの攻撃だ。故に衝撃は内部にとどまらず、こうして緑谷を場外へと飛ばしていく。

三済がようやく終わったと、溜め息を吐いた瞬間に爆裂音。ゴロゴロと転がって戻ってくる緑谷。

「ま、まだヤレます……」

転がったまま吐くように呟く緑谷。折れ曲がった指が増えていく。

「はつきり言おう。今の君より個性を使わない尾白の方がまだ強い。この条件で君がオレに勝つのは不可能だ」

言葉と共に見下ろす三済に緑谷は立ちあがり、構える。もう何度も見た光景に会場は呑まれていた。

「不可能かあ……」

「事実だ」

「なら、プルスウルトラだね」

「なんだと？」

「て…：うかさ…：そんな生ぬるい攻撃だから負けようにも負けられないんだよ。いつまで手加減してんだ、本気で来い！ スミス!!」

ここに来て相手を挑発する緑谷に動揺するミッドナイト。三済は首をゴキリと傾けて鳴らして服装を整えた。そして真つ直ぐに緑谷を見据える。その明らかな雰囲気の違いにミッドナイトは戸惑った。

彼が怒って取り返しのない攻撃をしないかどうか、緑谷はまだ奥の手でもあるのか、ならば続けさせるべきなのか。

彼女は男ならず子供でも冒険をさせるべきという過激派だが、ここはかなりギリギリのラインである。本来なら興奮してくる筈のだが、彼等の戦いは不安を感じさせた。故に恨まれても次の攻防を最後と決め、危なければ直ぐにでも止められるようタイツを破いた。

「行くぞー!」

意外にも先に攻めたのは緑谷。止めるなら今が最後だとしても言いたかったのか、ミッドナイトに目を向けていた三済は不意を突かれていた。

顔面に拳を受け、大きく後退した三済はゆっくりと顔を正面に戻す。入るとは思わなかったのか、目を丸くする緑谷に近寄り、殴り掛かった。

今までに比べればわかりやすい攻撃に緑谷は防御したが、その防御ごと潰された。今までとはまるで違う動き。変則的なものはない。精確、精密、機械的で、暴力的なスタイル。その動きは今までのカンフーを元にしたものよりも、彼にしつくりくるように緑谷には感じられた。

苦し紛れに殴打するも、まるで効いていないかのように前進を続ける。三済は裏拳ではたくように緑谷を殴る。軽く見えても吹き飛ばす緑谷の姿に、三済の怪力が見て取れた。それでも立ち上がろうとする緑谷の頭を掴み地面に叩きつける。

「まだ続けるかね？」

手で頭を抑えつけたまま耳元で囁くように話しかける。応える様に身動きする緑谷を確認すると、スミスは手をどけて腕を使い緑谷の首を極める。

「いい体験だ、締め落とされるといい。大丈夫、苦痛はほんの少し。後は気持ちよく意識を失う」

今までの様に丁寧ではあるがその口調は確かに前とは違う。聞くものを強張らせる威圧感を伴っていた。

「知っているか？ 今君が味わっている、この闇に落とされる感覚は死というものにとっても近いらしい」

ギリギリと締まっていくスミスの腕。対抗しようにも元の力が違いすぎてまるで歯が立たない。

「聞こえるかね、死が近づいてくる足音が」

その様子に顔を顰めつつもミッドナイトは見守っていた。極め技で意識を落とすのなら、確かに安全に終わらせられる最善の方法であるからだ。

観客もそれを理解しているのか、静まり返っている。

「しかし私とその足音を止めてあげるから安心したまえ。もしくは君がギブアップするか？」

緑谷は最後まで諦めずもがき続ける。その姿に目を逸らす者も多い。1年生とは思えない気合や根性を見せた少年の終わり方としては、あんまりだという呟きも聞こえる。

「やめたまえ、足掻くだけ苦しむだけだ」

緑谷の抵抗が落ち着き、ばたついていた足が止まる。見方によっては、しっかりと地面に足を踏ん張る様に。

「諦めろ。今の君はまだヒーローでもなければ何者でもないんだよ。Mr. アンダ……
緑谷くん」

三済の腕を掴む緑谷に再び力が宿る。全身の力が、ある一点に集中していく。小さ

く、苦しそうに、しかし強い意志で緑谷が声を漏らした。

「ぼ、僕は……」

「なに？」

「僕は、平和の象徴……」

最後の声は、静まり返った会場に確かに響いた。

「デクだ!!」

個性を使った跳躍。入試の時にも見せた大ジャンプ。しかし今は制御出来ている。ここに来て、ダッシュだけでなく両足を使った跳躍を緑谷は完成させた。

『こ、これはああッ！ 三済ごと宙へ持ち去る大ジャンプ！ 一発逆転か!? しかしこれでは二人とも場外になってしまっぞ!』

三済ごと空中、それも場外へ向けて大きく跳んだ緑谷。驚いた三済の隙について腕の隙間から逃れ、空中で向き合う。

三済に突きつけられた緑谷の指。ボロボロになっていない指を向けて、緑谷は笑った。

「ほらね、不可能じゃない」

三度聞いた破裂音。今度は一人が場外へ、一人がリングへと飛んでいく。しかし疲労からの威力不足なのか、距離が伸びない。リングギリギリに緑谷は着地するがグラつい

てしまう。

フラフラと後ろに倒れてしまいそうになるのを必死でこらえる。ここで後ろに倒れば場外。両者敗北で全てが無になる。

観客たちはその姿に立ち上がり、声を送る。自分たちの声で、あの少年の背を押せたらと思つて。

『行けえええ！ 一歩前に出る、それで勝ちだああああ!!!』

最早余力を失つた緑谷が、僅かに力を取り戻し、一歩前に出て倒れた。一瞬おいて、スタジアムを揺らす歓声。

『緑谷！ 一回戦突破!! これが、これが雄英のプルスウルトラだあああああッ!!!』

しばらくして緑谷をミッドナイトが立ち上がらせる。

「ほら、勝ち名乗りまでが仕事よ。しっかりやりなさい」

緑谷がふらつきながらも手を挙げる。再び観客の歓声が上がる。その姿を三済角人はじつと見ていた。

結構自分を見てくれてる人もいるんだぞ

「いやあ一時はどうなるかと思っただけど、最後はスカツとしたぜ」

「ねー。すつごいじゃない、あのもじやもじや君」

「でも実際欲しいのはあのデカイ方じゃね？　ありや相当優秀だぜ」

「まあねー、指名するなら普通そっちだよねー。結局最後まで平気そうだったし」

「でもガッツを示したのは小つちやい子よ。大きな子は無表情で性格が良く分からないわ」

「ていうかなんであの子ナチュラルにヴィランっぽいのかな。顔も怖いしビジネス的に売り出しにくそう」

「別にいいじゃないか！　オレは気に入ったぞ。研修に来てくれないかな、スカウトしよう！」

「Mr. ブレイブ。あなた……いえ、なんでもない」

「まだ会場の声が聞こえる。まあ盛り上がったもんなあ。オレは無傷だけど緑谷くんはボロボロだ。大丈夫かな。」

テクテクと帰りの通路を歩いてくオレは負け犬だ。あーあ、やつちやつたなあ……。スミス溜め息でちやう。

ヤバいわーホントヤバいわー。何がヤバいつて何がヤバイかを言葉に出来ないことがヤバいわ。もう思考が上鳴くんだね、うえい。

頭が上鳴になるほどパーになっているのは、何も負けたからだけではない。負けるだけなら別にいい。敗北なんてことは、武術をやってる人間なら何度も味わっている。悔しさは物凄く感じているけれど、それをバネにだつて出来る。問題はそこじゃないんだ。

・ 優しく倒してあげようじゃあないか、緑谷出久

・ 君がオレに勝つのは不可能だ

・ 聞こえるかね、死が近づいてくる足音が

おおう。おおう……。おつふ。もうダメ、死にたい。

なぜ、なぜ自分はあることをしてしまったのか。確かに緑谷くんをなるべく傷つけずに済ませようとしたのはある。内心「これは力よりも、心の強さを問う戦い(キリツ)」とか思つてちよつと口撃とかやってみたかったのもある。しかし、それで負けるとここ

まで恥ずかしいとは思わなんだ。しかもあの名言喋ってたら危うく言い間違えかけたし。

あまりの恥ずかしさに立ったまま壁を横殴りにする。しかしそれすら「なんか漫画チックじゃね」って言われてるようで恥ずかしくなってくる。

ああ……唯一の慰めは、ミッドナイトがタイツ破るシーンをお目にかかれたことか。途中チラ見もしてたけど、そのシーンでガン見してたら殴られたのにはビックリした。目が合ってドキっとしてたんだよね。それで照れ隠しも含めて思わずエージェントスタイルで本気出してしまった。

まああんな美人に見られてると思うとなあ……。皆こうなのかな？ 男って悲しい生き物よね。

「……お前が負けるとはな」

ヌルっと現れたのは轟くん。びっくりするじゃないか、思い出してニヤニヤしてたの
見られてないよな。

「戦いに絶対はない」

だから許してください。張り切って緊張してたんです。

「アイツに証明するためにはお前の方がよかつたんだがな……。お前は優勝候補だった

し」

「評価してくれていたのに悪いな」

「いや、いいさ。それはそれでいい。アイツはオールマイイトのお気に入りっぽいしな」

「そうなの？ 頼めばサイン貰ってきてくれるかね。」

「じゃあな」

「そう言つて轟くんは去つて行く。あまり話したことなかったけど励ましてくれたのかね、いやなんか違うか？ よくわかんね。」

「しかし十中八九優勝するのは彼だな、間違いない。正直に言うとおレも手合わせしたかったものだ。」

「……いや、今のもダメだ。もうなんか心の中ですら何言つても恥ずかしいことになつてる。今日は大人しくしておこうしよう。」

「Mr. 轟」

轟くんが足を止める。

「彼は強いぞ」

「……そうかよ」

「そうなんです。わざわざ来てくれたので一応忠告をね。しかし他に言い方なかったのかおレは……」

実際、緑谷くんはカッコよかったなあ。観客が魅かれるのも分かるよ。『プルスウルトラ』、なんとなしに言ってた言葉だけど彼のあの姿を見て分かった気がする。

いつだって真剣で、全力で、その上でもう一步限界を超えるんだ。オレも、彼の様に自分を超えてみたい。

クンフースタイルは強い。オレが独自に使うマトリックスクンフーは自分以上の力を持つ敵にも対応できるし、一对多数にも優れてる。でも、今更だけど、緑谷くんに使う必要はなかったんだ。

スピードもパワーも劣る彼相手ならオレができる最も効率的なエージエントスタイルが合っていたはず。傲慢かもしれないが、初めからそれでやってれば、彼の怪我は最小限で済んだかもしれない。

……本当に嫌になる。彼のためとか言って、オレは自分のことしか考えていなかったんだ。あれだけソムリエさんに言われたのに。何が救世主だ、こんな心構えで人々の希望になれる訳がない。

試合に負けたことより、このことが心を打ちのめす。いい加減変えなければ、そして自分を乗り越えていくんだ。

だから今は、心の隅に置いておこう。今の情けないオレの夢は。今は上ではなく前だ

けを見据えよう。プルスウルトラ更に、向こうへを胸に抱いて。緑谷くん、もうこれからは諦めろとか言ったり、早く負けるなんて思わない。同じ夢を目指すライバルとして、ヒーローを先駆けている君に挑ませてもらう。

いや、これもめっちゃ恥ずかしいな。もう末期かもしれん。でも止められないんだよね。

ゴキリと首を鳴らす。ルーティンの様に心の在り方をリセットするには、不思議とこれがいい気がした。癖になりそうだけど、これならスミス以外に普通の人もやってるし、ノーカウントにしておこう。

さて、緑谷くんにに激励に行くかあ。先にドンマイって言っておいた方がいいのかな？

||
||
||
||
||

試合後は観客として障子くんや砂藤くんたちの応援をしていた。もっちゃもっちゃとタコ焼きくつてたらギャングオルカに名刺貰ったよ。「ヴィランっぽいからって悩むなよ。いつでも相談しにこい」とのこと。いい人か。

ちなみにオレの予想は見事に外れ、優勝はヤンキーこと爆豪くんが見事に奪って行った。今思えば轟くんとのお話はフラグだったかもしれない。済まぬ。

そんで緑谷くんは割と善戦したんだけどなんか炎使いだした轟くんに負けた。チートだろアレもう。それでもなんやかんやで重症が左腕一本で済んだのは奇跡か。しかし緑谷くん、君ちゃんとした師匠についた方がいいでマジで。

あとビビったのが、尾白くんが心操とかいう奴と戦ってた時の事。なんでも彼は会話に応えると洗脳出来るとかいうかなりチートな個性だった。どう考えても初見殺しなんだけど尾白くんは洗脳されてもなんか勝ってた。曰く

「な、なんでオレの個性が効かない……」

「ちゃんと効いていた。体が勝手に攻撃しただけだ」

「なに？」

「無空拳。鍛錬で繰り返される拳はやがて意識すら超えて、撃つという意識を持たずに放たれる。矛盾してるけど、意識して出来たことなんてなかった。運が良かった」

何それ怖い。

「運が良かったって、冗談だろ」

「君も鍛えれば出来るようになるよ。余計なお世話だけど、もつと体も鍛えた方がいい。君もヒーロー目指してるんだろ？」

マジで？ 出来る気がしないんだけど。心操くん、洗脳されたらあかんで。

「ヒーローか。……笑うか？ こんな個性で」

「笑う訳ない。本気なんだろ？」

「ああ、普通科でも成績次第でヒーロー科に編入させてもらえるからな。絶対諦めない」
「楽しみにしてるよ。あと対人訓練ならいつでも付き合うからな！」

「ハッ、後悔すんなよ」

ええ話や。二人は硬い握手をして、観客も生徒も先生も皆爽やかに拍手を送っておりました。

「いいぞおおお！」

「ヒーローになつたらウチの事務所に来いよー！」

「それどつちに言ってるの？」

「どつちもだあ!!」

「いや、あの垂れ目はウチがもらうぞー！」

「じゃああの尻尾はアタシがもらおうわ!!」

「二人とも頑張れよー、応援してるからなー」

暖かい拍手に包まれていました。青春だなあとスミスは思いました。

ENTER THE ACADEMIA ; 緑谷出久

彼は寡黙だけど、よく印象に残る人だ。見た目もそうだが、彼の纏う雰囲気がそうさせた。入学後に浮つく僕たちと違い、彼は始めから動じていなかった。いや、はじめから何かを見据えていた感じだったんだ。僕たちが明確にヒーローを意識するように、彼は何かを目指していた。

しかしそれは何かディスプレイ越しに見る様な無機質な目で、僕はそれがたまらなく嫌だった。

そんな印象を変えられたのがオールマイトによる対人戦闘訓練だった。

「ちよつとアレ見てよ、尾白と三済が戦ってる!」

「うわ、かつけえ!」

「すげえスピードだ……尾白もそうだけど、三済もヤバいなコレ」

モニターには尾白さんと三済くんが戦っている姿。二人は素人から見ても凄いと思えるほどの格闘戦を行っていた。

「ねえ、アレって個性使ってるの?」

「尾白はともかく三済はわかんねえな」

「まだ使っていないぞ、アレは純粋な技術だな。皆、障子くんや葉隠くんの方もいいが、少しだけこつちに注目してくれ。アレは良い見本になる」

オールマイトに指示されて皆が集まる。三済くんが尾白くんに何かを言うと、二人の戦いは更に激しさを増していった。

「彼等は相当に鍛えたんだろうね。見てくれ、堂々としているだろう？」

三済君が大きく跳躍して膝蹴りを放つ。当たったら危ないのではと思えるほどの攻撃だが、躊躇いなく撃ち、そして躲される。二人は互いに何の動揺も見せず次の行動へと瞬時に移っていく。

「個性に頼らない強さつてのは大切だ。彼らの様な格闘技術だけに限らず、冷静な判断力、思考の柔軟性、なんでもいい。君たちはこれだけは負けないっていう自信を持っているかい？」

あの二人は、自身の肉体と技術に対する自信が見て取れた。遠回しにオールマイトから自分への自信の無さを指摘されたのだろう。そういう口調だった。

「そういう意味で言えば、個性関係なしに高い格闘技術を持つ彼等は頭一つ抜けているのですね」

「そうだけど、まだ微々たる差さ！ あとはもし個性が使えない状況で、彼等の様な敵に

対して自分だったらどうすればいいのかなんて考えるんだ」

「個性が使えない状況？」

「結構あるんだよ、プロの現場ではね。特に複雑な個性の持ち主なら尚更だ」

オールマイトの言葉に皆それぞれの考えを巡らせていた。僕もその手のことは好きだし得意だが、今はそんな気になれなかった。

自分に対する自信の無さ、それは自覚していたが彼等を見たとき大きなショックを受けた。

僕は今まで何をしていたんだろう。ヒーローやヴィランを自分で分析して、それに対して出来るかも分からない行動を考えて、それで終わりだ。彼らの様な力が、自分になり。

バックボーンがないんだ。今まで、努力とも呼べない薄っぺらいことしかしてこなかった。だから今、力を手に入れても自信がない。これは因果だ。僕は、自分がどうしようもなく情けなかった。

「でもさ、アイツ等なんか楽しんでね？」

「捕獲するのも出し抜いて逃げることもしてないしね」

「二人とも完全に目的が頭から抜けてますわね」

「H m m……ま、まあ彼等もまだまだだな！」

僕が落ち込んでみると、肩に手を置かれたことに気付く。

「大丈夫？ デクくん」

僕のパートナーの麗日さん。僕の様子に心配をしていた様だった。

「……うん！ 大丈夫だよ、二人が凄いから驚いた！」

「そ、そうなの？」

「実際彼らの様な敵が現れたらどうすればいいの。現時点のボクじや敵いつこないし、やっぱ逃走するのがベストなのか？ そもそも今回の想定では勝利条件が明確に設定されているんだから交戦すること自体が間違いなのかもしれない。そうなるらむしろヒーロー側にこそ隠密行動が重要視されるのか。成程、なら僕がすべきことは……」

「だ、大丈夫そうだね」

ないものねだりしたつてしようがない。どれだけ情けなくたつて、僕は今やれることをやるしかないんだ。それは少なくとも、自分のパートナーを心配させることじゃない。

麗日さんを安心させると、いつものように思考の海に沈んでいく。その直前、視界の隅に入ったオールライトはこつさりサムズアップをしてくれた。

その後、オールマイトの言もあり僕は格闘術を学ぶために尾白くんの下に行った。身体強化系の個性には格闘術の習熟は必須である。授業だけで満足する訳にはいかない。僕は尾白君たちと比べれば始めるのが遅いのみだから、とにかく努力しなければ。

「え、オレに？ いやあオレなんてまだまだ未熟だから、ちよつと人には教えづらいなあ……」

尾白くんには断られてしまった。彼は意外と頑固で、あの授業以降教えを乞う他のクラスメイト達の頼みも断っていた。曰く、「変な癖とかつけたら申し訳ない」とのことだ。練習試合とかなら喜んで付き合ってくれるのだけど。

「そうだ、スミスに教えてもらったらどうだ？ アイツなら幅広い流派やってるし、教えるのも上手そうだったぞ？」

「スミス？」

「ああ、三済のことだよ。絡んでみたら、意外と話しやすい奴だぞ」

もうあだ名で呼び合っていることに尾白くんのコミュ力を感じた。威圧感のある三済くんと仲良くなるあたり、本当にいい人なんだろうと思う。

尾白くんは良い人だけど意志が強い。アドバイスもくれたし、折れ所だと思つて感謝を述べた。三済くんは正直苦手だけれど、強くなる為ならなんでもする気持ちには変わらない。

……でも、実は知ってる。そんな頑固な尾白くんも葉隠さんには根負けしていることを。軽い護身術とかをこっそり教えていることを。ぶっちゃけ折れたのは、邪魔をされた葉隠さんの反応が怖かったのは少しある。

苦手だのなんだの言ってられない。いざ勇気を出して三済くんに頼んでみると、尾白くんと同じ理由で一度は断られた。しかしどうしても頼むとストレートの打ち方を教えてくれた。

正直言うと、格闘戦という戦い方そのものを教えて欲しかったのだけだ。

「何か一つでも本当にモノに出来たら、他のなんて大して必要ない」

武術を真剣にやってきた彼からすれば、僕の態度は決して良いものではなかったのだろう。それはそうだ。彼からすれば僕なんて素人なのだから。

実際、やってみたらまるで上手くできなかつた。スマホで自分の動画を撮影すると、彼の言うこともよく理解できた。教えられたこと一つ出来ないで、大口を叩いていたのだと思うと顔が赤くなる。

平和の象徴になる為の近道はない。その日は一晩中練習し続けた。

何日かした後、放課後に体育館で練習を続けているとそれに気づいた三済くんに驚かれた。

「力にならせてくれ」

三済くんは真剣に僕のことを考えてくれていたらしく、ある程度教えた形が出来たことで話をしにきたらしい。改めて以前の相談が素人の無知であったことと、彼を印象で判断して誠実に気づけなかったことに恥ずかしくなる。

僕が個性について三済くんと相談をすると、とりあえず感覚を掴もうということからはじまった。

彼が提案してくれたのは古武術の練習方法を取り入れたもの。ゆっくりと、今まで練習した通りの正しいフォームで拳を打つ。そのスピードはまさしくカメのようで、全身に神経を張り巡らせていなければ直ぐに崩れ、叱咤された。今まで同じように遥かに難しいそれを繰り返す。

この感覚を僕は知っている。ワンフォーオールを制御しようとする感覚とよく似ていた。オールマイトが力の制御にそれほど困惑しなかったと言った訳が分かった。オールマイトは個性を受け取る前から身体は鍛えてたって言ってたから、多分武術も相当やり込んでいたんだ。

そして目処が立った所で今度は個性を最小限に乘せて放つ。これも相当難しかったが、今までやってきた分、ストレートだけはなんとなく感覚を掴めた。

全ては繋がっているのだと思ひ知らされる。積み上げた力が自信になるという意味も。

右ストレートだけ個性を使つた攻撃が制御できるようになると、僕は彼に深い感謝をした。その後には雄英祭に備えるための相談にも真剣に乗つてくれた。

この時には今までの苦手意識はなくなつていた。僕の練習に寡黙に付き合つてくれ、導いてくれた。見た目の印象も思慮深い性格と言う風に変つた。何故かサン格拉斯をくれたり、実はコスチュームが別にあつたり、変な所もあるのも知つた。二人で初めて行つたカラオケでは予想外の選曲ばかりで、笑いつばなしだった。

もう僕の中では、三済くんはスミスくんと呼べるぐらい、大切な友達になつていたんだ。

だから恐ろしかった。雄英祭トーナメント、スミスくんと戦つた時の最後の最後。

「今の君は何者でもない。諦めろ、Mr. 緑谷」

意識が朦朧としていた為、はつきりと聞こえた訳ではない。だがその言葉を聞いてスミスくんが僕を締め落とした瞬間、何かが見えた。視界が切り替わり、闇に堕ちた瞬間。

8、いや9人か？ 何かの人影が僕を見ていた。彼らと眼があつた時、僕は何かを受け取つた。形のあるものではない、強い意志。そして何かの警告、危機、使命のようなものを。

『う、うあああああああああ!!!』

叫びとともに現実に引き戻された。一瞬の力を振り絞り、自分の存在を示すように飛ぶ。

その後はなんとか勝つことが出来た。僕は半分訳の分からないままリングの中で胸を撫でおろすと、視線に気が付く。それはスミスくんのものであった。

それは好奇心だった。場外で佇んでいる彼の関心が、僕に向いているのが分かった。何の悪意も、悔しさや敵意もなく、僕に対してあの映像を見るかのような目で僕を見ていた。

その時、理解してしまった。あの時影から受け取つたモノの意味を。

僕と彼は絶対に相容れることはない。彼の存在は、僕の力が決して許すことはない、

対極であることを。

「congratulation. 応援しているよ、緑谷くん。」

「……ありがとう」

「早く傷を治すといい。それと怪我の事、済まなかった」

「気にしないで、僕が選んだことだから」

「また一緒に鍛えよう。もうこんな怪我をしないように」

「うん！ その時はよろしくね！」

その後、控室で会った時は僕の知ってる彼だった。僕の言葉に震えはあつただろうか。この時ばかりは怪我で誤魔化せることに感謝をした。

去って行く彼を見て、酷く安堵した。そして願うばかりだ。彼のあの眼の対象から自分が外れることを。

こんな言い方はおかしいと思う。でも、僕にとって親しい友である筈の彼と、別人のような彼。それは理解できない、したくない存在。それが三済角人だ。

自分で選択出来ている物事なんて殆どないんだぞ

それは雄英祭二回戦のことだった。まるで鬼が哭く様な風の中、男は入ってきた。男の名は砂藤力道。その風を哭かせているかの如き肉体を晒し、リングに降り立つ。

同時に舞台上がり、向かい合ったのは尾白猿夫。彼が持つ雰囲気がそうさせるのか、彼の周囲の風は鬼さえ哭き止むかのように凧いで見えた。

「証明してみせよう。力こそパワーだということを」

砂藤は上着を脱ぐと、その言葉を裏付ける肉体を直に見せつける。

「武を舐めるなよ、砂藤」

砂藤の見るからに剛健な肉体に対して、一見頼りなさげに見える尾白。しかし薄着から浮き出るその肉体美は、砂藤を前にしてもまるで不安を感じさせず、見る者の心を凧いでいく。

『力と武。永遠のテーマ。男は言った。戦いに、不純物は必要ない！』

張り付くような緊張感を更に高めるべく声が響いた。

『頂の住人たりえる絶対強者か！ 強きを墮とす具現者か！ 青春の瞬きが此処にある！！』

二人が構える。片方は余りにも愚直な、しかしむせ返る程の圧力を持った構え。対するは一点の曇りもない、しかし底が見えぬほどの深さを感じる構え。

二人の緊張が頂点に達した所で、画面の音声に続いて見えざる声が響いた。応える様にびよこびよこよく通る声と角を添えて。

「砂藤 力道！ 推して参る 推参!!」

「二眼二足三胆四力……制する!!」

——二つのスマホのディスプレイにはそれぞれの画が映っている。片方は雄英祭の公式ホームページで配信されている男二人の映像。もう片方のスマホには、男たちの言動をなぞっている少女たちを録画している画面。

「はい、カット。出来たよー」

「ありがとう、じゃあサイトにあげよつか!」

『やめろおおおお!!』

はしやくぐ芦戸と葉隠に絶叫する尾白と砂藤。哀れだ……

葉隠さんと芦戸さんがハイライトしてるシーンは雄英祭の1場面。なんか変なスイッチ入った二人がやつちやつたシーンでもある。もちろんこの場面も全国放送され

ている。そして今大会で最も話題になっている。

というのも実はこのシーン。小さなキッズの間で大流行しているらしい。男の子の心を絶妙にくすぐったのだろう。実際今日も通学路でこのやり取りをやってるキッズを見た。

それ以外にも女子高生が真似してみた動画が流行ったりと何かと話題を集めている。既に2人には取材の話も来ているらしい。全く羨ましくないが。

尾白さんと砂藤くんは今も手で顔を覆って机に突っ伏している。オレも一歩間違えばこうなっていたかと思うと背筋が凍る。帰りに何か奢ってあげよう。

「緑谷が悪い」

「ボク!?!」

「初戦であんな戦いするから……」

「そうだそうだ!」

「ボ、僕なんかより全然カッコいいじゃないか! い、今から取材何てウラヤマシイナー!!」

「心にもないことを……」

「そうだねー。多分このポーズで写真お願いされるんだろうねー。羨ましいなあー」

「う、うわああああ!!」

再び動画を再生する芦戸さん。やめてくれ……。動画とかいうどうあがいても客観視させてくるものはやめてくれ。ああ、砂藤くんが発狂して頭を打ち付け始めた。彼はもうダメかもわからんね。

漢・切島が尾白を励ましている。分かるよ。会場の雰囲気とマイク先生の実況で頭がやられたんだよね。男は皆君たちの味方だよ。

「まあでもカツコ良かったよ！ 惜しかったねえ。優勝したらなんでも一つ言うこと聞いてあげたのに」

「からかわないでよ葉隠さん……」

キヤツキヤしてんなあ。特に尾白、アイツだけなんか世界観の違うノリやってやがる。具体的に言うとかゲツサンのな。

しかし今思えば俺ら1年の戦い何て可愛いもんだったわ。3年なんてアレだ、もう半分殺し合いだったもん。完全に世界観違ったもん。なんでも雄英の頂点たる生徒会長はあの戦いで決まるらしい。どうりで手足の1、2本気にしない位のノリと気迫だったわけだよ。いやあ恐ろしいところに来てしまったものだなあ。

砂藤くんのヘッドバットをBGMに今日も騒がしい教室で思いを馳せているとドアが開く。

「おはようっ」

担任の相澤先生が入って来た瞬間、皆一斉に席に着いてダンマリだ。訓練されてるなあ。

「……さて、今日のヒーロー学は特別だ。研修に先立って、お前らのヒーロー名の考案を行う」

頭から血を流す砂藤くんは何の動揺も見せないあたり、流石だと思う。周りの連中もテンションが上がって総立ちだ。しかし砂藤くん、血がまき散るから君は大人しく座ってなさい。

砂藤くんを抑えつけているといつのまにか説明が終わっていた。なんでも研修があつてそこからの指名があつたらしい。

「つかー！ 白黒ついたなあ!!」

「やっぱ轟と爆豪に集まるよねえ」

「てか尾白と砂藤も凄くね？」

「それはほら、今話題だし」

「複雑だなあ……」

1位2位は勿論、砂藤くんや尾白くんとも文字通り桁が違うものの、何とオレにも指名が入っていた。最終トーナメント1回戦負けというなんとも目立たない結果なので

素直に嬉しい。

「意外と少ないな、スミス」

「触手が後ろから話しかけてきた。もう慣れたもんだが普通に話しかけてきてもいいのよ？」

「私は来ないと思っていた」

「俺もだ。まあお互い一回戦負けだしな。それに尾白と砂藤がおもしろい……票を集めてくれるし」

尾白に砂藤に、ただでさえ扱いが難しい格闘系がパイを食いあつてる。珍しいケースだつて緑谷くんが呟いていた。なるほどなあ、ドンマイ。

「あー……例年はもうちよいバラけるんだが、見ての通り偏っている。理由はわざわざ言う気はないんだが。……尾白、砂藤」

『はいー！』

「お前らのお陰で普段なら来ないところからも指名が来ている。話題性ありきとはいえ、あちらさんも期待しているつてことだ。雄英としても今後も付き合いを願いたい。何処を選ぶかは自由だが、くれぐれも失礼のないようにな」

『はいー！』

「お前らもだぞ。んじや後はミッドナイト先生に相談してくれ。特にその二人はメ

ディア関係含めてな」

考えタイムということでゲンドウポーズ。まあネオを目指すオレとしてはそれ以外にないから思考はポイ。他のこと考えよ。

尾白と砂藤はヒーロー名考えるの放棄してミッドナイト先生に相談してる。注目浴びすぎて怖かったんだろなあ。あ、泣き出した。そしてミッドナイト先生の豊満な胸に抱えられた。峰田君も泣いた、血涙で。

「子供なんて直ぐに飽きるわ。けど折角だから顔を売れるだけ売っておくのも手よ？」
とは先生の談。そりやそうだ。段々ノリ気になつてる砂藤くんのこれからが不憫である。彼がその気になる頃にはキッズはヒエヒエかもね。

そんなこんなで制限時間。発表タイム。

「デク」

「セロファン」

「テンタコル」

「ウラビティ」

サクサクいくなあ。気になる二人は？

「武術ヒーロー。テイルマンで」

「甘やかヒーロー。シュガーインパクトで」

「砂藤、お前それでいいのか？ 今書き換えたんじゃ……」

「シュガーマンにしようと思っただけど被ったから」

「オレが変えようか？ 拘りないし」

「いいよいよ、オレが変えるよ」

「いやいや遠慮しなくても……」

何か見えない友情が生まれてるな。これが決闘後の男の友情という奴か。どちらかというと同類相憐れむな気がするが。

「三済くんは何にするの？」

ミッドナイト先生に促されてボードを裏返す。書かれているのは勿論コレ。

『ネオ？』

沈黙。え、なぜ？

「いや、悪くはないのだけれど。なるべくならその人や個性を連想させるモノの方がいいわよ？」

連想できんじゃん。いかにも救世主っぽいじゃん。

「お前、ネットでエージェント・スミスで通ってんぞ。そっちの方がいんじゃないかね？」

なんですと？

「……なぜだ」

「そりゃプレゼントマイクがエージェントって言って、緑谷がスミスって言ったからだろ」

緑谷ア、屋上に行こうか。久々にキレちまったぜ。爽やかしようぜえ。

「三済君がスミスって呼べて言ったんじゃん!？」

ガタンと机を立てて威圧感をMAXにすると慌てた緑谷くんがキョドる。そう言われるとそうだったわ。ゆっくりと震える肩で席に戻る。

「悪いこと言わないからスミスにしといたら？ 悪くないわよ」

「NO!」

「じゃ、じゃあ間をとってネオスミスとか」

「……NO!!」

一瞬迷った。

「デクくんだってあだ名じゃない。そんなに嫌?」

「ここで折れたらいけない気がするので」

「じゃあ一旦保留で。他の人から決めてきましょう」

結局、名前を普通に使う轟くんや飯田くんが出た時点で、ほら見ろよ的な視線に負けて『スマイス』にしました。いや、エージェントを取り除けただけオレの勝ちではないか？ それにホラ、これは仮ネームだし！ スミス勝利！ 大勝利！！

「ドンマイだな。帰りになにか奢ろうか？」

この後めちやくちやカラオケしました。

期待つてのはなるべく応えた方がいいんだぞ

ついに来たぞ職場体験。この迷宮染みた駅から飛び立った先に、オレ達の新体験が待っている！

ところで尾白くん、裏新宿へはどっちだい？

「ちよつと待ってくれ。乗り換えなしで行けるルート探してるから」

「すまない」

いい奴である。葉隠さんを見送った後、こうしてオレを助けてくれるいい奴である。

ここは魔境。拡張しすぎてスマホでさえ混乱する。そんな駅を案内してくれる彼に感謝。

「俺は迎えが来るから気にしないでくれ」

「流石に財閥系の事務所は違うな」

「こんなことがなかったらまず話が来なかっただろうし、緊張するだけだよ」

尾白くんは熱い知名度により、武術の総本山的な事務所にスカウトされた。なんでも武術を前面に出しているところが評価されたいらしい。若手が打ち込んでいる姿をPRしたいとのことだ。

「まあ折角だからね。貪欲になれって先生に言われたし」

広告塔になる代わりに、事務所が抱えている達人達からの指導を受けられるのと。この手の世渡りにも何処か吹っ切れた様子だ。

「そうだな。オレもそうするつもりだ」

尾白くんに同意したのは砂藤くん。彼は芸能界に強い事務所に行くのだ。ヒーローになればメディアと切つては離せなくなるので、それならばと逆にコネを作りに行くつもりらしい。

「じゃあオレこつちだから」

「ああ、またな」

「成長して会おうぜ」

「幸運を」

1人空港に向かって行く障子くん。彼は災害に強い事務所に行くらしい。その場のノリに流されない彼らしい選択だと思う。是非頑張つて欲しい。

さあ、オレも行くでしょう。新たな環境で、新たな自分を見出しに。その一歩を踏み出すのだ。

「スミス逆だ。ギャングオルカさんのところには下りで行った方が近いから」

済みませんね、ありがとです。そんなじゃ行きますか。

さてさて、やってきたるはギャングオルカ事務所。雄英祭後に自分の動きや戦い方を相談したら、なんか普通に親身になって話をしてくれた。研修前にも話してたら

「職場体験？ ウチこいや。直接見てやるから」

とのことでした。他の指名してくれた人たちには悪いが、ギャングオルカさんのところが気になっていたのでこちらにすることにしました。いやあしかしホントにいい人だなあ、ギャングオルカもといサカマタさんは。

駅を降りてテクテクと歩くと事務所に着く。トントントン、と扉を叩いて開く。

「おらあ！ さっさと立て！ ちんたらしてたらヴィランが戦争を終えちまうぞ!? 戦場に行きたい奴は今死ぬ！」

「今の君たちはクソの山だ。マスかいたおパンツのカス程度の存在になりたくなければ、死んでも死ぬ気で立ち上がれ」

「いいか、ヴィランが幾何学的な配置であるならば攻撃は予測できる。効果的な動きで最大のダメージを最大数に……」

ああ、うん。あるある。

スパルタな訓練場を兼ねている、大広間らしき所で立ち尽くしていると大きな人影がやってきた。

「おう、よく来たな」

あ、ドーモ。ギヤングオルカIIサン。

「Mr. サカマタ。お招き頂いて感謝します」

「ああ、俺らもお前が来てくれるのを待っていて……誰もここじやてめえを歓迎なんざしねえ！ いいか、プロの活動を知りたいなら死にももの狂いでついてきやがれ!!」

「イエツサ」

「それとオレの事はここでは社長と呼べ」

「イエス、ボス」

体育会系である。雄英で慣れてるから構わないけど。しかしボス自らお出迎えで案内までしてくれるとは。本当にいい人である。

ボスと雑談しながら事務所を案内された。ここから数日寝泊まりする部屋で荷物を降ろし、コスチュームという名のスーツに着替えて先程の訓練場に向かう。どうやら紹介があるらしい。緊張しちゃうね。

「月並高校から来ましたテンプレートです！ これからよろしくお願いします！」

既に他の職場体験者の自己紹介が始まっていた。皆よろしく、仲良くやろー。

しかしアレだね。色とりどりのコスチュームの群れの中で、黒のスーツ姿って浮かないだろうか？ これは面白いことを言つて場を和ませなければ。

「スマミスです」

特技はリップシンクですが歌も歌えます、一曲やります……と言おうと思つたら遮られた。

「こいつらが今日からウチで職場体験することになるファツキン・コメデイアン二等兵だ。人間じゃねえ、ただのマスかき猿どもだ。存分にしごいて後悔させてやれ！」

『サー・イエツサー』

「声が出てねえぞ、指導ー!! 最近暑くなつてきたしな、お前らも体調には十分気をつけて……死ぬ気でこいた声出しやがれ！」

『サー・イエツサーー!!』

「よおし、それじゃ続けるー！」

ボスからの紹介が終わると何人かの先輩が集まつてきた。指導方針を決める為、今の自分の戦闘スタイルについて聞きにきたようだ。どうもこの事務所は戦闘においての実践的な訓練に力を入れているらしい。

此処ギャングオルカ事務所はかなり平均年齢が若い。ボスと周りを固める数人のサ

イドキックを除くと殆どがインターンや大学の研修生など若手ばかりとのこと。それは若手を育てたい、経験や知識を伝えて若者の力になりたいというボスの方針故だ。ボスの事務所は受け入れ実績が多く、大変な名門とのこと。何人もの大物ヒーローを排出したり、既に名を上げたヒーローが学びに来ることもあるらしい。……やべえ、知らなかった。

実際ボス自身も面倒見がよく、諸先輩方のサポート体制も整っている。つまり、すごく良い事務所なんだなってスマスは思いました。

「じゃあみんな、ギヤングオルカ事務所恒例のアレやろつか！」

まとめ役っぽい人が声を上げた。アレとはなんでしよう？ わらわらと広間にいた方々が集まってくる。

「ギヤングオルカサイドキック百人組手！ 最初は個性なしでいってみよー！」
「実際に百人いるわけじゃないけどね」

新人たちにオープンフィンガーのグローブとヘッドギアが渡される。そして先輩たちがいくつかの組に分かれた。

先輩たちは既にリング代わりのマットに上がって待っている。とりあえず拳で語ろうというこの空気、いいと思います。

隣を見ると不敵な顔の同期たち……と思ったが単に緊張してるだけっぽかった。それでも覚悟を決めるとそれぞれリングに上がっていく。

「一つ揉んでやるか」

「先輩の胸を借りさせて頂きます」

「ハッ、胸借りるつつうツラかよ」

的な様式美をしていた。羨ましい。オレもやりたい。

「……」

「……よろしくお願いします」

「……あ、ああ」

なんやねん、この点々の多い会話は。まあいいや、こつちも始めるかあ……

「はあ……はあ……ま、負けました」

「フツ。1年のガキにしては良い線いつてるぜ。精進しな」

「ハ、ハイ！」

先輩と新人。青色の汗を流す二人。

爽やかだなあ。同期が先輩との絆を着々と築いていく横で、オレは屍の山を築き上げ

ていた。

「そこまで！」

「ありがとうございます」

「……」

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

「次お前行けよ」

「いいけどよ。怖いんですが」

「私も怖いですハイ」

「あんなん新人じゃねえよ、色々と」

「震えてきた。やりますけども」

「これが絶望感か。ヴィランとの実地訓練でも感じた事ないのに」

「じゃ、逝きますか」

「あい、逝かれますか」

ジェンガの如く対戦相手を積み上げていく。別に先輩方が弱いわけじゃない。手合わせすれば分かる。若いのにしっかりと積み上げたものを感じる。しかしアレだ、条件がちよつとね。

しかしエージェントスタイルを解禁したオレだけど、コレちよつと凄いわ。次々と来

る先輩の攻撃を淡々と捌いて拳や蹴りを叩き込んでいく。すると更に積みあがる屍の塔。

まさしく絶好調。異形系の人もいるけど、個性なしなら今の俺の敵ではない。なんていうか体育祭以降体が軽いつて言うかキレルつていうか。オレも一步乗り越えたつてことなんですかねえ……

「あ、あはは。君強いねえ。雄英祭一回戦負けだっけ？　なんで負けたの、いやホントに」

「相手も強かったので」

「……そっかあ。最近の子は凄いなあ」

そういう先輩と年は大して変わらないと思う。視線が何故か上の方に。遠い目をしないで、先輩。

割り当てられた組を殆ど片付けると、他の研修生との組手を終えて観戦していた人たちを見る。覚悟を決めたような顔してた。そんな顔しないで、気軽にどうぞ。

「はあ……悔しいけど、これじゃあちよつと相手にならないね」

まとめ役っぽい人が前に出る。その両手には特徴的な武器、旋棍と呼ばれるものが握られていた。所謂トンファーキックに使われるアレだ。

「君にはワンステップ先で丁度いいみたい。ここからは個性と武器を好きに使っていい

よ。私も使うから」

認められたのだろうか。周りの視線が驚きと共に集まる。嬉しいけどこんなに注目されると緊張しちゃう。ていうか目の前の先輩が美人で緊張する。やべえ、今更ながら意識したら止まらなくなった。落ち着くために呼吸一つ。……OK、これで大丈夫。

ヘッドギアとグローブを外し、襟に手をやりスーツを整える。決して意識している訳ではない。

「落ち着いて……しつかり、しつかりするのよ、私」

集中力を高めていく先輩。その凜とした佇まいで今までのインターン生との格が違いが分かる。周りの正規のサイドキックたちも「ほう、アイツに全力を出させるか」的なことを言っていた。

胸の高鳴りがバレないように拳銃の調子を確認をしつつ、サングラスをかけ、プラグをはめる。これは決してカッコつけてではない。どのような状況にも対応できるベストの装備がこれなのだ。良い所を見せたいという気持ちは一切ない。

最後に首をゴキリと鳴らし、合図を待つ。ちよつと空いた時間。ドキドキが止まらないので、一句読みます。『グラサンに 映る私の 青い春』、スミスでした。

新人つてのは結果じゃないんだぞ？

久留里 周（クルリ マワリ）。傑物高校の3年生。倍率の高いギャングオルカ事務所に選ばれ、インターンを通して卒業後も所属をスカウトされてる優秀な生徒。今はインターンたちの取り纏め役を行っている。雰囲気も実力者のそれに相応しい。キリリとした目がいいですね。クルクルしたショートボブの髪も愛らしい。以上が現在の情報です、スミスより。

「マワリ先輩、緊張してますね」

「アイツ内弁慶だから。初対面だとあんなもんだな」

「しかもあの新人、顔が怖いですからね」

「下手なヴィランより怖いな」

「ええ、1年でアレだと思うと正直恐ろしいと思う部分もありますね」

「いいか、茶化した方がいいと思うなよ。本人は傷つくんだからな」

「え？ なんの話ですか？」

「……あと10年すれば分かる」

様々な機能を持つコスチューム。例えば自分なら多機能のスーツにサングラス、拳

銃、通信の傍受や集音・防音の機能を持ったプラグなどだ。それらのアイテムは戦闘において多大な情報源。一見でそれらから当たりをつけ、行動を決めなければならない。個性全盛時代の戦闘においてそのスキルは必須の要素である。

対峙した相手を観察する。服自体は特別な機能のなさそうな武闘派の軽装だ。腰には無数の鉄環のついたベルト。手に持つ武器はトンファー、キックなどの近接戦を警戒しなければならぬ。靴は何やら仕込みの在りそうな大型のモノ。ファッションなのかもしれないが、中が見えないモノには警戒するのが定石だ。

雄英祭で早めに落ちたのが功を奏した。互いに個性の詳細は把握していない。しかしこちらが増強型ということを知っているだろう。相手も直ぐには攻めて来ず、警戒している。

周りの人間も緊張した様子だ。自分なりの分析をし、行動のシミュレーションを計る絶好の機会。皆食い入る様に目を凝らしていた。この熱意と思考能力の高さが名門たる所以なのだろう。

互いに分析を終えた。それを感じ、握った拳に力が入る。

「クルクルクルリつと……行くぞ、私」

手慣れた様子でトンファーを回すと、彼女に死角を取られた。滑る様に一瞬で動く、しかも無音に近い。反射的に構えた腕に衝撃。想像以上の威力で反撃は出来そうにな

い。

「初見で防ぐつて。ヤダなあ、もう！」

動けない自分との距離をいつの間にか空け、腰に付けた鉄環をトンフアーで通すとトンフアーごと回し始めた。音からして尋常ではない速度だ。アレは飛輪の一種か、ヤバイと思つた時には複数の回転したリングが飛んでくる。

バレットタイムの世界で飛んでくるリングを躲す。が、幾つかの輪は軌道を変えて上下左右、様々な方向から襲い掛かつてきた。それらをいつもの動きで全て躲す。しかし最初に避けた輪がフリスビーのように背後から再びやって来る。躲せるか……

「うわあ、自信なくすなあ……」

上手く躲せず掠つてしまった。大したダメージではないが、ちよつと驚きだ。自分の個性を正面から破られたのは初めてかもしれない。

いかに弾丸をも捉えきる個性だといっても、対応能力の限界はある。複数の攻撃を死角から、しかも最後まで気付かせない一撃もちゃんと用意した連続攻撃。気付くのが遅かったり近すぎたらムリなものはムリ。ダッジデイスされてしまう。

流石に経験値の違いを感じる。このまま後手に回るのはよくないかもしれない。

懐から拳銃を出す。デザートイーグル、最強の拳銃で有名な銃。そのデカさは知らない人でも威圧感を与える。それを躊躇いなく撃つ。

威力を抑えたゴム弾とはいえ、当たれば一撃で悶絶は必須。丸一日は動けないであろうぐらいの威力だ。今は弱装弾にしてるけどね。

「おっと、怖いなあもう！」

あつさりと射線を切ってくる先輩。普通の人なら銃を見た瞬間は硬直するもんだが、彼女は逆に銃を見た瞬間動き出していた。

驚きはしない。ここの訓練風景を見てたけど、恐ろしいまでに実践的だった。つまり銃の相手はお手のモノってことですか。

何発か撃つが全て独特の動きで躲される。段々と分かってきた。恐らくあの靴はローラースケートの様なもので、靴自体に消音機能が付いているのだ。

「かなり良い腕してるね。けどね！」

片腕を伸ばした正確な射撃体勢。そこからの精密射撃を躲し、一気に近づいて伸ばした腕の内側に入ってくる。言うのは簡単だが並みの度胸と腕じゃない。ついでに可愛さも。

銃の間合いを殺した瞬間、トンファーが襲い掛かる。その技量はかなり高く、昔道場にいた先生より若い分動きが速い。

こうなると銃は持つてるだけ邪魔なので手放す。そしてその腕で躲しきれない攻撃を防ぐ。

あ、痛い。これマジ痛い。今なら素手でトンファー防いで痛がってたジャツキーの気持ちが分かる。

「銃と近接戦が噛み合っていない。それぞれは一流なのにもつたいなあ、もうー！」

実はオレの個性だが、銃なんかの直線的で予測に余裕があるものに関しては無効だけど、選択肢が無数で即断を求められる近接戦に関してはあんまり意味がない。ネオもそうだったし、仕様みたいなものなんだろう。だからこそ格闘術を重視したんだしね。

「(っ)からどうする!! 新人くん！」

猛攻から抜け出せない状況に意を決すると、攻撃の一つを選びトンファーを掴み取る。

「え? 痛くないの?」

驚くマワリ先輩。そもそもめつちや痛い、スミス涙目。でも堪えて攻撃する。

渾身の右ストレートが届く瞬間、視界が180度回転して空振る。え、なんで?

「私の個性、『回転』。触れたモノを回転させる。ちなみに靴に仕込んだローラーの回転が移動術のネタね」

体が回転し、宙に浮いている。回る視界の中で先輩がトリニティご愛用のキックの体勢に入っているのが見えた。

「全力でいくから、食いしばってね?」

食いしばりますとも、マドモアゼル。

先輩の渾身のトンファークックを喰らい、吹き飛ばされる俺。エージェントの如く壁にめり込んで止まった。

「や、やった！ 勝った!!」

クルクル回る先輩の姿が可愛い。なのでそのまま壁の中にいると誰かに掴まれて放られる。ドスンと着地して立ち上がると目の前に先輩の顔。首をゴキリしてスーツを整える。嬉し恥しで挙動不審しちやった。

「ピンピンしてるぞ、鍛錬不足だなマワリ」

放り投げたのはボスだった。いや、効きましたよ。めっちゃ効きました。このボディですら数秒動けなくなるくらいに。

「んもう……折れそうだ、私の心」

先輩が引きつった顔をしていた。いや、そんなことないです。特に最後のは今までで一番綺麗に入れられた攻撃です。ついでに先輩もキレイです。

「ひええ」

目に涙を浮かべる先輩。そんな先輩も素敵ですと想いを込めて、構えをとった瞬間、オレと先輩の間に誰かが割り込んできた。何奴!?

「この新人くんには更に先のステップで丁度いいんじゃないですかね。つてことでオレ

に交代で」

現れたのは頭にギアをつけ、上半身を晒したコスチュームの男。ふむ、中々良い腹直筋をしていますね。

ボスを見ると「別にいんじやね？」的な顔をしていた。あ、なら続行ですか。

「で、でもヨーくん私より弱いんじや……」

「いやそういうのは言わんといってくださいよマワリ先輩」

ヨーくんと呼ばれた人のテンションが萎えてしまった。ざまあ。そして俺もあだ名で呼ばれたいです。

「よろしく、新人くん。雄英祭見てたよ。ヴィランとも戦ったんだって？ 大変だね。でもお互いヒーロー目指してここで頑張ろうな！」

爽やかに手を差しだしてくるイケメン。こんなに友好的に話しかけられたら誰だって好印象になってしまう。ざまあなんて言っでごめんなさい、オレはなんて醜い人間なんだ。あなたこそ真のイケメンだ。

握手、振動、轟沈。WHY？

「ごめんね？ こころからは不意打ちだまし討ち、複数での奇襲、なんでもありだから」なるほどなー。勉強になりますわあ。

がくりと崩れ落ちる体。これは多分オレのボディでもどうしようもないですね。

「俺は真堂 揺、個性は『揺らす』。体に触ればこの通り、脳を直接揺らせるのさ。明日からよろしくな！」

はい、よろしくお願ひします。個性戦の妙と初見殺しの貴重な体験を貰って、職場体験の初日は終わった。

社会には敵ばかりじゃないんだぞ

本格的に始まった職場体験。今日はボスについてパトロールだ。太陽に照らされるボスのスーツは今日も厳めしい。

「ヒーローとはシステムだ」

街中を歩いていくボス。大通りには人が溢れているがそれらをまるでないかのように進んでいく。アレ、実は高等技術なんだよね。ボスに付いていこうとするオレ達新人の殆どは人の波に止められてしまう。

「そしてシステムには敵が^{バグ}いる」

「外に出れば何が見える。ビジネスマン、教師、主婦、大工、学生。それらは全て我々が救おうとしている人々だ」

そんなオレ達を把握しているのかいないのか、ボスのありがたい講義が進められていく。

「彼らはシステムの一部で、だが時に我々に牙を剥く。それがシステムの構造だからだ」
大股で進むボス。しかし周囲を警戒し、パトロールを微塵も怠っていないのが分かる。俺もボスに倣いつつ必死で付いていく。

「いいか、殆どの者は未だ真実を直視する覚悟が出来ていない」

大通りを抜け、噴水のある広場に入る。といつても道が交差する場所で、人の数は増える一方だ。

「即ち、この平和は薄氷の上に成り立つ仮初の世界だということだ」

噴水の前でボスが立ち止まり、遅れていた新人たちを待つ。

「それでも我々が守るのはシステムではなく、人間だということを忘れるな」

皆が追いつき、一息入れる。すると人波の中でも一際目を引くドレスの女性が目に入った。この雑踏の中でも一際輝いている美しい女性。そしてそのバストは実際豊満であった。サングラスで視線を隠しつつ、目を奪われる。

「どうした。ドレスの女でもいたか？」

いつの間にか振り返っていたボス。コワイ！

「見ろ」

促す様に言った言葉につられて振り返る。するとそこに女はおらず、いるのは銃を構えたいかついスーツの男。素早く回避行動に移るが、後ろにいた男だけではない。周囲のスーツ姿の人間全てが銃を向けていた。頭の中で最善を探すが、これはもう間に合わないか……

「もういい。帰っていいぞ」

『イエス、ボス』

撃たれるのを覚悟した瞬間、周りの人間が一斉に解散していった。その内の一人が近寄ってくる。

「はい、コレ！」

マワリ先輩だった。そして渡された紙には『ドッキリ！ ヴイランだらけのパトロール!!』と書かれている。あとスーツ姿もいいですね。

「皆えっちなんだから、もう！」

先輩の言葉に慌てる新人達。例外はいなかった。悲しいことである。真堂先輩は必死に弁明しているが、アレは仕方がないと思う。

マワリ先輩が帰って、少しづつ人が戻ってきた所でボスが話し始めた。これだけをするために広場貸し切ったのか……

「ヴィランだったら死んでたな」

「ヴィランだったら？」

「そうだ。今回は訓練の内だがな」

ボスの言葉で考えるオレ達。しかしですね、アレはちょっと卑怯なんじゃないかと。

男ならだれだって……

「彼らもシステムの範疇。つまり民間人も警戒の対象ということですか？」

「それもあるが、本質は違う」

真堂先輩に答えたボスが噴水の縁に腰を下ろす。水面で跳ねた水が当たってボスも気持ちよさそうである。

「……ヴィランとて人間だ。言いたいことが分かるか？」

「……誰もがヴィランになりえるか？」

「ヴィランとヒーローは表裏一体。そして民間人も誰もがヒーローたりえ、そしてヴィランになり得る」

そういうことでしたか。やっべ、口に出さんでよかった。寡黙キャラの強み。

「それはつまり、真に安全な場などこの世界にはないということだ」

ボスが大きいため息を吐く。昔の動乱期から最前線で戦い続けた人の言葉は重く、オレ達は何も言葉を返せなかった。

「それでも誰かが戦わねばならない。そうしなければ、この脆いシステムすら崩れるからだ」

ボスの眼は何かを思い出すようで、誇りと力に満ち溢れ、そして寂しそうであった。

「今まで多くの者が命を落とした。そうして人々の命を守り、今の社会を作った。お前

「たちもその道を歩むことになる」

「我々も人々の平和を守る盾になるのですね」

「そうではない」

感銘を受け、溢れ出た一人の言葉を否定したボスは立ち上がってオレ達を見渡す。

「盾になるまでもなく、手に持つ銃を撃たせずに下ろさせるヒーロー。お前ら一人一人を平和の象徴にするのがオレのやるべきことだ」

ボ、ボス……!!!

「うう、これが本物のヒーロー!」

「ボス、オレー生ついていきます!」

「俺ってやつは、こんな人の下につけるなんて!」

「帰ったらギャングオルカのフィギュア買おう」

フィギュアは6分の1スケールのがある。事務所で直接買おうと3割引きだ、限定力ラーもある。オレも買おう。

「じゃ、これから戻って訓練だ」

『サー・イエツサー!』

「今日は吐くまでやれるな?」

『サー・イエツサー!!』

「明日からも吐くまでやれるな？」

『サー・イエツサー!!!』

「よおし！ ぶっ倒れるまで指導してやるぞ!!」

感極まったオレ達は叫ぶ。ボスの前で列兵して叫ぶ！

『社長殿！社長！サカマタ！サカマタ殿！ギャングオルカ殿！』

『社長殿！社長！サカマタ！サカマタ殿！ギャングオルカ殿！』

「流石社長、子供の相手はお手の物ですね。汚い」

「男がチョロすぎるのが悪いんじゃないかな」

こっさり見ていたマワリ先輩方に気付きつつも、涙とこの胸の高まりが止められない。

この日、オレ達は皆吐いた。

|| || || ||

今日は戦闘訓練。それも銃に特化した訓練だ。そして皆でドンパチ中。

「貴様！ そんな腕で良くヴィランと戦えると思ったな！」

「で、でも銃なんて個性あれば使わないし……」

「銃を使えん奴が銃に対抗できるのか!? 指導ー!!」

ボスの指導で何人かは宙を舞っているが問題ない。しかし銃まで使わせてもらえるとは、流石は大手事務所。今なら有名で人気の意味が分かる。

どのような個性であれ、銃に対抗するには銃に精通しなければならぬ。学生時代から銃を使つての対処法を練れるのは強みになる。この経験を通して皆大きく成長するだろう。オレも部隊行動は初めて習うので勉強になる。しかしなあ……

「お前はそれなりに動けるから、ここからは別枠な。じゃ、続きやるか」

「はい」

俺だけ別の訓練ルームである。ルームというか事務所の隣の建物を使って戦闘訓練している。どんだけ金持つてるんだ、やっぱすげーよランカーヒーローは。

「はい、じゃあ状況開始」

無線でスタートの言葉を告げられるとオレは屋内を駆けだす。状況は1対多。敵は無個性だが銃を持ったテロリスト、という名の先輩方。オレはコスチュームの装備と個性で対応だ。

「うおー！速ッ?!」

角を曲がって出会い頭に会った先輩を格闘で静かに仕留める。ツーマンセルで動い

ていたのでもう一人の方も迅速に制圧した。こういう屋内では長物の利点はある程度殺されるし、格闘が得意なオレの力も活きる。しかし……

「いたぞ、D4地点」

「了解、射殺します」

ほれ来た狙撃。SWATっぽい恰好をした先輩が次々と撃ち込んでくる。ていうかホントに個性使っていないんですか？ 狙いが精確すぎるんですがねえ。

いや、ホント先輩方が個性と関係なく強すぎてヤバイ。この練度と連携、これがスパルタ特訓の成果か。なんだこの事務所。

「そこだ、追い詰めろ」

「チャーリー分隊、右から回れ」

淡々と追い詰められていく恐怖。こんな形でマトリックスの侵入者側の気持ちを味わいたくなかった。

仕方なく窓から飛び、コの字になっている建物の向かいに飛び移る。でも嫌な予感しかない。立て、立つのよスミス。立ちなさい。

周囲を警戒しつつ進むとガンケースもといアイテムボックスが見えた。アレはお遊び要素みたいなもんで、オレと敵の両方が使えるものだ。急いで中を確かめると軽機関銃が二丁。ウキウキで持つと、オレのプラグが人の足音を捕捉する。

銃を抱えて窓からこつそり出ようとカーテンを開けると、そこには補強された壁。
「Oh, No……」

嵌められたことに気付き「Oh, No」と連呼しながら急いで銃の準備をする。足音が直ぐ近くまで近づき、そしてドアが勢いよく開けられた。

「A A A A a a a a a!!!」

両手でマシンガンを連射する。飛んでくる弾も避ける避ける。が、抵抗むなく蜂の巣にされた。容赦ねえ。

「いやあ、良い訓練になるわあ」

「優秀な学生っていいですね」

「最高の練習台だ」

休憩、反省、痛みで涙目。

多対1で速攻、奇襲をかけて潰された。卑怯などとはいうまい。これこそが自分が求めたことなのだから。

「高すぎる対応力。それを超えられた経験がないんだろう？ 超えさせてやるよ。プルスウルトラってなあ」

とは先輩方の言。おかげで自分の課題が出るやら出るやら。

格闘と射撃がチグハグだったことの他にも、遠距離攻撃への対応もその場のぎでしかない。個性に甘えてきたツケが回ってきた。

分かってる。心の何処かで思ってたんだ。いつか銃弾を止められるって。だから格闘だけ頑張ればいいんだって。でも止められなかった。頑張ったけどオレに出来たのはエージェント回避だけだったんだ。

いやまあぶつちやけ分かったのねん。アレはオレの頭の中の出来事で、あの世界は妄想って分かってたのねん。でもホラ、憧れちやったものは仕方ない。でもでもヴィランは待つてくれないし、どうしたもんかなあ。

いい加減現実に向き合わなければならぬ。自己のアップデートを図らなければこの環境には適応できないのだ。

ウンウンと唸っていると後ろから肩を叩かれた。ハイ！ サボっていません！ ハンズアップ!!

「お久しぶりです、三済様」

あれまあ、あなたはソムリエ先輩ではないですか。相変わらずイケメンですね。

「なぜソムリエ?」

「この銃、私が持つてきましたから」

「世話になつてゐる」

「お気になさらず。銃の調子はいかかですか？」

「最高だな。だが問題があるのは顧客の方でね」

「そんなことございません。子供にしてはマナーがいい」

いつもの会話をすると隣に座るソムリエ先輩。相変わらず会話が釣られてしまう。

もうコレ諦めよ。

「それよりどうですか？ 素晴らしい事務所でしょう？」

「ああ、本当に」

「随分絞られてゐるようで。推薦した私の鼻も高いですよ」

「……本当か？」

「ええ、ここが一番あなたに必要なものがあると思ひましたから」

マジカー。ただでさえ上がらない頭が更に上がらなくなった。はい、ペコリ。

「それで、どうですか？」

「……あまり良くはないな」

「でしようね。それが分かつてなによりです」

カラカラと笑う先輩。どうも今の自分の問題含めてお見通しみたいだ。

「ふむ。ヒーロー活動はともかく、戦闘だけならお力になれるかもしれません。どうで

す、私の指導を受けてみませんか？」

先輩の指導？　どんなものでしょうか。

「指導とは？」

「こう見えても近接戦には自信があります。特に銃を使った近代特殊格闘術はマスタークラスです」

はえー、すごい。それオレにも出来る？

「現存する武術を基にしていますので、三済様なら習得もしやすいかと」

「ではまず見せてくれたまえ」

「勿論。早速始めましょう、サカマタ様の許可は既にとつてありますので」

両袖から拳銃を二丁取り出した。セレクトターが付いていることはフルオートも出来るのだろう。銃床はスパイク付きのもの。どうみても一品モノです。やる気満々じゃあないですか。ていうか掌の上つてやつですかコレ？

「ではとりあえず、吐くまでやりましょうか」

「イエッサ」

30分後、オレはスミスにボロボロにされたモーフィアス並みにボロボロにされた。

あ、ここで言うスミスはオレじゃなくって映像の方のね。そもそもオレスミスじゃないし。いや確かにスミスだけどそれはあだ名でオレはスミスと言う名のヒーローで決してスミスなわけではない。疲労でこれもう何言ってるのかわかんねえな。

「まだまだ、終わりではありませんよ」

ニコニコしながら倒れ伏すオレに容赦なく撃ち付けてくるソムリエ先輩。この人の訓練に休憩という言葉はない。ゴロゴロと回避する。しきれてないけど。

「この戦闘術は第三次大戦以降の膨大な戦闘データを基にエクリブリウムというヒーローが作り上げたものです。習得の困難さ故に知名度はありませんが、会得した際の戦闘力向上率はまさしく飛躍的なものですよ」

先輩の攻撃が次々とヒットする。分かっているのに躲せない。外れると分かっているのに撃つことを強制される。まるで詰将棋のように状況が悪くなっていく。

「基礎を覚えるだけで攻撃が120%、防御面は63%向上します」

格闘術ですら完全に上回られている。こっちの攻撃はする前に回避され、あちらの攻撃は避ける前に当たることが確定している。なんだこのクソゲー。

「実は私は彼の直弟子の一人です。警察や軍の方々に教導することも踏まえて国にスカウトされたのですよ」

不利になるはずの接近戦なのに、まるでそうあるのが当たり前かのように銃と一体に

なって動く先輩に歯が立たない。銃と格闘。身体能力だけなら明らかに俺の方が上の筈なのに、この二つの扱いの差でこうも違いが出るのか。

決定的な一撃を入れられ、先輩のカッコいいポーズと共に力尽きた。

「しかし何故だか受けが悪いんですね。三済様にご助言などがあれば是非承りたいとも思っているですよ」

多分、問題は指導方法なんじゃあないですかねえ。そんな言葉を言う気力もねえけど。

「さて、銃と近接戦を一体化した戦闘術。お楽しみ頂けましたか？ まあ正直に申し上げますと、三済様の様に銃以上の力と個性を持つ方が完全に習得するのは不合理なのですが、基礎位までなら覚えても損はないかと」

コンクリート砕くパンチも正確無比な射撃も当たらなきや意味が無い！これは渡りに船である。頭を擦り付けてでもお願いしたい。もう地面についてるけど。

「……素晴らしい技だ。是非ともお願いしたい」

「そうですね。それでは研修期間中に基礎の基礎までは叩きこんでおきたいところですね。これから研修が終わる頃に顔を出すので、時間をとっておいて下さい」

「……いいの？」

「勿論ですとも。久々にモノに出来そうな人がいて、私少々興奮しております」

「……それはよかった」

もう吐いてもいいですかね。……そうですか、まだですか。

先輩から教官にクラスアップした先輩に襟を掴まれて引き摺られていく。その様はまるで地獄からやつてきたルシファーが、連れていこうとしている悪魔祓いを地獄の門へと自ら引き摺っているかのようだった。

「マスター！ 来てたんなら言つて下さいよ、もう！」

目を向ける気力もないが、この愛らしい声は多分マワリ先輩だな。知り合いだったの
で？

「いつも銃の訓練の時には来てるでしょうに」

「それでも言つてください。お手伝いしたいんです」

「ふむ。では明日から研修後に来ますので、場所だけ抑えてもらつていいですか？」

「はい！ ていうか明日から毎日？ 本当ですか!？」

「本当です。見て欲しいならついでに貴方も見てあげますよ。しばらく手合わせしてなかつたですからね」

「やった！ よろしくお願いしまーす！」

頭の上で飛び交う会話。後から聞いた話だと、マワリ先輩は昔教官に弟子入りしたらしい。何でもその頃はクソナードのドンケツだったが、教官の指導に死にもの狂いでつ

いていった結果、超倍率のギャングオルカ事務所に受かったとのこと。

俺の滅多に動くことない巧みなお口により聞き出した情報によると、実はボスの事務所が訓練する際に教官が自ら来るのはマワリ先輩の様子を見に来る目的もあるらしい。

「手のかかる子でしたし、気になってしまつて。指導後も会つた時に嫌な顔をされない数少ない子でもありますしね。まあもう少し師匠離れしてほしくもあります」

そういう先輩の顔は初めて見るモノで、見てる方が恥ずかしくなるような顔だった。ええ話や。そしてこれ勝ち目ねえな。スマスはこの日、泣きながら吐きました。

最初の印象が悪い人ほど仲良くなれるんだぞ

今日は座学後の実地訓練だ。それぞれのグループに分けられてサイドキックの先輩に引率されていく。今日は真堂先輩と一緒のグループ。職場体験といっても様々な学年や、中には大学生組もいる。高一はオレだけで、一番年下の下っ端だ。ここは目をつけられないように大人しくしておこう。

「君はまるで引率の先生っぽいな、三済君！」

やめて下さい真堂先輩。

4人程のグループでカフェに座る。今日は皆私服だ。俺だけスーツだが。目立たなければなんでもいいらしい。

ちなみに泊りがけなので座学は夜行われている。こないだ寝落ちしかけている人がいたが……

「コレ持ってる」

って言われてピン抜いた手榴弾持たされてた。持たされた奴は眠気も吹き飛んで顔

面蒼白で必死に抑えてたけど、アレまさか本物じゃないよね？

引率の先輩が席について注文する。ランチと選べるデザートだ。デザートはティラミスでお願いします。

「よし、まずやることは？」

「店では常に入りの見える席に座り、逃走経路と避難経路を頭に入れる」

「いいぞ、非常口も忘れるな」

やっていることはパトロールや警護、日常における心構えや行動の訓練だ。座学で学んだことを実践できるかというもの。こういったものは学校で得ることは難しいので、実にタメになる。

「よし、じゃあ次。テラスの男、お前やってみろ」

「えーと……アイルランド系、30代、結婚してる。指輪を触ってるし、多分家族で旅行中。座り方を見るに、仕事はデスクワークじゃない」

「40点。アレは一人旅行だ、待ち合わせ中。現地に知り合いがいるんだろう。香水をつけてなかったし不倫ではない。次、お前はカウンターの女性二人組やってみろ」

やっていることは観察の訓練である。洞察力を高め、体に刷り込ませて事件が起きる前に兆候を察知するヒューミント訓練と呼ばれるものの一種だ。正規のサイドキック

の方々はもう慣れたもんで、無意識にやっているらしい。そしてこれはスパルタ訓練により疲弊した肉体の回復時間も兼ねている。ランチとケーキを食べながらではあるが、決してお遊びではないのだ。

「真堂、お前は及第点だ。一年間頑張ったもんな、よくやったな」

「ありがとうございます！」

嬉しそうに机の下で小さく拳を握る真堂先輩。今の所唯一合格を貰っている。ていうか前から思ってたけど、先輩って前からこの事務所と繋がりがああるんですかね？

「スミス、やってみるか？ 表の車のナンバーは？」

「北側から……」

とりあえず6台分述べた。合っていたらしく、先輩は面白そうな顔をする。

「ウエイトレスの利き腕」

「左」

「カウンターの男の体重」

「98」

「車の中に護身用の武器があった。どの車だ」

「トラック。運転席のケースの中」

先輩からパチパチと小さく拍手をもらった。コードを読み解く様に見ればそう難し

くはない。そう感じるのも日々の勉強の積み重ねなんだろう。こうして褒められると頑張った甲斐があるなあ。

「じゃあ最後だ、一番奥の男二人組」

妙に真面目な顔をしている。ゆっくりと後ろを振り返って観察する。するとそこには真っ白に染まったスーツとドレッドヘア、いかにもなサングラスを決めた男二人がモンブランを頬張っていた。

「20、もしくは30代の双子。異形系ではないが、それに近い個性持ち。懐に武器。それと腰、靴、少なく見積もっても6カ所以上に。技を持っている。軍歴か、それに近い経歴。それも普通じゃない代物」

「なぜそう思う?」

「腕時計を反転して着けている。反射を恐れてる。普通の人間は狙撃を警戒しない」

「……合格だ」

やったぜ。でもあの人らナニモンよ。自分で言ってる怖くなってきたんですけど。

「ちよ、ヤバイ奴なんですか?」

「警察に連絡した方がいいのでは?」

「静かにしろ。まだ何もやってないだろ」

先輩がオレ達を落ち着かせる。しかし雰囲気からしてどうも知った人みたいだ。

「一応民間警備会社所属ってことになってる。オレ達の中では有名人だよ。悪名でな。お前らもヒーローやってりゃその内知ることになる」

モンブランを食べ終わり会計を済まして出ていこうとするが、出口付近にいたオレ達の前で立ち止まった。

「どうも、今日は研修で？」

「ええ、ウチの可愛い子ちゃん達ですよ。……言つて吐き気がしてきた」

「成程、その内一緒に仕事するかもしれないな。よろしく、ヒーローの卵さん」

「ヨロシクはご勘弁。それにコイツラまだ卵ですらない。いいとこダボハゼの糞ですよ」

「その割にはクールだ。その彼なんて新人とは思えない」

「コレは例外。老け顔なんでね」

「ああ、確かに。では近い内にまた……」

店から出ていく二人組。しかし半端じゃない使い手だなアレ。雰囲気もUSJにいたヴィランとは比べ物にならない。さつきは言わなかったけど、多分人も殺し慣れている。……それも日常に染みつく様いだ。

「……チツ、こっちは会いたくねえつての」

背もたれにもたれかかる引率の先輩。コツンと頭を叩かれた。え、何ですか真堂先輩

？

「お前怖くねえの？ アレ見て」

いや怖いですよ。今も震えて声も出せねえ、ハッハッハ。

「やっぱ雄英つてすげえな。……クソツ、仮免試験が控えてるつてのに俺つてやつは」

何か爽やかじゃないですね。初めてみる顔です。ほら、笑って下さい。ティラミスが来ましたよ。

「ティラミス美味しそうだな。やっぱ俺のチーズケーキと交換してくれ」

……縦社会は辛いぜ。

|| || ||

今日も今日とていつもの訓練。ソムリエ先輩との特訓も並行し、研修も終わりに近づきつつある。そんな中で与えられた休憩時間にぶつ倒れていると隣に真堂先輩がやってきた。

「やあ三済君、今日もやってるね」

そういう先輩もフラついている。偶々休憩時間が被ったようだ。

「ちよつとき、聞かせてくんない？ 雄英の事とかさ」

そう言いながら飲み物を差しだしてくる。地味に退路を断られた気がするのは気のせいか。

「ああ、どんな訓練してるのかとかでいいからさ。今年からオールマイトもいるんだろ？」

促されつつとりあえず思いついたことを喋る。真堂先輩はコミュ力が高く、まるで誘導されるかのようにこちらの話を引き出してくれる。話していて実に楽しい。もう何でも話しちやうね。

「ああ、ありがとう。ところで君ってクラスでどの位の強さなのかな？ やっぱり上位？ 他にもっと強い人がいたら詳しく教えて欲しいな」

そう言われてもなあ。雄英祭では1回戦で落ちたけど、尾白くんや砂藤くんとはいい勝負してるし。よくわかんねえや、多分それなりなんじゃね？

「そこそこかと」

「そこそこか。マジかあ……」

ため息をついて落ち込む先輩。……やべえ、空気が重い。どないしょコレ。

「エリートさんから見てオレ達はどうよ？ やっぱりそこそ以下の中か？」

「いえ……」

口調が変わる真堂先輩。雰囲気は何処かコスイ感じになっっている。

「わっかんねえだろうなあ。ここに来るのってちよつとかなり大変なんだぜ？」

「……」

「事務所のイベントに顔出して覚えてもらって、マワリ先輩とコネ作って頼み込んで、1年から私的に訓練に参加して、そうやってようやく職場体験までこぎつけるんだ。いきなり指名貰えるエリートから見たらバカみたいなあがきなんだろうなあ……」

「そんなことは……」

「すげえよなあ。戦闘訓練も、観察訓練も。一年なのに大したもんだよ。ホント……」

その言葉に何も返せなかった。雄英の利点といえばそれまでだが、それはオレが言うべきことじゃない気がする。

他の学校の事情を聞いても何も言えない。この事務所の熱意を見てしまったから。先輩がどうしてもここに来たかったのも、それだけ本気だったという証拠だと思う。

二人座って黙々と飲み物を飲む。……ドクターペッパーかあ。

「ヨーくん！ 何してんの、男同士の友情ってやつ？ ズルい、私も入れて」

急に後ろから手が伸びて真堂先輩の頭にヘッドロックがかかる。実に美しい形だ、そして先輩も美しい。

真堂先輩はバタバタと足掻くがあれだけ綺麗に決まると多分抜け出せないだろう。しばらくして満足したのか解放されると俺の方を指差す

「先輩。三済は大丈夫なんですか？ 顔が怖いって泣いてたのに」

「な、泣いてないし！ もう、嫌だなあヨーくんは！ み、三済くん、よろしくね、元気？」

「嘸んでますよ」

「あ、あはははは！ もう！ これで和んでくれたかな？」

「……これからはスミスで構いません。一応ヒーローネームなので。一応」

「じゃあスミスくん。いい名前だね、こう……スミスっぽくて！」

「どうもありがとうございます」

「マワリ先輩、声が裏返ってます」

スミスって名前も気に入ります。貴女の言葉で言われるのなら。……などと我ながらアホなことを思ってたら休憩がそろそろ終わりそうだ。

「研修も終わりだねー。多分もうすぐだから、二人とも頑張ってる」

「はい」

「ヨーくんも、一緒に現場出れるの楽しみにしてるよ」

「頑張ります。あとそれ言ったらダメな奴です」

「あー！ も、もう！ 聞かなかったことにしてね」

せわしく去って行くマワリ先輩。はて、なんのことでしょう？

「マワリ先輩、いいよなあー」

そう呟く真堂先輩。言葉にする気はなかったらしく、ハツと我に返って俺の方に向き直った。

「お前絶対言うなよ。さっきのも、ここじや隠してるんだ」

「何を？」

隠すべきことが分からず思わず真顔で返す。いや、普段から真顔だけどさ。

「……ハハハッ！ お前結構面白い奴だな！ 今度一緒に釣りでも行こうか？」

よくわからんけどツボったらしい。オレのコミュカも捨てたもんじゃないね。

「ちよつと大分思うことはあるけど、やれるさ。今までとやることは変わらないんだから。ていうかこの日程、悩んでる余裕なんかないってマジで」

いつもの顔に戻り、立ち上がって再び訓練に戻っていく真堂先輩。オレもドクペを一気に飲み干した。

ここに来て一番思ったことは、自分以外にも皆必死だということだ。雄英でもそれは感じたけれど、ここはそれとはまた違った空気だ。

ここに来て、実は何度も心が折れそうだった。自分は本当は強くなると分かっ

たし、ネオになれないのなら頑張る意味はあるのかも思った。そしてそんな夢の価値をこの皆と比べてしまっていた。

でも、ここで何度も吐きながら、それでも誰一人諦めない皆の姿を見て思うんだ。

きつと夢を目指すのに貴賤はない。自分が矮小な存在だと思わされることがあっても、それでも頑張る価値があるのだと自分を信じるのだ。一心不乱に、ベストを尽くし続けて。結果ではなく、その過程にこそ夢に近づく何かがあるんじゃないかって。

誰かは忘れたが、こんな言葉を覚えてる。『自分を信じて「夢」を追い続けていれば、夢はいつか必ず叶う』と。それがどんな形かは分からないけれど、自分が夢を目指すのを止める理由にはならない。

つまり、今までヒーローを頑張りがらネオを目指す。いいね？

「ま、そういう訳で情報アリガトな。今後は俺みたいなのには警戒しとけよ？ 今年受けるかは知らないけど、お前らみたいなクソガキは最初に狙われる」

「どういたしまして」

「ハハ、ちよつと強気だな。あと近くに研修の終了テストあるから早めに寝とけ。ここだけの話、受かったら本格的な現場に出られる。頑張ろうぜ」

さっきの話は研修の終了テストのことだったのか。先輩は去年からここで訓練してたから知ってたんだろう。それと雄英の情報が一体何の役に立つのかはさっぱり分か

らんけど、お礼というには良いものすぎる。ありがてえありがてえ。

気を取り直してオレも訓練に戻り、一日を終えた。この日は久々に吐かずに寝られた。

|| || ||

研修も残りわずかを残し、ますます熱が入る中、なぜか研修生が全員集められた。整然と並んでボスを待つ。無駄な私語は一切ない。もうこの風景も見飽きたな。

「よく聞け！ トイレの紙を消費するしか能のない猿の糞共！ これまでよく頑張った、本当によく耐えてついてきてくれた。お前たちみたいな強い心と高い志を持った子を指導出来てオレは……がっかりだ！ お前らの金魚の糞みたいな出来栄えにはな！」

『サー・イエツサー!!』

「これから貴様らの最終試験を行う。この出来次第で、貴様らがクソから下等生物になれるかどうかが決まる。心して臨むことだ！」

『サー・イエツサー!!』

「もし落第でもしようなものなら、そんな奴は赤ちゃんの糞からやり直してもらおう。つまり、此処から追放だ！ そのつもりで行え!!」

『サー・イエツサー!!!』

「それでは全員、会場まで駆け足！ 進め!!」

真堂先輩とマワリ先輩が言っていた通りであった。個性ごとに試験が違うのか、会場は幾つかに別れている。他の人達と一緒に俺も指定された会場へ向かって行った。

「今まで落第なんて出したことないじゃん」

「足りないところの補講と簡易化した実習させるだけなのにね」

去り際に何か聞こえた気がしたが、追放されるかもしれない緊張でそんなことを気にする余裕はなかった。

会場に入ると、そこは広い射撃場。銃を持っている生徒や射撃型の生徒が集まっていた。

説明が始まると、どうやらポイント制で全員一斉に射撃テストをやるらしい。またテストではインターンの先輩方も参加することのこと。

細かいところは一切説明しないことに皆戸惑う。ポイント制といっても合格点や落

第点があるのか、人数制の早抜けなのか、そもそもポイントの採点基準すら明かされていない。恐らく状況判断も採点基準になってきているのだろう。

「それでは試験を開始する、構え！」

皆一斉に銃を構える。そしてブザーの合図とともに周囲のシャッターが開く。

そこには様々な怪物と逃げ回る民間人……のターゲットボード。それらを見た瞬間、一斉に射撃が開始される。

状況は暴れまわる怪物に崩れていく建物。泣きわめく人々。ターゲットはそこら中にある。優先すべきは最も危険な状況にある民間人、それらを助ける様な射撃。

ゾンビの様な化け物に捕まっている赤ちゃんもいるが、そちらは既に先輩が撃っている。ならば最も注目されるのはやや遠くにいる、本を抱えて歩いている少女。彼女が巨大な怪物のヴィランに潰されかかっている状況だろう。それに意識を集中し、怪物に銃を向ける。

……本当か？

違和感を覚え、寸前で射撃を止める。集中した意識の中でゆっくりと飛び交う銃弾。周囲を見渡し、違和感の正体を捉える。正体は分かった、しかし、いや、まさか……

どうする？ 確信はないし、これが間違ってたらオレは絶対落第だ。追放されたくない。真堂先輩やマワリ先輩、他の皆たちに置いて行かれたくない。ここの人たちに向

けられた期待を裏切りたくない。向けた銃が震え出す。

だが、オレが思うベストの形は恐らくこれなんだ。気付かなかった振りをして他の皆がやつてるように化物共を狙う選択肢もある。でも……

オレは大きく深呼吸をした。空気を全部吐き出したところで息を止める。手の震えが止まり、銃の焦点が合う。そこで引き金を引いて、的を射抜いた。目的としていた場所へ、寸分の狂いもなく。

オレが撃った瞬間、ブザーが鳴った。周りの人間も気付いて射撃をやめる。しばらくするとドアが大きな音をたてて開けられ、ボスが現れた。

「貴様、なぜこのか弱い美少女であるミニコちゃん8歳を撃った!? 応えろ!」

オレが撃ったのは怪物に潰されそうになっていた女の子である。その眉間にはデザートイーグル特有の大きな穴が開いていた。

「一番不自然だったからです、ボス」

「なんだと!?!」

「他の民間人は皆泣きわめいているのに、あの子は親も連れずに一人で歩いている。しかも素晴らしい笑顔で」

「ほう、そんな理由で撃つたと言うか」

「それに汚れ一つないオルセンの服。アクセサリーはハリーウィンストン。巨大生物はよくみたら泣いて逃げているようにも見える。そういう個性なのかもしれない」

「ではあつちのデッドライジングに出てきそうな見た目の奴は？ なぜ無視した!? 赤ん坊が襲われているんだぞ!」

「デッドライジングに出てきそうな見た目の奴は抱えている赤ん坊が自ら抱き着いている。つまり親しいものが連れて逃げている可能性が高い。それに……」

「なんだ」

「8歳児はデカルトの哲学原理を読みません、ボス」

「貴様には特別指導が必要なようだな、付いて来い!」

ボスに連れられて外に出される。後ろでは再びテストが再開された音がした。

……ああ、これは失敗したなあ。けど自分を誤魔化すのは、嫌だったんだ。ベストを尽くしたいと思ったんだよ。

しばらく歩いていると頭にヌメツとしつつもザラつとしたウエットな感触。この冒流的な質感でボスの手だと分かる。指導かと思わず目を見つめると穏やかな声がかけられた。

「合格だ、よくやったな」

顔を上げるとボスが子供が泣き出しそうな笑顔で俺を見ていた。いや、オレが言えた立場じゃないんだけどき。

「それではやはり……」

「目で見えるモノを信じるな！ 最後は自分で選択しろ！ これが研修の最後の教えだ」

「……ありがとうございます」

「だが急所を撃つのは減点だぞ」

「すみませんでした」

「まあいい。あとインターンの連中はブラフだ。迷ったか？」

いい顔になるボス。思わず釣られて不敵な笑みを浮かべてしまう。二人でニヤニヤとしていると、会議室へと連れていかれた。扉を開けるとそこには正規のサイドキック達と幾人かのインターンたち。自分と同じ研修者は1、2人ほどしかいなかった。

入って来た自分に気付くと小さく手を上げる人がいた。真堂先輩だ。どうやら彼も受かったらしい。

「スミス君、受かったんだね。じゃあ一緒に仕事だね。よろしくね！」

声をかけてきたマワリ先輩だが、こちらが返す間もなくボスに指導されていた。ボスがスクリーンの前に立ち、こちらを見渡す。

「ふむ。惜しくもここに来れなかったやつもいるが、切り替えていこう。知らない者もいるので最初から説明する。これから諸君らには事務所に正式に来た依頼をこなしてもらおう。最初に言っておくが、かなり重要な依頼だ」

スクリーンに次々と情報が映し出されていく。情報の読み込みが終わる頃、ボスが皆を引き締めるように声を上げた。

「ミッションの概要を説明する。今度のミッションは、要人の護衛とヴィランの迎撃だ」
スパルタな研修に相応しい、ハードな終わりになりそうだ。

予定通りにいかないのは予定通りだぞ

やってきたるは高級住宅地の中でも一際大きい西洋風な建物『キャツスル・ヴァニア』。まるでレジャー施設と思える程敷地が広い。庭にプールにバー、屋内にまたプールにバー、あとクラブにバーとかもあるんだって。すげえ。以上、スミスより。

オレ達はここでプロの依頼をこなすんだ。自信？ ありますよ。なんとたってオレはあの名状しがたい鬼畜のソムリエ教官の教え子だからね。

研修期間中、先輩から様々な戦闘術を教わってきた。あのスタイリッシュで、流れるようなオサレアクション。それを学んだ結果、どうなったのか？ 結果はキレッキレなエージェントの動きになりました。

……なぜこうなった。いや、理屈は分かる。かなり合理的、理論的に教えられたから理屈は分かる。でもこうなるとは思わなんだ。

「三済様の個性なら、私の動きすら余分です。貴方の身体能力なら最短、最速で敵の予測を上回れる。多少ゴリ押しでも構わないでしょう」

というソムリエ先輩の方針故だ。どうやらオレにあのカッコいいアクションは不要

らしい。相手の動きを予測し、無骨に淡々と敵を制圧しろってさ。

俺仕様に考案してもらった戦術を叩きこんでもらった結果、隙あらば取り入れていたマトリックスコンフォーススタイルも改良されてエージェントスタイル完全体になった。

オレは何度も物申したかった。オレもあのカッコいい動きがやりたかった。ネオに近づきたかった。しかし……

「私はヒーローではないので申し辛いのですが、戦闘に格好良さ等必要ですか？」

必要だよ！……とは言えねえ。俺の為に時間を割いてもらってる分なんも言えねえ。しかもしかも、やる度に強くなっていくのが実感できるので反論の余地はなかった。

こうして俺は特訓を終えた結果、より実践的に、より合理的な動きをするスミスになった。地味だが以前とは比べ物にならないアップデートが実行されたのだ。つまり2作目以降のエージェ……もう考えるのはやめておこう。

なぜこうなる。まるで俺の人生は性質の悪い機械仕けの様だ。誰が言ったのかは知らんが運命とは地獄の機械とはよく言ったものである。いや運命とは選択するものだ。受け入れちやダメ、絶対。

しかしまあ強くなったのは事実だ。今ならアレだ、撃たれてもこめかみ位の距離でもない限り対処出来る。具体的に言うとなンネットと運転手席位の距離なら余裕でイけ

る。

思い出したくないが、先輩とどの距離まで避けられるか試したから間違いない。

サングラスの奥で遠い目をしていると叩かれる。とつとと入れって？ はい、すみません、直ぐ入ります、すみません。

今日はパーティーがあり、招待客はその入り口である大きな門を次々と通っていく。オレ達もその門を……無視して隣の小さな扉に入る。

「凄いな」

「資料通りの個性か」

予め伝えられた要人側のボディガードの個性だ。扉間とかいう『ドアとドアを繋ぐ個性』の持ち主らしい。扉を開くと庭ではなく、大部屋が広がっていた。

マワリ先輩を先頭にオレ達は堂々と進んでいく。あちら側の要請もあり、今日の我々は全員が礼服である。先を歩く先輩たちが睨みを利かすと道中の人間たちは避けていった。これももうどつちがヴィランかわかんねえな。

「お待ちしております。ギヤングオルカ事務所の方々ですね」

「はい」

「確認がとれましたので、どうぞこちらへ」

周りでは私的に雇われたボディガードたちが武器の持ち込みチェックを受けている。勿論オレ達ヒーローはノーチェックよ。公の場で武器と装備を持てるのはヒーローの特権だね。

「行きましよう」

ボニーに誘導され、控室へと進んでいく。視線を感じ振り返るとそこにはあの白いドレッドヘアの双子がいた。ニヤニヤと笑みを浮かべているのを無視し、歩いていく。部屋へと辿り着き、案内人が去って行くのを確認するとマワリ先輩が皆を集めた。

「じゃあ最終確認を行おうか」

『イエス、リーダー』

静かな部屋にオレ達の声が響き渡った。

|| || || ||

今回の依頼はこうである。ある要人がパーティを開くが、ヴィランがその時を狙って襲撃をかけるという噂を聞いたので警護をお願いしたいとのことだ。

コレが文面通りならばボスの事務所が動くまでもない。事務所での紛糾したミーティングを思い出す。

「よく覚えておけ。この手の向こう側から依頼してくるパターンは、大抵は内部抗争の

リークだ」

実はこの要人、真つ黒に近いグレーの人物だ。表側は流通業だが実際は裏組織の流通ルート担当で3次系団体の長。その彼が依頼者であり、情報源だ。

「納得出来ません！ ヒーローが良い様に使われるだけです！」

「無論、見返りがある。最近幅を利かせている増強型ドラッグ。その情報だ」

「それだって、対抗組織を潰さたいだけです」

「この内部抗争は我々に話が来た時点で筋書きが決まっている。要人側の組員が反乱組織を片付け、その食べ残しを我々に引き渡す。これで両方Win Winだな」

「ボス！ まさかそんな馬鹿なこと！」

「するわけないだろう。この話をネタに反乱グループの幹部の一人を寝返らせる。違法取引の資料を引き換えに保護するのを条件にしてな」

「な、なるほど」

「わかったか？ ニュービー」

ボスの言葉に喰ってかかっていた一人が落ち着く。しかし、何というか、これから自分たちも踏み入ることになる裏社会を垣間見たことで言葉がない。隣の真堂先輩も同じようだ。

「どうせ隠せない規模のクーデターならいつそヒーローに後片付けをオネガイってか。

それに権力の誇示にもなるし一石二鳥だな」

「クソ！ 腹が立つぜ。どこまで舐めてやがる」

「全部まとめて叩き潰せないんですか?!」

「今はそういう時代じゃない。ドンパチに介入したところで、迎られるようなハマをす
る奴じゃない。この手の組織だった連中を叩くには段取りつてもんがある」

「悔しいですね、ボス……」

「ああ、だから昨日反乱グループは殲滅してきた」

……ん？

「へ？」

「ということで実際に動くのは公安と連携するオレ達だ。偽の襲撃と見せかけて出てき
た連中をボコる」

「いや、ボス……昨日オレ達なんも聞いてないんですが」

「動ける奴だけで動いた。スピードが命だからな、こういうのは」

「ええ……」

「ていうかどうせ迎れないって言いましたよね」

「迎れなくても戦力は潰せる。例え遠回りになったとしても、ヒーローたるもの『ゴミは
ゴミ箱に』だ」

……段取りとはなんだったのか。唾然とするオレ達にボスをが喝を入れた。

「チャンスがあれば直ぐに食らいつけ！ 殲滅しろ！ 見敵必殺！ 忘れるな!!」

『サ、サーイエツサー!!』

「ヴィランの連中は、オレ達力がつける度に賢くなり、野心を蓄える。よく覚えておけ、ヴィランってのは何時の時代もヒーローより頭がいい」

『サーイエツサー!!』

「そんなヴィランに対抗するには力を見せつけることだ！ 奴等をタマなしにしてやる位ビビらせてやれ！」

『サーイエツサー!!』

「やっぱ怖いわこの人。前々から思ってたけど絶対抑止力論者だわ。能率的で良いと思います。」

「公安と連携してるとはいえ、交戦しても表には出ないんですね。この手のつて」
「あー、やだやだ。こういう黒いお仕事」

流石はヒーローの先輩だ。オレもあんな会話したい。

「今回の目的は対象の確保。必ずしも戦闘は優先しなくていいんだろ？」

「2重にヴィランを守ってやるハメになるとは」

「3重、4重よりマシだ。前にもあつたらう」

「ああ、アレは酷かつたですね」

フウー！ かつけえ!! クールな会話にキラキラしたオレ達新人組の視線を受け、更にクール度を上げる先輩たち……を見て呆れるマワリ先輩他数人。

「お前らは留守番だ。じゃ、後は任せたぞ」

「イエス、ボス。配置の振り分けをする。各分隊のリーダーは今から指名する。各リーダーは定時報告を忘れないように」

ドンパチが確定した戦場に放り込まれるかと思つたらオレ達に任された仕事は会場の警備。来る筈もない偽の襲撃を守る警備か、まあそんなもんですよね新人は。

「あつても避難誘導だけとはいえ、あつちは大丈夫ですかね?」

「誘き出す訳だからあつちが戦場になることはまずない。お守りもマワリを置いていくし問題ないと思うがな」

「ですね」

出発の前に何か言うことがあるのか、ボスがマワリ先輩を呼びつけていた。

「おい、マワリ。聞いているのか?」

「ヨーくん、私ヒーロー名スピニングガールだから」

「わかりましたマワリ先輩」

「……スピニングガール」

「あ、マワリ先輩。ボスが呼んでますよ」

「ボスウー!! ヨーくんがイジメる! あとスミスくんの顔が怖い!」

「……やっぱお前も残ってくれるか?」

「イエツサ」

|| || || || ||

「もう! ちゃんと聞いている? 万一の時は私の指揮下で動いてもらうからね!」

「わかっていきますよ、マワリ先輩」

「んもおー! 指導だ指導!」

いつも以上に饒舌な真堂先輩。いつも通りに見えて、やっぱり先輩でも緊張してるんだらうか。自分を落ち着かせようとしているのが目に見える。

しかし身内の仲とはいえからかいすぎたのか、拳骨を落とされて頭を抱えている。痛いだらうなあ。あの人アレでソムリエ教官の弟子だし。

オレ達職場体験組はマワリ先輩と一緒にパーティーの控え会場を警護する。本来のメイン会場とは異なり、メイン客以外や少し喧騒から外れたい人用の会場だ。控えとはいつでもケータリングはしつかり用意されているし、楽器の生演奏もされている。

「ボスが此処を指定したのは、ちゃんと意味があるんだよ」

「とうとうと？」

「もつと周りを観察して、誰がいる？」

「……各組織の構成員ですね」

「そう。得ることは沢山あるから、学んでいつてね」

『イエッサ』

見渡せばここには裏組織の構成員やそのボディガードたち。一般客も多く、表向きはクリーンな連中だが、ここは実質裏社会の会合みたいになっている。そうか、ここはそういう場所なのか。

「あつちのはヴィランの資料で見たとあります。豚蔵、元ヴィラン組織の構成員」

「向こうにも蛙走、節腕、他の有名所も何人か。まるでヴィラン予備軍の見本市だ」

中には前科者や腕利きと呼ばれる人間たちもいた。彼等もここでは武器を持たず、パーティーを楽しんでいる。

つまり、そういうことなのだ。今の平和は象徴たるオールマイトのお陰で彼らが動け

ずにいるから。平和の中に潜む彼等は虎視眈々とその隙を窺っている。

今ならボスの言っていることが分かる。この平和は本当に紙一重なのだ。所謂動乱期と呼ばれる暗黒時代から、オールマイト達先人は血を流してここまで持ってきてくれた。ここから先は、オレ達次第なのだと思わされる。

隣を見ると真堂先輩も汗を流していた。気付いてしまえば、この混沌の中の平和に身を委ねることなど出来はしないのだろう。

気持ち落ち着かせたく、ネクタイを緩めた。ふと目を向けるとケータリングのティラミスが目に入る。ここはパティシエを呼んでいるらしく、見るからに美味しそうな出来栄だ。

「駄目。敵地での食事は口に入れない」

伸ばした手をマワリ先輩に叩かれた。思わず悲しげな顔と目をしてしまう。さらば、ティラミス。

偽の襲撃から要人を守る警備。実に新人向きな楽な現場。そんな初仕事をオレ達は汗を滲ませて進めていくのだった。

|| || || || || || || ||

「ブツと金だけ回してりやいいものを。二股かけてカマこく野郎がこういう目になる」

「世の中、分相応つてもんがありんすよ。活かせる機会はないでしょうが」

煌びやかな城。その中でも特に輝かしく飾られた部屋の中で、男たちが立っていた。男たちは二人を除いて、地面を染める赤色の不浄から身を守る様に特徴的なマスクを着けていた。

「これでいいだろう。約束通り会わせてくれ」

布巾で手を拭いて、白手袋を嵌めている男。その男に対峙するのは白く染めた服と髪が特徴的な双子だった。マスクをつけてない二人でもある。

二人は言葉を聞くと顔を見合わせ、肩を竦めた。その様子に苛立ったのは手袋の男の側近だった。

「おい！ 舐めてんのか!! テメエら三下じや話になんねえつつつてんだよ!!」

言葉を荒げる男を涼やかに躲す双子。ニタニタと笑みを崩さない姿に前に出ようとするが、手袋の男に遮られた。

「やめろ。敬意を払え。彼らが出てきている事が、俺等が軽んじられていない証拠だ」

「……失礼しました」

「すまない。話の続きだ。貴方方のボスを裏切っていたゴミは処理した。約束通り彼に

会わせてくれ」

言葉は丁寧だが、先程の男とは比べ物にならない圧力がその場に漂う。白服の男たちはそれを鼻で笑うと懐からタブレットを取り出して机に立てる。

白服が控える様に立つと、画面が照らされる。明らかに高級そうなスーツと独特なネクタイの結び方をした男が映され、気怠げに話しかけてきた。

「どうも。初めまして。調子はどうか？ パーティは楽しんでるか？」

その男を見た瞬間、マスクの男たちに緊張が走った。一歩前に出ていた手袋の男が頭を下げる。

「お会いできて光栄です。パーティに誘って頂いたことには感謝しております。これから楽しい思いをするつもりですよ」

「ホストとして聞いただけだ。興味はない」

画面の男は傍目からでも分かるように蔑みながら片手でオリーブをつまんでいた。その態度に後ろに控えていた連中が殺気立つも、再び頭を下げた指導者の姿に何も言えなくなった。

「お忙しいところ、誠に申し訳御座いません」

「そうだとも。美しい妻を待たせていてね。女性を待たせられるのは力を持った男の特権ではあるが、それが夫婦となると厄介事の種に変わる。取引というのはその点分かり

やすくもいい。オブジェクトの様にシンプルな関係だ。早く終わらせてくれ」

「有難う御座います。手短に終わらせますので……」

深々と頭を下げるリーダーに続いて首を垂れるマスク達。明らかに納得がいつていない様子に双子の男たちの笑みは更に深まるようだった。

手袋の男は顔を上げると目線を所々に散らばる血溜まりに配らせながら言った。

「貴方の信頼を裏切っていた彼のルートと施設を使わせてほしいのです」

「品物は？」

「クスリです。増強剤と消失剤」

その言葉に、ピクリと画面の男は反応した。

「消失剤、消失剤か」

「我々が実現しました。効果は……」

「何分だ？ それとも何時間？」

「……1日程です」

「それなりなようだ。似たようなのは昔から出ているが、効果の効き目とコストの問題で出回る程じゃない」

「コレをご覧ください」

部下が持つてきていたPCを開き、画面を見せていく。それに幾度か眉をしかめ、時

に領きながらフランス語の様な独り言が流れていく。

「……いいだろう。彼のクスリのルートと施設を使うといい。中々プレゼンが上手いじゃないか、職を変えた方がいいぞ。若い野心家は起業するものだ」

「裏社会の情報を司る貴方に言われるなんて、恐縮ですよ」

画面越しの言葉に明らかに緩むマスクの集団たち。彼等としても、納得が行く結果が手に入ったのだろう。

マスクを着ける中でもクロノスタシスと呼ばれる男、玄野は心の中で特に安堵の息を吐いていた。キレ易い同僚を抑える役目も面倒だが、決して態度には出さなくてもこの中で誰が一番面倒な性格をしているか、彼は理解していた。

目的は達成できた。モノは持っていても、それを乗せる流通ルートを持たない弱小の自分たちが、最大手の組織のソレを使わせてもらえるのだ。それも目の前で進む交渉も上手くいっているようで、シノギの分配も悪い条件ではない。

闇のルートというものは非常に複雑で、クスリの製造などは時にリスクに見合わない結果になることもある。そんな中、歴史だけはあつても実質新参の弱小組織が得られる待遇としては破格のものだった。

目の前のモニターの傍に控える男たちを見る。ニヤついた同じ顔の二人は、その顔に

反して油断なくこちらを警戒している。自分も幾らか命のやりとりはしてきたつもりだが、彼らはそういった比ではない。明らかにソレを専門としたプロフェッショナルだ。目の前の人物の右腕という噂は嘘ではないようだ。

だからこそ疑問に思う。そんな彼等が来ていることで自分達がそれなりの評価を受けていると判断した自分のボスは流石だが、なぜ彼らは弱小組織たる自分達を気にかけるのか。それが警戒からであったのなら、大手とはいえ単なる下部組織に甘んじるつもりのない自分たちの野心を見抜かれていることになる。

「これで終わりだな。じゃあな、さようなら、ごきげんよう」
「お待ちを」

話がまとまり、通信を切ろうとした相手を止める。自らのボスのその行為にクロノスタシスは汗が吹き出てきた。

案の定不機嫌になった男は眉を顰めてしまった。

「なんだ」

「もう一つ、お話が」

「早く言え」

「それでは……クスリ以外のルートも使わせて頂きたいのです。我々死穢八齋會に彼が

使つていた全てのルートの管理を任せて頂きたい」

「……ほう」

想定していなかった話に愕然としてしまう。自分たちが始末した人間は腐つても組織の流通ルートの一部を仕切る幹部。その全てを欲するなど明らかに度が過ぎた要求だ。何よりこの手の野心を見せつけるのは余りに早計過ぎる。狡猾な彼がそれを分かっているはずもないのに。

明らかに変わった場の様子に全員が身を固めた。一触即発。この空気を仕事柄彼等によく理解していたが、自分たちの進退がかかった場の経験は数える程しかなかった。

「清貧さを美德とする人間よりは余程好感が持てる。しかし許容量を超えれば必ずバグというものが起こる。私はまだ君を計りかねているぞ？」

「消失弾を更に推し進めた『個性破壊弾』のサンプルと、その実験データをご用意出来ませぬ」

懐から一発の弾丸を取り出した。箱と布に過剰に包装され、鈍く光っているソレに視線が集まる。

極秘中の極秘である自分たちの切り札を明かしたことに、側近たちは更に冷や汗を流す。ここに来て必死に秘匿していた情報を大胆に明かした若頭の意図を察した玄野は思わす唸った。

（一部では組織で意図的な噂を漏らす程度であった。どこまでが賭けだったのかは分からないでありやすが、今日の会談が成立した事を含め全てが若頭の計算か。大したものだよ、廻）

モニター越しの反応を見ると、指を組んで何やら考えている様子だった。あくまで玄野達側からの主観だが、双方の利益とこちらの誠意を乗せて考えればギリギリ天秤に乗せられなくはない。少しの間思案すると、組んでいた指を離れた。

「組織とはプログラムのようなものだ」

モニター越しに向き直った男の眼は、こちらを見ているようで、全く別の何かを測っているようであった。軽薄なフランス被れの皮を脱ぎ捨てた先に見える本性に、手袋の男を含め全員が体を強張らせる。

「そしてその中にいる人間はコードの1行1行だ。それらが組み合わさり、システムになる。少し詩的だが、私の持論だよ」

僅かではあるが、重心をずらした双子に気付いたものは懐に手を伸ばす。

「君たちは社会というシステムから外れた漂流者だ。ゴミと呼んでもいい。システムは常に更新され、いつでもどこでもゴミは生まれて溜まっていく。しかしそれらを捨ておくのは心苦しいので、効率的に運用しようと気づく人間がいる。そうしていくことで気付けばあたらしいプログラムのま^{データベース}とまりが出来ていく」

言葉通り詩を謳うように言葉を並べていく。極まった緊張感の中、手袋の男とモニターの男、彼等二人だけが平然と喋り、聞き入っていた。

「気付けば誰も全てを理解することのできないブラックボックス。蜂の巣状に、フラクタルに、メツシユに仕上がる訳だ。そして我々はその中を泳ぐ魚だ。しかしその中でもルールがある。力持つ者と持たない者では扱えるルールは違う。そこから落ちたコードの例外処理はどうなるか、わざわざ説明するまでもないだろう？」

「どうすれば？」

「権限が欲しければ示したまえ」

「今までの献身では足りない」と

「君の得意なプレゼンだよ。その銃弾の力を見せて欲しい。幸いここにはお誂え向きのゲストをそのゴミトラッシュが呼んでいる」

「……ヒーロー相手に明かすには不都合しかありませんが」

「彼等は二手に分かれている。ここにいるのはゲームに相応しい程度の駒たちだ」

「ゲームですか……」

「そうだゲームだ。パーティにはつきものだろう。楽しみたまえ」

「ここに來ているのはヒーローの中でも屈指の武闘派であるギャングオルカ事務所。例え一部とはいえ、自分たちにとっては戦力的にも侮れる相手ではなく、何よりも情報

が漏れた際のリスクが大きすぎる。

突きつけられた条件に怒りよりもたじろぐ面々を無視して、小さな声で呟かれた声を玄野は聞いた。

「ゲーム…ゲームだと…病人め」

顔を上げた先にいたのは自らがよく知る、燃え滾る野心と狂気。それを知って尚支えると誓った彼がいた。

「承知しました。きつとご期待に沿えるプレゼンをしてみせます」

「そうか。最近の若者は皆優秀で嬉しいよ。若者の台頭は喜ばしいことだ。ここにいるソレの部下^トたちは好きに使うといい。私からのご祝儀^{ラッ}だよ」

「ええ、ありがとうございます」

言うや否や、振り返って扉へと向かう手袋の男。それに続いてマスクの男たちも去って行く。残ったのは、モニターに映る男と白い双子のクツクツと笑う声だけだった。

悪気はなかつたなんて言つて心底納得する奴はいないんだぞ

サイケデリックな音楽な鳴り響く空間。多彩な光が降り注ぐダンスホール。黒い男スミスと仲間二人が空から降り立つと、群衆から何人かの男が群がってくる。

それを弾き返すかのように撃ち抜き、また時には比喻ではなく本当に弾いて放りながらスミス一行は前進する。

「出すぎるなよスミスー！」

そんなイケメンボイスも客の歓声や悲鳴、音楽と共に流される。

ひたすらに自分たちの得物を振るい、襲つて来る暴力を更なる暴力で塗りつぶす。これこそ正にギャンブル流。彼の指導を受けた者の中には、手にした力を然るべき時に振るうことに躊躇う人間などいないのだ。なにがソフトパワーだ、そんなもんクソと同じだ。

ガタイの良いスミスが先頭を行く。途中何人かが襲つて来るが、銃を胸元に引き、斜めに構えながら進んでいくスミスが即座に反応した。新たに教わった戦闘法で周囲の

人間を巻き込まぬよう、時には相手に銃口を押し付けて発砲して無力化していく。

撃たれた相手がヤバイ？ でえじようぶだ。気合が入ってなきやヴィランってのはやれねえ。そんな感じで相手を信用して引き金を引く。

当初は催し物だと思っていた客も、異常事態に気付いて逃げ出し始める。その群れは徐々に大きくなり、やがてはスミス達もその波に飲み込まれる。

まさしく狂乱怒涛。まさしく驚動天地。全ては計算通りだ。こういつときやなんとかなる。

目の前のヴィランと多分ヴィランっぽい奴をちぎっては投げ、ちぎっては投げる三人組。どうしてこうなったのか。その理由はスミスの頭がハイになる（揶揄ではない）少し前にあった。

|| || || || || || ||

スミス警備中。

特に何事もなく時間は過ぎ、ボスたちの交戦も味方側に負傷者も出ず、あっさり終わったと連絡があった。相手のヴィランに同情しつつ安堵の息をつく。

「9割方任務が終わったようなものだけど、最後まで気は抜かないでね」

そういうマワリ先輩だったが、明らかに今までより雰囲気柔らかくなる。それから雑談も許され、警戒は続けつつも他愛のない話に花を咲かせる。ティラミスは……だめですよ、はい。

「マワリ先輩って彼氏とかいるんですか？」

「は!? え、ええ……いい、いないよ。今はほら、忙しいしね」

「そうなんですかー。マワリ先輩って美人だし、オレ達後輩から見てもモテそうなのに、な、スミス」

「イエア」

いいぞーパイセン。よく聞いてくれた。

「それじゃあ気になる人とかっているんですか? いないんだったら大事ですよ」

「え、なんで？」

「そりゃあ先輩を狙ってる人は大勢いますからね」

「それはないっしょー。わたし告白とかされたことないし。ヨーくんも言ってくれるなあ」

「嘘じゃないですよ。それならオレ達がしてあげましょうか? な、スミス」

「イエア」

こっさりガッツポしながら茶化すヨー君。しかしね、コナン君ばりに真実を見つけてしまった俺にはワンチャンあるとは思えんよね。

いや、でもいい女にはライバルがいて当然だしな。ネオばりのラブロマンスを目指すなら、オレもグイグイいかんとな。そんな勇氣はないんですが。

そして一時。学生らしい雑談に笑いあう。お互いがヒーローとしての仮面をずらして素顔を覗かせる。その半分だけ覗かせた顔が、真に俺を受け入れて認めてくれたのだと感じて嬉しく思う。

そんな感慨に浸っていると、急に目の前の二人がヒーローの仮面を被り直す。

なぜDC映画は路線変更したのか等というしようもない話を続けつつ、マワリ先輩が目配せした。

会話を続けながら周囲を見渡す。一見何も変わらない様に見えるが、あることに気付いた。

各組織のボディガードが消えている。演奏も止み、徐々に通常の客も誘導されるように掃けていった。これは一体……

「嘘でしょ、本気なの……」

小さく漏れた言葉が耳に入る。しかし先程までとは比べ物にならない緊張感にその意図を問いただすことも出来ない。

先程まで食事を運んでいた白服のボーイたちが集まってくる。注視するまでもなく、その懐は皆膨らんでいた。

彼らはどうもオレ達の案内はしてくれないようで、一定の距離のところまで止まった。恐ろしいまでの静寂。ここまで来れば嫌でも分かる。懐の銃に手を伸ばし、いつでも抜けるようにする。

誰がしたのかは分からないが、一つの呼吸音が聞こえた。

その瞬間、銃を引き抜いて射撃する。混じりつけなしの銃声が響き、銃を抜いたボーイを射撃した。ゴム弾なので死なないだろうが、これはデザートイーグル。一発で動けなくなる代物だ。

続けて2人、3人と。一発も外しはしない。一応ギリギリまで相手の意思を確認したつもりだが、コイツら全員迷うことなく殺しにきてやがる。

次々と仕留めていくが7発撃って弾切れを起こす。絶大な威力のデザートイーグルだが、現代の銃でたった7発しか装填できないのは本当にどうかと思う。今時そこいら

のチンピラヴィランですらグロック持ち歩いてんだぞ。

ソムリエさんには悪いけどさ、7発とかリボルバーに毛が生えたようなもんじゃん。毛が生える……あれ、なんかオレに似合ってる気がしないでもないような。

7発しかないから沢山いる敵を普通に倒し切れてないんだけど、全く心配はしてない。

弾切れに気付いた敵がこちらに銃を向けるが、後ろから2発の銃声が響いた。見事なダブルタップで敵を倒したのはマワリ先輩。真堂先輩が組み伏せた一人にも容赦なく止めを撃って気絶させている。

ソムリエ教官の弟子だけあり、彼女も銃の扱いは優れている。見ればもう片方の手でトンファーから飛輪を放ち、周囲の敵を一掃していた。

早撃ち合戦を制し、ひとまずの安全を確認するとすぐさま指示が飛ぶ。

「ボスに連絡を」

「……繋がりません」

「スミスくんのは？」

「一帯に妨害電波が」

「他の皆に合流する。通信は続けて」

会場から出ようとすると、一番大きな通路から足音が連なつて聞こえてくる。

「着いてきて」

マワリ先輩が駆けだす。それを追いかけているが、真堂先輩が話しかけてきた。

「随分と遅いオーブンセレモニーだな」

「ウエルカムドリンクは鉛玉で」

「ここぞとばかりに二人で頷き、グータッチ。前に行く先輩から溜め息が聞こえた。」

完璧という言葉ほど信用出来ないものはないんだぞ

スミス、廊下を爆走中。

護る側の人間に襲われる。今までヒーローと表面上ではあるが上手くやり、徹底的に表に出て来なかったというのに。そんな人間がこんな大胆な行動に出る意味が分からない。

分からないが真堂先輩と目が合ったのでそれらしいことを口にしようとした瞬間、マワリ先輩が睨んできた。途端、キリつとする真堂先輩。コノヤロウ。

後ろの追手の足音は近くも遠くもなっていない。このままなら逃げ切れる。この先の扉を開ければ下への階段が見える筈。そう思って勢いよく開け、駆けだすとそこには……

「ん？」

「これは……」

立ち止まり、盛大に舌打ちするマワリ先輩。そこは別のホールだった。道を間違った

なんてレベルじゃない。事前視察で場所。別の階どころかさつきまでいたホールから離れた別館だ。

「やられたかな」

この、本来ならあり得ない別の場所をドアを使って繋ぐ個性。ここに来るときにオレ達が体験した個性だ。

「こつちもダメですね」

窓を開けて確かめる真堂先輩。ちらりと見えた光景は、窓の先から何故か下に広がる廊下。まるでトリックハウスを見ているようである。

自分たちが来たドアから足音が迫る。逃げようにもここから見えるもう一つのドアからも足音が聞こえてくるのだから全くどうしようもない。

どちらかの通路にこちらから出るか、ここで迎え撃つか。リーダーであるマワリ先輩の判断を待つ。彼女が口を開く瞬間、アナウンスが流れた。

『今日はパーティなだけあってよく客人が廊下をうろついている』

冷たい、聞いたことの無い声。

『歓迎しろ』

隠し切れない悪意。

『くれぐれも楽しませることを忘れないように』

アナウンスが途切れた瞬間、前後から「彼ら」がやってきた。

その手には鉈やナイフ、斧などの凶器と、それを扱うに足る狂気を備えて。

沈黙。一定の距離を保って、室内に緊張が満ちる。獲物を前にした獣のように息を整える。

それらを前にしてオレは最早癖になった動作をする。スーツを整えながら首をならした。

真堂先輩は頭を振り、黒のサングラスを着けなおす。

そしてマワリ先輩はトンファアを回し、可愛らしい声で呟いた。

「……クルクルクルリ」

それを合図に雄叫びを上げながらヴィランたちが突っ込んできた。3人で背中を預け合いながら、負けじと全員で声を上げて迎え撃つ。

勢いそのままで振り下ろされる鉈を躲し、蹴りを入れる。そのまま足で追撃しようとしたが、切り替えて横に払う。足が隣に迫っていた別の敵の鉈を弾き飛ばした。更にその後ろから迫る二人の凶器を躲しながら急所に拳を何回か叩きこむ。

雪崩の様に次から次へとくる敵の攻撃。武器を持っている以上当たるわけにもいか

ず、受けや躲しにミスは許されない。敵を減らそうにも、他方から来る敵に一人一人止めを入れる様なタイミングはなく、有効打を少しづつ叩きこむのがやっとだ。

言葉にもならない獣の声。目の前の相手を殺すことだけを考えた人間はこうまで人を捨てられるのか。殺気というよりも狂気に憑りつかれた目の前の人間に畏怖を覚えるが、体は勝手に反応してその殺意を迎え撃つ。

前後左右、一人だけではなく、二人、時には3人同時に迎撃。時たま来る飛び道具や投げてくる鈍をはたき落とし、じわじわと相手を削っていく。

一対多。ボスの事務所で訓練してなかったならまず間違はなく対応できずに死んでいた。泥臭く、恰好など気にせず、しかし冷静にこの波に抗う。それを教えてくれた、先輩達に感謝するばかりである。

敵はオレに武器を弾かれてもそれを取りに行くことをしない。獣は獣なりにこの波を途切れさせたらいけないと知っているのだ。

オレの個性も近接戦では活かせることはない。躲し切れず何発かもらうが、その度に倍返しと言わんばかりの豪打をくれてやる。

止めをさせているのが殆どいえないとはいえ、オレの一撃も生ぬるいものじゃない。コンクリートを砕き、鉄棒を凹ませる一撃をもらっても彼等は立ち上がって襲って来る。それがアドレナリンのせいなのかヤクでぶっ飛んでるのは知らないが、とにかく精神

が磨り減っていく。なにせこっちは少しでも乱れたらそこから一気に攻め込まれる。そうなったら取り返しがつかないだけでなく、オレの守っている陣形の一角が崩れて後ろの二人も死ぬことになる。

隙を見つけてスライドキックで敵を突き放す。その際に視界に入った先輩たちの姿。正直、後ろを見ることに恐怖を覚えていた。三人の陣形が崩れることじゃなく、先輩たちが傷つく姿、死ぬ姿を見ることに恐怖していた。

結論から言おう。心配なかつた。

真堂先輩は「ハッハー!!」と引き撃った笑いで自分を鼓舞しながら敵と戦っていた。両腕の無敵手甲で真堂の拳ならぬ振動拳(最初聞いた時は失笑した)を叩きこみつつ、時折来る銃撃にはガーベルコマンドーで対抗していた。どうやら一角を相手取る分なら心配なさそうだ。

マワリ先輩はなんかそもう緑の運命のツ〇イーばりに戦ってた。恐ろしい、これがプロヒーローを控えている者の実力なのか。

となるとぶっちゃけこの中でヤバイのは俺かもしれない。敵さんもそれが分かっているのか、心なしこちらに集中しているような気がしないでもない。

徐々に敵の包囲網が崩れ、ゴールが見えてきた。脱出を図るべく視線を逸らした瞬間、物凄い勢いで迫ってくる球体。殆ど直感で個性を発動して避ける。

耳障りな音と共に碎ける床。大理石で出来た床に大きな罅。それを生み出したのは、深々と突き刺さった野球ボールだった。

「……ボール。取ってくれるか？」

そこにいたのは、野球バットを担ぐ年若い男の姿。これまでの有象無象とは違う。明らかに実力者の雰囲気。

『ホームランボーイ』

事前に与えられた資料に合った。最近ヒットマンとして名を上げている男だった。

「くうッ!!」

マワリ先輩の声。視界の端に入ったのは体から血を垂らす先輩の姿。さつきまで無双ゲーしていた彼女とは思えない姿だった。そしてその先にいるサングラスをかけ、両手に金槌を持った女。

『ハンマーレディ』

ホームランボーイの妹であり、彼女もまた名のあるヒットマンである。

ホームランボーイはオレに、ハンマーレディはマワリ先輩から目を逸らさない。他の

連中は役割を心得たのか、それぞれの相手を任せて真堂先輩にまともって襲いかかる。ごくりと息を飲んだ瞬間。ホームランボーイが取り出した硬球をバットで打つてきた。

まるで野球のノック。ふざけた攻撃だが先程の一撃を見ている故に汗を散らしながら全力で避ける。

高速で動く体の横を過ぎるボール。その風圧だけでどれほどの威力か分かってしまう。ボールの硬質化？ バットを使ったエネルギーの操作？ どんな個性なのかは知らないが、とんでもない殺傷能力なのは間違いない。

ある意味で、彼の相手が俺でよかった。この攻撃を躲すのは他の二人では肝が冷えることだろう。

ホームランボーイは攻撃を躲されたことに舌打ちするとボールを3つ取り出した。嫌な予感と共に、金属バット特有の甲高い打撃音を軽快に鳴らす。

サングラスをクイっとしてそれらを待ち構える。スローになった世界。ボールの軌道から体を逸らす。名のある殺し屋だけあって素晴らしい技だが、この高速分身に飛び道具は通用しない。そう思った瞬間だった。

——ボールが、曲がった!?

変化球の様に軌跡が変わっていく。それに動揺しつつ、体の動き方を変える。一つ、二つ。体の悲鳴を聞きつつも死にももの狂いで動く。しかし気付くのが遅かった。一つだけ躲し切れないボールがあつた。

俺のミス、というより直前までボールの変化を気付かせないような敵の技術を素直に称賛するべきなのだろう。オレはこれからくる痛みに覚悟を決めた。

鈍い音が響く。体の芯まで響くような嫌な音だ。体を支えられず、地面に蹲る。

ホームランボーイは会心の当たりを確信した打者のようにゆっくりと近づいてきた。

俺の前で立ち止まると、打席に入ったようにバットを動かして構えた。俺の脳天に振り下ろすつもりなのだろう。先輩たちは目の前の相手に必死で余裕がない。誰にも邪魔されず、このまま彼の思う通りオレは頭をがち割られる。そんな未来を幻視した。

バットが振り下ろされる。オレは下を向いているのでそれを感じるだけ。バットが近づいてくる。頭に届く。その瞬間……

ガキン、とバットが地面を叩いた。

頭を横に動かして辛うじて躲したことに驚くホームランボーイ。慌ててもう一度叩

き下ろすが跳ね起きの動作で躲し、そのまま立ち上がる。

至近距離で目線が合い、ホームランボーイが凶悪な笑みを浮かべる。

「2死満塁つてところか？」

直後、繰り出されるバットのスイング。互いの息を感じるほどの近接戦。バットを始めて蹴りや頭突きも含む猛攻が始まった。

ホームランボーイは必死でバットを振り回す。が、ある時は躲され、ある時は出だしを抑えられて掠らせることも出来ない。

決してホームランボーイの格闘技能が低いわけではない。しかし武器も含めた格闘に関しては幼少より色々馬鹿げた鍛え方をしてきたスミスに及ぶべくもなかった。

純粹な格闘戦になった時点で、勝敗は決ってしまったのである。

大振りになった所にカウンター一閃。隙についてホームランボーイを沈めた。

「ゲームセットだ」

油断なく確実に倒したことを確認して一息つく。

強敵だった。ボスに先輩、ソムリエさんたちの特訓でタフになっていなかったら間違いないで殺されていた。

ボールを受けたあの瞬間、避けるのを諦めて完全に受けの体勢に入った。

タフさと言っても種類は色々ある。オレが先輩たちから指導……もといリンチを受ける中でそれを学んだ。

痛みに体を慣れさせ、その上で気合で耐える方法。ダメージを受け流す技術の他に、ひたすら気持ちで耐える根性。攻撃のインパクトの際に体を適応させる技法と共に、強い心で攻撃を受け入れるメンタル。

仲間と共に、数多のバケツに戻した夜を越えてオレはやったのだ。泣けてくる。サイファーなら耐えられなかった。スミスだからこの逆境に耐えられた。今ならそう思えなくもない。スミスボデイ万歳。

一連の攻防でスーツのボタンが取れてしまった。乱れた服装と呼吸を整えてふと振り向くとマワリ先輩もハンマー女をKOしてた。勝利の雄叫びを上げる先輩の顔はとも見てはならない形相だった。なのでスミスは見ないことにしました。かしこ。